
都留たんっ！

栗山ぷにねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

都留たんっ！

【コード】

N9076N

【作者名】

栗山ぷにねこ

【あらすじ】

以前書いていた「都留男ろくこめでい〜」「おいら、出淵都留男」の2作品の設定を練り直し、リメイクしました（*^ ^*）
商店街のおもちや屋さんで働くちっこくてぼつちやりしててぷにぷにした35歳のおやじ、出淵都留男でんげんおやぢが突然現われた謎のおやじと遊んだり、20代後半の女性に大人の女の魅力をアピールされたりしつつ日常を楽しむお話（^^）

登場人物紹介

>i11549<rubby><rb>1637<

出淵</rb><rp></rp></rb><rt>でぶち</rt><rp></rp></rb><ruby>都留男</ruby>(35歳)

この物語の主人公。若星町わかほしちょうに住んでいる元気いっぱいのおっちゃん
で、小柄でぽっちゃりしている。普段は商店街にある「BIG B
ANG」というおもちゃ屋さんで働いている。誰とでも仲良くなれ
る性格の持ち主で、困っている人を見ると放っておけない。

>i11851<rubby><rb>1637<

山口</rb><rp></rp></rb><rt>やまぐち</rt><rp></rp></rb><ruby>大己</ruby>(35歳)

都留たんが公園で知り合った、ずんぐりとしたおっちゃん。友達に
すすめられて、目も髪もピンク色にしている。商店街の近くにある
マンションに住んでいる二トで、色んな物の作り方のコツを知っ
ている。

>i11548<rubby><rb>1637<

腰山兵</rb><rp></rp></rb><rt>こしやまへい</rt><rp></rp></rb><ruby>吉</ruby>(40歳)

都留たんの幼稚園時代からの幼なじみで、彼と同じく小柄でぽっち
やりしている。現在は恋人として同棲している。都留たんを温かく
見守る一方、「都留男は俺だけのものだ！」という独占欲も持つて
いる。普段は友人の露つゆいぬと共に「H&A」という本屋さんを経営して
いる。

> i 1 2 2 5 7 < r u b y > < r b > 1 6 3 7 <

井</rb><rp></rp></rb><rt>い</rt><rp></rp></rb>></ruby>ノ内千亜希うちちあき(27歳)

都留たんが海で出会った女の。恋愛小説家で、常に「愛とは何か」「理想の愛とは」といった事を追求しており、そのせいでよくおかしな言動や行動をする。都留男とのひと夏の劇的な出会いを忘れられず、ついに彼の向井の家に引越して来てしまった。

> i 1 1 5 3 7 < r u b y > < r b > 1 6 3 7 <

光</rb><rp></rp></rb><rt>ひかり</rt><rp></rp></rb>></ruby>野原葉亜人のきはあ(35歳)

都留たんの小学生時代からの幼なじみで、彼と同じく小柄でぼつちやりしている。「他の人とは違うんだぞ!」という事を見せつける為に、髪は黄色とオレンジのグラデーションにしている。とにかくハイテンションで、楽しい事や面白い事が大好き。普段は幼なじみのきよつちゃんと「きよおはあと」というお笑いコンビを組みつつ、商店街にある「GAME HUNTER」というゲームセンターでバイトしている。

> i 1 1 8 5 0 < r u b y > < r b > 1 6 3 7 <

湯</rb><rp></rp></rb><rt>ゆ</rt><rp></rp></rb>></ruby>川勝次かわかつじ(35歳)

都留たんの幼稚園時代からの幼なじみ。中肉中背で、普段は素っ気ない態度を取っているが、本当は心配性で、いつも都留たんの事を中心に掛けている。ロックをこよなく愛し、「CRUSHERS」というロックバンドのボーカルとして活動しつつ、商店街の「HEA

r p v) < / r p v < / r u b y > 民之亮 (35 歳)
隣町の夜月町ヨヅキマチに出来たライバル店「ISLAND」の店員。自称「
都留男の永遠のライバル」だが、彼と同じぐらいチビデブで、彼よ
りもブサイクである。何かと都留たんにちょっかいをかけてくるが、
逆に彼からイジられてしまう。

> i 1 1 5 5 0 < r u b y > < r b > 1 6 3 7 <

田之島 < / r b > < r p > () < / r p > < r t > たのしま < / r t
> < r p > () < / r p > < / r u b y > 仁之 (40 歳)

そらたるくさんの高校時代の友人。高3の頃「いつか店を持って、
お前を見返してやる！」という約束を彼とし、今年になってやっと、
夜月町に「ISLAND」を開店した。ぽっちゃりした体型で、
民之亮の恋人でもある。

> i 1 2 2 4 4 < r u b y > < r b > 1 6 3 7 <

岡光 < / r b > < r p > () < / r p > < r t > おかみつ < / r t >
< r p > () < / r p > < / r u b y > はるか (20 歳)
「ISLAND」でバニーガールのバイトをしているフリーター。

> i 1 2 4 3 8 < r u b y > < r b > 1 6 3 7 <

朝 < / r b > < r p v > () < / r p v < r t > あさ < / r t > < r p
> () < / r p > < / r u b y > 林清雄 (35 歳)
都留たんの中学時代からの幼なじみで、はあとんの相方。小学生の
頃まで大阪に住んでいたので、関西弁でしゃべる。はあとんを時に
温かく、時に厳しく見守っている。

> i 1 2 4 4 0 < r u b y > < r b > 1 6 3 7 <

快裸</rb><rp></rp><rt>かいら</rt><rp></rp></ruby>露あらいわ(40歳)
兵ちゃんの幼なじみで、商店街と一緒に「H&A」という本屋さんをしている。サングラス愛好家で、いつもサングラスをかけている。温厚な性格だが、下ネタ大好き。兵ちゃんと同じぼっちゃりした体型。

>i12236<ruby><rb>1637<

吉水</rb><rp></rp><rt>よしみず</rt><rp></rp></ruby>しなこ(35歳)

都留さんの小学校時代からの幼なじみ。男勝りで、全く女らしさがないと思われる。普段は商店街の中にある父の代から続く八百屋さんで働いており、昔から商売人魂を叩きこまれているので、お金にはうるさい。かっちゃんとは昔から口ゲンカばかりしている。

>i12439<ruby><rb>1637<

男盛</rb><rp></rp><rt>おとこもり</rt><rp></rp></ruby>漢太かんた(40歳)

「BIG BANG」の向かいで定食屋さん「男盛食堂」をしている兵ちゃんやそらたるくさんの同級生。男らしい顔つきで、体の至る所に椿の入れ墨を入れているが、心は乙女である。自称「ミス若星町商店街」だが、誰も認めていない。怒ると男に戻り、凄まじい勢いを見せる。

>i12238<ruby><rb>1637<

優田</rb><rp></rp><rt>ゆうた</rt><rp></rp></ruby>

r p >) < / r p > < / r u b b y > 健介 (3 5 歳)
商店街でカメラ屋さんをやっている男。自称「若星町一の地獄耳ジ
ヤーナリスト」で町内会の会報の編集委員もしているが、妙な噂話
ばかり書くのでひんしゅくを買っている。

> i 1 2 3 4 6 < r u b b y > < r b > 1 6 3 7 <

目加田 < / r b > < r p >) < / r p > < r t > めかた < / r t >
< r p >) < / r p > < / r u b b y > 岳一 (4 0 歳)
都留たんが勤めている「BIG BANG」の副店長さんで、普段
は店の奥で事務をしている。店の中で最も厳しく、売り上げからそ
らたるゝさんの男関係に至るまで何かと口うるさい。

> i 1 2 5 0 2 < r u b b y > < r b > 1 6 3 7 <

五嶋 < / r b > < r p >) < / r p > < r t > どうとう < / r t > <
r p >) < / r p > < / r u b b y > 烏美人 (4 0 歳)
そらたるゝさんと岳一さんの学生時代からの友人。

普段は「BIG BANG」の奥で岳一さんと事務をしている。
そらたるゝさんのようにエロいわけでもなく、岳一さんのように口
うるさいわけでもなく、存在感が無いのが悩み。

> i 1 6 0 0 7 < r u b b y > < r b > 1 6 3 7 <

向上 < / r b > < r p >) < / r p > < r t > じょうじょう < / r t
> < r p >) < / r p > < / r u b b y > 上夫 (7 7 歳)
若星町の町長。常に町の活性化について考えており、その為ならど
んな手段も選ばない。

んな手段も選ばない。

> i 1 3 8 1 5 < r u b b y > < r b > 1 6 3 7 <

日和 < / r b > < r p >) < / r p > < r t > ひわ < / r t > < r

p>(</r p></r u b y>恒也(35歳))
夜月町にあるツタの絡まる不思議な館に住んでいる男性。都留男達の色好学園時代の同級生だったらしいが、残念ながら誰からも覚えられていなかった。

> i 1 2 0 0 1 < r u b y > < r b > 1 6 3 7 <

黒巻</r b><r p>(</r p><r t>>くろまき</r t>
< r p > (</r p></r u b y>乱蔵(10歳))
そらたるくさんの甥っ子で、都留男や葉亜人が出た私立色好学園しりついろよしがくえんじょうがっこう学校に通う4年生。全寮制で、寮が若星町にあるのでちよくちよく「BIG BANG」にそらたるくさんの様子を見に来ている。伯父に似て太っており、その事を気にしている。

> i 3 2 2 6 3 < r u b y > < r b > 1 6 3 7 <

夜露</r b><r p>(</r p><r t>>よるく</r t><r p>(</r p></r u b y>健吾(12歳))
夜月町にある兵吉や仁之も出た全寮制男子校、男一匹学園おとこいっぴきがくえんに通う6年生。若星町や夜月町の一帯で不良として知れ渡っており、数人の子分もいて、同級生や下級生から恐れられている。乱蔵の事が好きでよく色好学園の寮に来ているが、彼から嫌われているのでその度に対立している。

> i 1 2 3 1 1 < r u b y > < r b > 1 6 3 7 <

世木田</r b><r p>(</r p><r t>>せきた</r t>
< r p > (</r p></r u b y>超自(10歳))
色好学園小学校の寮で、乱蔵と同じ部屋の男の子。(彼は友人だと認めていない)都留たんともよく遊び、「BIG BANG」にも

よく来る。子供らしいが、太った男の子やオヤジの裸が好きだったり、怒ると恐かったりとちよつと変わった所もある。健吾の子分を熱望しているが、なかなか相手にしてもらえない。

> i 1 2 2 3 7 < r u b b y > < r b > 1 6 3 7 <

猪狩 < / r b > < r p > (< / r p > < r t > いかり < / r t > < r p >) < / r p > < / r u b b y > 久兼 (ひさかね) (1 4 歳)

色好学園中学校に通う2年生。本当はアルバイトは禁止だが、柔道部の部費の為に「BIG BANG」でバイトしている。乱蔵達小学生の良き遊び相手や相談役になっている。

> i 1 6 3 7 9 < r u b b y > < r b > 1 6 3 7 <

出淵 < / r b > < r p > (< / r p > < r t > でぶち < / r t > < r p >) < / r p > < / r u b b y > 夢彦 (ゆめひこ) (3 4 歳)

都留男の弟で、チビデブホモの兄を見下している。かけるとは中学時代からの幼なじみ。居化戸市 (いかとし) でシステムエンジニアをしていたが、今は色好学園小学校の寮の管理をしている。

> i 3 2 3 1 8 < r u b b y > < r b > 1 6 3 7 <

出淵 < / r b > < r p > (< / r p > < r t > でぶち < / r t > < r p >) < / r p > < / r u b b y > 専心 (せんしん) (1 0 歳)

夢彦の息子。都留男がチビデブゲイという理由で、10年間隠し子として育てられてきた。明るく好奇心旺盛で、都留男を「師匠」と呼んでおり、自分もチビデブゲイになりたいと思っている。超自とはよく太った男性の話題で盛り上がっている。

> i 1 6 0 0 6 < r u b b y > < r b > 1 6 3 7 <

出測</rb><rp></rp></rt>>でぶち</rt><
rp></rp></ruby>留津文</rt>>65歳
都留男の父親で、理亜流町じありゅうで居酒屋いざやをしている。いつも都留男の事
を考えている、優しいお父さん。

>i16384<ruby><rb>>1637<

出測</rb><rp></rp></rt>>でぶち</rt><
rp></rp></ruby>ららら</rt>>64歳
都留男の母。とにかく親バカで、息子達にかわいい格好をさせるの
が大好き。

第1話：でっかい砂山作るんだ

「さつきすんげえもん見たんだ」

おいらは早くあの事を話したくてうずうずしてた。

今日はお休みなので、家でみんなでお菓子を食べながらおしゃべりしてるのだ。

「何を見たんだ？」

兵ちゃんはお食べようとしてたポテチを置いてこっちに顔を向けてくれた。

話を聞いてくれる時の「どんな内容でもしっかり受け止めるぞ！」っていう目になってうれしい。

そこが兵ちゃんのいい所だ。

兵ちゃんは幼稚園の頃からずっとおいらの相手をしてくれる優しいお兄ちゃんだ。

血は繋がってないけど、おいらにとっては本物のお兄ちゃんとおなじぐらい大切な存在で、特別な存在でもある。

おいらが高校を卒業した時に「好きだ。一緒に暮らそう」って言うてくれたんだ。

顔がふつくらしてて目もおつきくて、いつ見てもかわいらしい。

体も丸くておなかがやわらかくて、つつい触りたくなっちゃう。

元々太かったのが、中年になってからさらに太くなっちゃったそうだ。

「今日食べるお菓子を駄菓子屋さんに買いに行つて、その帰り道を歩いてたら、超自ちやうじが公園から手を振ってくれたんだ。それであいつの方見たらでっかい砂山があつたんだよ」

「おっ、それはすげえな。で、どれぐらいでかいんだ？」

「こゝんなにでかいんだ。もうすげえぞ、天まで届くかもしれねえぞ」

分かりやすいように手で砂山の高さを再現してみせた。

兵ちゃんはとつても嬉しそうだ。

「じゃあ都留男つるおが声をかけなかったら天をも超えて宇宙まで行つてたかもしれないな」

「そうだなあ。空を超えて雲を突き抜け、地球まで脱出して宇宙に届く砂山……おいらもそんな砂山作りてえ〜！」

超ド級の砂山を想像して、胸がわくわくどきどきした。

はあ〜っ、いいな〜。

ほればれしちまうぜ。

「都留男はほんつと昔から変わらねえなあ」

「だって子供のままがいいんだもん」

「ぬあ〜にが「子供のままがいいんだもん」だ」

かつちゃんがトイレから戻ってきて呆れた目で見してきた。

赤いモヒカンと黄色の鋭い眼だけでもインパクト抜群なのに、「F A C K Y O U」って書かれててキスマークまで付いた黒いTシヤツがさらにインパクトを強めてる。

幼稚園時代からの大事なお友達で、兵ちゃんと同じぐらい付き合いが長いんだ。

「おめえいい加減歳考えろよ。もう三十五だぞ？」

「三十五とか六とか関係ねえよ」

「何回俺におんなじ事ばつかり言わせたなら気が済むんだ？」「関係ある」っていつつも言ってるだろ？」

「まあまあそうカリカリしない方がいいよ」

「大体、兵吉へいきちさんは甘やかしすぎなんですっ！ 一体いつまでこんな子供っぽい事ばつかり言わせるつもりなんですかつ？！」

なだめる兵ちゃんと詰め寄るかっちゃん。

「そこが都留男のいい所じゃねえか。少年時代の心を忘れずにず〜つと持つてる。勝次かつじくんもそんな所が好きだから三十年以上も付き合ってるんだろ？」

「バ、バカ言わないでくださいよっ！ 俺はこいつが何かしでかさなないように見張るためにですな、あの、その、だから」

おおつ、今日もきたな。

二人のやりとりを見てにんまりした。

かつちゃんはおいらの事が好きだっという話題が出ると、途端に照れちゃうのだ。

ここ以上のいじり所はねえ。今日もいっぱいいいじるぞお。

「ねえ、かつちゃん。つるりんの事好きなんでしょ？」

まずは立ち上がって体をくねくねさせてみる。

「おめえいい加減女のモノマネやめろっ！ それとかつちゃんって呼ぶなっ！」

ますます照れるかつちゃん。

おもしろえ。

よおつし、次はこれだ。

「え、つ、なんででちゆか？ おちえてよくかつちゃん」

「赤ちゃん言葉もやめろ！」

「ほんとと仲良しだなあお前ら」

兵ちゃんはこのこしながらその様子を見てた。

「そうだ！ かつちゃんも一緒に造らねえか？ 砂山」

「作るわけねえだろ。それとかつちゃんって呼ぶな」

おいら達は座ってポテチをかじり始めた。

かつちゃんも顔のほてりが治まってる。

> i 1 1 8 5 4 — 1 6 3 7 <

「でも何だかんだ言って毎回来てくれてるじゃねえか」

「あれはおめえが人に迷惑かけてねえか見に行ってるだけだよ」

「え、つ、そんなに信用されてねえの？」

おいらはほつぺたをぶーつと膨らませた。

「信用はしてるよ。でもな、万が一って事があるだろ？」

「やっぱり信用されてねえじゃん」

ますますほつぺを膨らませるおいら。

「勝次くんは素直じゃないなあ」

「どういう事ですか？」

「本当は都留男が心配なんだろ？」

飲みかけたジュースを吐きそうになるかつちゃん。

「なあんだ、そういう事ならちゃんと saying してくれればいいじゃん」

「バ、バカッ！俺は別に心配なんかしてねえからなっ！」

またしても照れるかつちゃん。

「そんな事言つて、本当はしてるんだろ？ かつちゃん、ありがとう」

そう言つた途端、かつちゃんの顔がまっかつかになって火だるまみたいになつた。

「か、勘違いすんなよっ！ お、俺はその、か、感謝される為に、や、やっつてんじゃあ、ねえからなっ！」

この時のかつちゃんは男のおいらから見ても最高にかわいい。

「で、どうするんだ？ 砂山作るのか？」

「っ、造らねえって言ってるだろっ！」

赤くなつたままそっぽ向くかつちゃん。

「そっかあ。じゃあ今度おいらだけで、でっかい砂山造ろっか」

「そうだな。宇宙まで届く奴造れよ」

「おう！」

「ちよつと待て」

かつちゃんがこっちを向いてくれた。

「なんだ？」

「一人で公園なんて何があるか分かんねえだろ？ 前もブランコの順番でガキンチョと揉めてたし。じゃあねえから俺もついてやるよ」

「ありがとう！じゃあさ、あさつて造ろっ。おいらもお仕事お休みだしさ」

「分かつた分かつた。あさつてな」

「うん！ 約束だからな」

二日後

「うわ〜っ、やっぱりでけえな〜」

目の前に広がる砂場を見てわくわくどきどきした。

「ここにはよく来るのか？」

「うん。超自達から誘われる事もあるし、そうでなくても来るぞ」

「よくそんなバカみてえな事出来るなあ」

「おいらにとつてはバカみてえな事じゃねえもん！」

呆れるかつちゃんとふくれるおいら。

「へいへい。いいからさっさと造っちゃまえよ」

「おう。超自みてえなでつけえ砂山作るんだ」

「じゃあ俺はちよつとトイレに行ってくるぜ」

「いってらっしゃい」

かつちゃんを見送った後、さっそく砂を盛り始めた。

やっぱり、こういう子供っぽい遊びっていいよなあ。

親もお友達もお仕事先の人も何だかんだで温かく見守ってくれてるし、誰にも迷惑かかってないし、最高だぜ。

生きてるからには、こういう風に人生を楽しむべきだよな。

「あなたも砂山を作られてるんですね」

ん？ 誰だろう？

振り返ると、そこにはピンク色の髪の毛を立てたおっきい男の人がいた。

> i 1 1 8 5 5 — 1 6 3 7 <

縦じゃなくて横におっきい。

目もおっきくてピンク色だ。

雲が描かれた水色のTシャツを着てて、袖と首元にオレンジのラインが入ってる。

下は黄色のスポンに茶色いスニーカーだ。

「そうです」

「一緒に作りませんか？」

珍しい人だな。

まあ見たところ変な人じゃなさそうだし、別にいつか。

「いいですよ」

「ありがとうございます」

男の人はしゃがみこんだ。

水が入ったバケツとスコップを持ってる。

「水、混ぜましたか？」

「水？」

「砂のままじゃ山になりませんよ」

あっ、忘れてた。

久しぶりだからなあ。

「まずは砂に水を混ぜて泥にしましょう」

男の人はおいらが盛った砂に水をかけた。

「おつきくて丈夫な砂山を作るコツは、いかにちょうどいい具合に砂を湿らすかなんですよ。湿らせすぎるとドロドロになりますし、あまり湿らさないとバラバラになってしまっんです」

「そうなんですかあ」

この人何者なんだろう？

名前だけでもきいところ。

「あのお」

「はい」

「お名前は何とおっしゃるんですか？」

「山口大己やまぐちだいいきです。あなたは？」

「ぼくは出淵都留男でいづちです」

「ツルオさんですか。変わったお名前ですねえ」

「よく言われます。本当は動物の鶴に男って書く方になるはずだったんですけど、父が「それじゃあ書きにくくてかわいそうだろう」って言って「みやことめおとこ」って書く方になったんです」

「へえ、そうなんですか。あっ、じゃあ泥をこねて山にしていき

ましよう」

ヤマグチさんは適量の砂を取って、手でこね始めた。
おいらも適量を取って、こね始めた。

「見てください。上の方がありますよね」

「はい」

「これを手のひらでこうクルクル〜と崩していくんです」
言われたとおりにしてみた。

「こつやると上手くいくんですか？」

「そうです。崩れた砂がすそ野を広げて、その上に新しい砂を盛るんです。そうするととってもデカくてしっかりとした砂山が出来るんですよ」

「宇宙を超えますかね？」

昨日の兵ちゃんとの会話を思い出して、思わず言っちゃった。
変に思われるかな？

「その気になれば、超えることだって出来ますよ」
変に思われるどころかにつこりしてくれた。

うつつ、この人の笑顔かわいいよ。

ダメだ。おいらには兵ちゃんがいるんだから。

今までも何回も他の男の人を好きになって色んなお仕置きを受け
ちゃったし。

ああっ、でもやっぱりかわいい。

この人とず〜っと一緒にいたいなあ。

「どうかしましたか？」

「い、いえ。何でもないです」

「そうですか。そろそろ山にしていきましよう」

「楽しみですね」

「どんな山になるんでしょう？」

その後もどんどん泥をこねて山にしていった。

山はどんどんどんどん高くなっていった。

超自もこんな風に山を高くしていったんだなあ。

おいら達はもう大人だけど、あいつはまだ子供だから本当に心の底から楽しいんだらうなあ。

いや、大人でも心の底から楽しまなくっちゃ。

「だいが高くなってきたね」

「そうですねえ」

どこまで高くなるんだらう？

わくわくするなあ。

「乾くとひび割れますからまた水をまきましよう」

「はい」

「おめえ何やってんだ？」

気がつくど、かつちゃんが帰ってきた。

「あつ、かつちゃん。このヤマグチさんって人が、色々と砂山作りのコツを教えてくれるんだ」

「ぬあにが砂山作りのコツだ！ おめえ知らねえ奴に話しかけちゃいけねえって、昔からなんつかいも言ってるだらうがあ！」

ものすんごい勢いでげんこつが飛んできた。

「いってえ！」

「何か言う事があるんじゃないかねえのか？」

「ご、ごめんなさい」

「よおし。さっ、帰るぞ」

今度はおいらの腕をつかんで無理矢理引っ張り始めた。

「なんでだよ?! これからが本番なんだよ！」

「な〜にが本番だ！砂山ぐらい他の公園でも出来るだろ？」

「やだ！ ヤマグチさんと二人で作るんだ！」

「それだけはぜってえダメだ！」

「かつちゃんのいじわる！」

「いじわるで結構！」

もう、せつかくおもしろかったのに！

かつちゃんのバカーッ！

第2話・いざ、ヤマグチさんのおうちへ！

「この間のドッジボール面白かったよね〜」

「そうだよな〜。顔に思いっきり当たった時はもうどうしようかと思っただけだ」

今日のおしゃべりの相手は、小学校時代からのお友達のはあとんだ。

はあとの髪の毛はすごい。

黄色とオレンジのグラデーションがすごくきれいに並んでるのだ。なんでも「他の人とは違うんだぞ！」っていうのを見せたかったらしい。

「いやあでもいいよな。三十五になっても一緒に遊べるって」

ポテチを食べながら話すおいら。

この間はコンソメ味だったけど、今日はのりしお味だ。

「そうだねえ」

「ドッジボールもいいけど、蟻地獄もいいよなあ。昔よりも落ちるスピードはおさえけど、あのわくわく感は健在だな」

「ボク、この間遊んだよ」

「おっ、そうか。どうだった？」

「楽しかったよ〜。公園の蟻地獄の所通りかかったら、小学生に蹴られても蹴られても頑張っつてはい上がってる人がいて「こらーっ！」って注意したらボクまで落とされちゃったんだ〜」

「完全になめられてるじゃねえかよ」

「でもはい上がるの楽しかったよ。その後その人と色んなお話もしたし。目も髪の毛もピンクですっごいインパクトがあるんだよ」

目も髪の毛もピンク？

もしかして

「その人の名前、きいた？」

「うん。ヤマグチダイキさんって言うんだって」

やっぱり！

はあともヤマグチさんに会ってたんだ！

「おいらもこの間その人に会ったんだ」

「えっ?! ほんと?!」

はあとの目が輝いた。

「ああ。一緒に公園で砂山作ったんだ」

「わっつ、ボクも作りた〜い」

「今度作るうぜ。ヤマグチさんから色々コツを教わったんだ」

「うん！ あっ、そうそうヤマグチさんこの辺に住んでるんだよ」

「えっ?!」

それは初耳だな。

「そうだよ。商店街の近くのマンションに住んでるんだって」

「そうだったのかあ。普段から公園で遊んでるのかな？」

「結構よく来てるみたいだよ」

「また会いたいなあ。こないだはかつちゃんのせいで十分砂山を作れなかったから、今度は思いっきり高いのを作りたいなあ」

「もしかして、またかつじんに無理矢理連れて帰られちゃったの？」

「そうなんだよ。知らない人に会った時はいつつもそう」

「じゃあ会いに行こう!」

「えっ? その商店街の近くのマンションに?」

「うん! 蟻地獄で遊んだ後におうちに招待してくれたから場所知ってるよ」

「つてか招待されたんだ! すっげえー!」

「よおっし! じゃあさっそくヤマグチさんのおうちに行くぞー!」

「おーっ!」

数十分後

「ここがヤマグチさんのおうちだよ」

はあとはマンションの部屋の扉を手で示した。

でっかい白い扉で、横にはちゃんと「山口」っていう表札がある。

「ここに一人で住んでるのか？」

「そうだよ。結婚とかはしてないみたいだったよ」

呼び鈴が押され、山口さんが出てきた。

相変わらずインパクト抜群だ。

「あつ、いらつしやい。出淵さんにひかりのほ光野原さん」

「葉はあと亜人でいいよ」

「おつ、そうでしたか。失礼しました。さあどうぞ中に入ってくだ
さい」

「お邪魔します」

中に入るとリビングに案内された。

男の人の一人暮らしにしては結構広い。

向かって右側にダイニングテーブル、左側におっきなソファと
TV台がある。

普段はどんなお仕事してるんだろう？

「今お茶を入れますからその辺でくつろいでてください」

「ありがとうございます」

山口さんは台所の方に行った。

「立派な家だなあ」

「ボクも最初に来た時は広いからびつくりしたよ」

「結構稼いでるのかもしれないねえな。このソファも割と上等だし」

試しにソファに腰かけてみた。

ふつかふかで、思わず寝ころびそうになっちゃうほど気持ちいい。

「ボクも座っていい？」

「いいぜ」

はあとんが隣に座ってきた。

ただでさえ太いののに、最近さらにずっしりしてきたような気がする。

「前よりお腹出てないか？」

「え？ そうかな？」

「普段何食ってるんだ？」

「え〜つとね、ハンバーガーとかステーキとかラーメンとか牛丼とかフライドチキンとかかな。それでおやつがプリンとかシュークリームとかポテチとかドーナツとかだよ」
「どう考えても食いすぎだろ」

> i 1 1 9 1 2 — 1 6 3 7 <

「でも都留たんも何でも美味しそうに食べるじゃない
うつつ……確かにそうだ。」

兵ちゃんが毎日作ってくれるご飯も、お休みの日に食べるお菓子もとってもおいしくて、たくさん食べてたらいつの間にか「ぼっちゃりしてるね」って言われるようになってしまったんだ。

周りもなぜかおいらとおんなじぐらいかもっと太ってる人ばかりだ。

でもはあとんよりちよつとだけ痩せてる自信はあるぜ！

「そうだけど、おいらはちゃんと栄養バランスを考えてるからお前ほどは太らねえぜ」

「お待たせしました。こちらへどうぞ」

山口さんの声が聞こえて、おいら達はダイニングテーブルに移動した。

用意してくれたのはお茶とおせんべいだった。

「いったただっきま〜す」

かごから一枚とってかじりつく。

香ばしくてしょうゆの風味も良くておいしい。

「山口さんって、普段どんなお仕事してるんですか？」

食べながら訊いてみた。

「……服屋さんで働いてます」

「へえ〜、そうなんだ〜。どこななの？どこななの？」

「しょ、商店街から少し歩いた所にあるんです」

「どんな服を売ってるんですか？」

「か、カジユアルなものからフォーマルなものまで色々あります」
おもしれえなあ。

こいつともっと色んな事しゃべりたい。
兵ちゃんに紹介して、かっちゃんと打ち解けてもらって、みんな
で一緒に遊ぶのもいいなあ。

その為にはまず、敬語をやめる事から始めなきゃな。

「山口さん」

「はい」

「敬語でしゃべるの、やめませんか？」

「え？」

「何だか堅苦しいじゃないですか。もっと気楽にしゃべりましょう」
「よ」

「そうですね。では何とお呼びしたらよろしいでしょうか？」

「都留男でいいですよ。僕は「大ちゃん」って呼ばせてもらっていいですか？」

「もちろんです」

「これでもっと仲良くなったね」

はあとんはにこにこして楽しそうだ。

「そうだな」

おいらもにつこりした。

「都留男くんの髪の毛って、ふさふさしてて気持ちよさそうだね」

「これか？へへへ、雑誌で見てカッコいいかと思ってやってみたんだ。本当はふさふさじゃなくてつんつんっていうイメージだったんだけどな」

「そうなんだ」

「大ちゃんの髪の毛とか目とかは何でそんな色にしたの？」

「友達から「お前も目立った方がいい」って言われて、ピンクのカラーコンとヘアカラーを薦められたんだ。「すっごく似合ってる」って言われたよ」

「そんなすげえ色薦めるって事は、その友達の髪の色も派手なのか

「？」

「そっだよ」

「はあとおんなじぐらいすげえのか？」

「うん……もつとすごいね」

「わっつ、ボクでもまだまだなんだあ」

「世の中広いなあ」

「ふふふ、そっだね」

その後もおいら達は色々なお話をした。

お仕事のお話、家族のお話、趣味のお話、最近あったおもしろいこと

そうこうしてるうちに夕方になって、おいら達はマンションを後にした。

「楽しかったねえ」

「そっだな。大ちゃんとかちゃんと友達になれたし、またいつでも来てね」って言われたし、最高だったな」

「都留たん、また行こうね」

「うん。今度はおいら達がお菓子を持って行くんだ」

「わっつ、楽しみだね」

第3話：スライム作りたいつ！

ヒマだ。

ヒマでヒマで死んじやいそうだ。

ソファーに寝っ転がってクッションを抱えながら延々とそんな事を考えてた。

「どうしたんだ？ 昼間っからそんなところでゴロゴロして」

はたきでテレビの周りを掃除してる兵ちゃんが声をかけてきた。

「今日はあとなと二人で遊園地に行く予定だったのに、急にお仕事入っちゃったんだ」

「仕方ないよ。そういうお仕事なんだから」

はあとなは商店街のゲームセンターでバイトしながら、同級生のきよつちゃんと一緒に「きよおはあと」っていうコンビを組んでお笑いをやってるんだ。

童話みたいでほのぼのとしてるけど面白いコントをやってて、表裏のない人柄がウケてちよくちよくテレビにも出てる。

「ライブとかテレビの収録だったら見に行けるけど、ロケで遠くに行っちゃってるから会えねえんだよ」

「そのうちテレビでやるよ。それに都留男はただのファンじゃなくて、お友達なんだからいつでも裏話聞けるじゃない」

「うーんそうなんだけどなあ」
「勝次くんは？」

「電話したけど、ライブの曲作りで忙しいんだって」

かっちゃんも商店街の楽器屋さんで働きながら、「CRUSHERS」っていうロックバンドもやってるんだ。

それまで全然ロックなんか聞いたことなかったけど、ライブ会場の盛り上がりや曲の痛快さにしびれて今じゃほぼ毎日聞いている。

「皆大変だねえ」

「ライブに行きてえけど、その日お仕事があるから行けねえんだよ」

「またいつか行けるよ。勝次くんにだっていつでも会えるじゃない」
「そうだなあ」

「今日って仕事休みだったよな？」

「そうだよ」

「ヒマなんだったら俺と一緒に遊んであげようか？」

「ホント?!」

その言葉を聞いてがばっとソファーから起き上がった。

「もちろんだ。俺が今までウソついたことあるか？」

「……ねえな」

「よっっし、じゃあ何して遊ぶ？」

「うっんそうだなあ……兵ちゃんと一緒だったら何でも楽しいよ」

「嬉しい事言ってくれるなあ」

「そうだ、スライム作ろう！ この間テレビでやってたんだ」

「ダーメ！」

「何だよ？」

「前につくった時の事忘れたのか？ その辺に置きっぱなしにして

びちょびちょになったり、食べようとしたりしたじゃないか」

うっっ、確かにそうだった。

遊んでるうちに見たいテレビの時間になってテーブルの上に置いて

たままにしたり、超自から「スライムってどんな味がするのかな？」

って言われて「じゃあ食べてみようぜ」って事になったりしたから

なあ。

でもおいらもバカじゃないから、それくらいは学習してるぜ！

「もうしないからさ、一緒に作るうぜ」

「ダーメーだ！ 使う材料だって危険なんだぞ」

「おいらもう大人だから正しく使うよ」

「中身は子供だろ？」

むっっ、もうこうなったらこれしかねえな。

「おねが〜い兵ちゃん。スライム作るの許して〜」

目をうるうる輝かせながらぎゅっと兵ちゃんの手を握りしめた。

これぞ必殺「おねだり攻撃」だ！

子供の頃やりすぎてもうかつちゃんには効かなくなっただけ、兵ちゃんには未だに効くんだ。

「しょうがねえなあ。作ってもいいぜ」

「やったあ！」

「イエーイ！ おねだり作戦大成功！」

「でも、ちゃんと遊び方守るんだぞ」

「はい」

「じゃあ材料買ってこようか」

「うん！」

家を出たおいら達は商店街にある薬局に向かって歩き出した。

材料にほう砂っていうのと洗濯のりを使うのは前作った時に聞いたのだ。

「兵ちゃん、今回は何色のスライム作る？」

「うんそうだなあ……赤なんかどうだ？」

「前作ったじゃねえか」

「じゃあオレンジなんかはどうだ？」

「おつ、いいな！ レインボースライムなんかもかっつけえよな」

「レインボーか。それはかなり上級者向けだな」

「あつ、都留男くん」

前から大ちゃんがやってきた。

「大ちゃん」

「お友達？」

「うん。砂山作ってる時に知り合ったんだ」

「あつ、前に言ってた山口さんって人か」

「こんにちは」

「こんにちは。僕は腰山兵吉です」

「山口大己です。腰山さんは都留男くんのお友達ですか？」

「うん、昔はそうだったけど、今はちょっと違うね」

「え？　じゃあ今は何なんですか？」

「へへへ、今は秘密の関係なんだよ」

本当は堂々と「恋人」って言いたいけど、兵ちゃんの前で言うと顔真っ赤にして怒られちゃうんだ。

何でだか未だに分かんない。

「そう、秘密の関係なんだ」

「へえ〜、そうなんだあ」

「よかったら大ちゃんも一緒にスライム作らない？」

「都留男くんこれからスライム作るの？」

「うん。材料今から買いに行くんだ」

「じゃあぼくが作り方のコツを教えてしんぜよう」

「え？　大ちゃんスライムの作り方のコツも知ってるの？」

「もちろんだよ。色んな物の作り方のコツを知ってるんだよ」

「わ〜っ、すごい！　教えて教えて〜！」

「もちろんだよ」

「じゃあ大己くんも一緒に行こうか」

「はい」

薬局で材料を買ったおいら達は家に帰って、さっそくスライム作りを始めた。

作るのに使うコップや割り箸やペットボトルはちゃんと三人分ずつ用意してある。

「まずはこのコップに洗濯のりを入れてね」

「うん」

大ちゃんに言われたとおり、コップに洗濯のりを入れ始めた。

「大己くん作り方覚えてるの？」

「はい。これまで何回も作ってますので」

「そうなんだ」

「大ちゃん、どのくらい入れるんだっけ？」

「このコップいっぱいに入れていいよ」

「分かった」

「腰山さんはこっちの方のコップに洗濯のりと同じぐらいの量の水を入れてきてください」

「OK」

兵ちゃんはコップを持って台所に行った。

「大ちゃんと兵ちゃんの分も入れていいか？」

「いいよ」

しばらくして、兵ちゃんが戻ってきた。

「お待たせ」

「ありがとうございます。後すみませんが、お塩もお願いできますか？」

「お塩？」

兵ちゃんはきよとんとした。

「はい。お塩を入れるとはずむスライムになるんです」

「そうなんだ。じゃあ持つてくるね」

兵ちゃんはまた台所に行った。

「大ちゃん、はずむスライムってどれぐらいはずむんだ？」

「すんごくはずむよ」。あつ、でも普通のスライムの方が良かったかな？」

「ううん。はずむ方がいいよ。だって初めてだもん。わくわくしちゃうよ」

「良かったあ」

「持つてきたよ」

兵ちゃんが戻ってきた。

「じゃあお水にスプーン一杯分のお塩と絵の具を入れよう」

「おいらはオレンジ！」

「俺は黄緑にしようかな？」

「じゃあぼくはピンクで」

「大ちゃん髪の毛の色とおんなじだな」

「そうだね」

それぞれ思い思いの絵の具を箱から取って、中身をお水に入れた。そこにお塩を入れてかき混ぜる。

「混ぜてきたら今度は洗濯のりと混ぜようね」

「分かった」

大ちゃんに言われたとおり、食塩水と洗濯のりを合わせてかき混ぜ始めた。

「色にムラが出ないようにお〜っくかき混ぜてね」

「おう」

その後は、ほう砂の液体づくりだ。

「このほう砂の量でスライムの柔らかさが決まるんだよ」

「そうなのか」

「今回ははずませるから多めに入れようね」

「おう」

ペットボトルに水とほう砂を入れてものすごい勢いで振りまくる！

やがてほう砂が全部溶けた。

「じゃあ食塩水入り洗濯のりとほう砂の水を混ぜよう」

「いよいよスライムになるのか」

「わくわくするな」

「洗濯のりにほう砂の水を入れて素早くかき混ぜてね」

「おう」

言われたとおりに混ぜてると、コップの中にかたまりみたいなのが出来てきた。

「大ちゃん、このかたまりみたいなのがスライム？」

「そうだよ。それをとって、軽く水を絞りながらまるめてね」

「おう」

「手のひらで力を入れすぎちゃだめだよ」

「分かった」

かたまりを手にとって、力を入れすぎないようにしながらまるめていく。

そうしてるうちに水が抜けてきて、固くなってきた。

「おっ、だいぶ固くなってきたね。それじゃあ完成だよ」

「やったー!!」

「都留男、俺も出来たよ」

「じゃあみんなで机の上ではずませよっか。ちょうどぼくも出来たんだ」

「そうだね」

「でもまず使ったものを片づけないといけないぞ」

「はい」

兵ちゃんに言われて片づけた後、みんなでスライムを机の上ではずませた。

スライムは机の上でとつてもよくはずんだ。

何回も何回も机の上ではずませて、みんなで楽しい時間を過ごした。

「楽しいねえ兵ちゃん」

「そうだなあ」

「大ちゃん、ありがとう」

「どういたしまして」

それにしても、ホントによくはずむスライムだなあ。

おいら達のお腹みたいだ。

三十を超えた頃あたりからすんげえよくはずむようになったんだよなあ。

……そうだ！ お腹の上でスライムをはずませてみよう！

みんなで寝ころんで、お腹の上でいっぱいはずませてみたいなあ。

「二人とも」

「ん？ 何だい？」

「どうしたの？」

「寝ころんでお腹の上でスライムはずませてみねえか？」

「それは名案だね」

「そうだな。お腹の上でスライムはずませるってのもいいよな」

「よお〜っし、じゃあさっそくやってみよう！　まずは机をどかさなきゃな」

立ちあがって、三人で協力して机をどかして、カーペットの上に寝転んだ。

「わ〜っ、こっちやってみると都留男くんのおうちおつきいね〜」

「ありがと。兵ちゃんが親戚の人から譲ってもらった家なんだ」

「もう十六年も前の話ですけどね」

「そうなんですか」

「それよりスライムはすませようぜ」

「そうだね」

それぞれの手持ちのスライムを高い所からお腹に向かって落としてみた。

案の定スライムはすごい勢いではずんだ。

「おもしろえ〜！」

「お腹の上でもよくはすむね〜」

「なんだかクセになりそうだな」

「もっともつとはすませしてみよう！」

「おう！」

その後もおいら達はお腹の上でたくさんスライムをはすませた。

そのうち一個じゃ物足りなくなつて、二個も三個も作つてたくさんはすませるようになった。

「ほんつとおもしろいね〜」

「もうこうなつたら裸になつて、色んな所ではすませようぜ」

「それはいいな」

ついにおいら達は服を脱いじまった。

もう服なんてもんには縛られねえ！

男なら、おやしなら、裸の上でスライムをはすませるんだ！

裸になつたおいら達はもう誰にも止められなかつた。

足ではすませ、ほつぺたではすませ、おでこではすませ、脇の下ではすませ、乳首ではすませ、お尻ではすませ、男の一番大事なあ

んな所やこんな所でもはずませた。

やがて外が暗くなってきた。

既にお腹やお尻ではずませた回数は三ケタを超えている。

それでもおいら達は止まらない。

男として、おやじとして、スライムをはずませ続けるんだ！

さあ今度は鼻ではずませるぞ。

一体鼻ではどんなはずみ方を……ん？　なんかむずむずするぞ。

これって、もしかして

予想通り、おいらは思いっきりそいつを飛ばした。

「で、見事に風邪ひいちまったんだな」

かつちゃんは呆れた表情で言った。

おいら達は今おでこに冷却シートを貼って、顔を真っ赤にして二人してベットで寝てる。

昨日あまりにも裸でいすぎて、おいらも兵ちゃんも冷えすぎちゃったみたいだ。

おかげで夜から熱が出まくって、今日になっても全然下がらない。

そこで、かつちゃんとはあとんに助けを求めたのだ。

大ちゃんも家で寝込んでるらしい。

「そうなんだよ」

「お前ほんつとにバカだな。こんな過ごしやすい秋に風邪なんかひ

く奴いるか？　兵吉さんもちちゃんと注意しないとダメですよ」

「ご……ごめん勝次くん」

「おかげ持ってきたよ！」

はあとんがお盆を持って現れた。

今日はいつもの穏やかな感じとは違ってなんだか恐い。

無理もない。下ネタ大っ嫌いなはあとんに裸でどうのこうのって
いう話をしたんだから。

「ありがとう」

「二人とも、スライムは普通に遊ばなきゃダメだよ！」

「は、は」

第4話：みんなでお昼寝

「いえ〜い！」

勝負に勝ったおいらはにんまりした。

このゲームは昔から大の得意なんだ。

おいらの右に出るヤツはいねえぜ！

「わ〜っ、都留たんやっぱり強いね〜」

はあとはコントローラーを持ったままぽか〜んとしてる。

「へっへ〜ん、おいらに勝とうなんて数百年早いぜ」

「数百年経ったらもう死んじゃってるよ」

う〜ん、相変わらずはあとは例えが分かんねえというか素直すぎるといっつか……。

小学校から高校までおんなじ学校出たのに、何でこう違うんだろ
う？

「違うよ。例えだよ、た・と・え」

「えっ？ そうなの？」

「お前いい加減物覚えろよ。もう三十五だろ？」

「都留たんだって、かつじんから「もう三十五なんだから子供っぽい遊びはやめろ」ってよく言われてるじゃない」

うっっ、こっという痛いトコをすぐついてくるんだよなあ。

昔から何にも変わっちゃいねえ。

「あれはあれ、これはこれだよ」

「も〜っ、すぐそうやってまとめちゃうんだから」

「おめえらまだいたのかよ」

声のせいかな、真奈^{まな}たんが起き上がって目をこすり始めた。

> i 1 1 9 1 7 — 1 6 3 7 <

小学校時代からの友達で、今も一緒に商店街の中にある「BIG

BANG」って雑貨屋さんで働いてるんだ。

食べる事と寝る事しか興味がなくて、食っちゃ寝食っちゃ寝を繰り返してるからものすんげえずんぐりしてる。

今いるのはこいつんちで、築四十年のボロアパート。

六畳一間で狭いけど、なんだか昔ながらの生活の良さが出てる感じで、すごくいい雰囲気なんだ。

「おう。すんげえ落ち着くからな」

「だからって休みのたんびにくんなよ。俺は一人でゆっくり寝てえんだよ」

「そんな事言わずにさあ、一緒に遊ぼうぜ」

「嫌だ！俺はまだ寝させてもらっからな」

真奈たんはめんどくさそうに寝転がって、ふとんをかぶり始めた。

「真奈たんのケチ！」

「へいへい」

「都留たん、ボクたちもお昼寝しない？」

はあとんまであくびし始めた。

「おめえも眠いのか？」

「うん。みんなで集団お昼寝しようよ」

うっくん、確かにそうだな。

この雰囲気ゲームやってもおもしろくもなんともねえしな。

「そうするか」

「布団はその押し入れに入ってるぞ」

真奈たんの声が聞こえてきた。

「ありがとう」

「じゃあさっそく出そっか」

「いや、まずこれ片づけなきゃいけねえだろ？」

「あつ、そっかあ」

二人でゲームを片づけて、押し入れからふとんを出してしき始めた。

「何かわくわくするな」

「そうだね。でも真奈たん一人暮らしなのに、なんでこんないっぱいおふとんとか枕とか持つてるんだろっ?」

「きつとおいら達のためだよ」

「そうかなあ?」

「さっ、寝るぞ」

しき終えた後はすべり込むように中にもぐった。

あつたかくてすんごく気持ちいい。

真奈たんがずっと入ってたい気持ちもよく分かるなあ。

> i 1 1 9 1 8 — 1 6 3 7 <

「何だか修学旅行とか思い出しちゃうね」

はあとんが話しかけてきた。

「今はそんな機会ねえからなつかしいよなあ。あつ、でもお前は口ケとかで泊まる事があるんだろ?」

「あるけど、子供の時みたいにはいかないよ。見回りに来る先生もいないし、枕投げするわけでもないし」

「そっかあ。やっぱり大人になると違うんだなあ」

「ホントは枕投げしたいのに、誰も付き合ってくれないんだ」

「芸人のくせにノリ悪いなあ」

「そうだねえ」

おいらはふと、真奈たんの方を見た。

真奈たんも昔からノリはあんまり良くない。

小学生の時から何だか冷めた感じで、マンガやアニメやゲームの話にほとんど乗ってくれなかったし

中学生の時にエロの話をもいまいち反応しないし

高校生の時から「BIG BANG」で一緒に働いてるけど、あんまり自分からは話しかけてこない。

たまにゲームには付き合ってくれるけど、お外で遊ぶのには付き合ってくれないし、食べてるか寝てるかまじめにお仕事してるかし

か知らない。

「どうかしたの？」

はあとの不思議そうな声が聞こえてきた。

「真奈たんもノリ悪いなあ、と思って」

「確かに何考えてるのかよく分かんないね」

「そっだよなあ」

真奈たんの顔を覗き込んでみた。

おっきくてふっくらとしてて、まゆ毛やまつ毛は長めだ。

口と鼻と耳は中ぐらいで、髪の毛は長くて横に広がってる。

「真奈たんさつきボク達がお絵かきしてる時もずっと寝てたね」

「ほんつと寝るの好きだよなあ……そっだ！」

いい案が浮かんで、思わずにんまりした。

「真奈たんの顔に落書きして、驚かせちゃおうぜ！」

「そっだね！ どんな反応するのかな？」

「楽しみだな。じゃあさつき使ったサインペンでも使っか」

「これだね」

はあとはその辺にあるちゃぶ台からサインペンのセットを取った。

「さて、何色から使おうかな？」

「都留たんみたいにまゆ毛ぶっとくしちゃうよ」

「それはいいな」

黒のペンを取って起き上がり、二人でさっそく真奈たんのまゆ毛を濃くした。

顔の上をペンが走ってるのに、全然目を覚まさない。
きつと熟睡してるんだろうな。

「まぶたの上に目を描いちゃおうぜ」

「これはまたベタなのいくね」

まぶたに沿って目を描いていく。

はあとも楽しそうに目を描いている。

「どうせなら鼻毛ボーボーにしちゃうか」

ノリに乗って鼻毛ボーボーにするおいら。

「ほっぺたピンクにしようよ」

「おっ、かわいいな」

ほっぺたにピンクを塗ってみる。

「どうせなら赤にして酔っ払いみたいにしてよっぜ」

「そうだね」

ピンクの上からさらに赤を塗った。

「よおっし、たらこくちびるだ!」

「どんどん変な顔になっていくね」

くちびると口の周りに堂々と赤を使って、たらこくちびるを演出した。

「羽根付きの時みたいな黒丸も書こうぜ」

「すごい事になっちゃってるね」

その後も、おいら達はどんどん落書きしていった。

いくら書いても真奈さんは全然起きない。

それをいい事に、こっちも調子に乗っていく。

「さあ次は、おでこに名前書くか」

「やっぱりお名前はちゃんと書かないとね」

「じゃあおいらが名字書くから、はあとんは下の名前な」

「うん」

サインペンをおでこに向けて、二人で名前を書こうとした時だった。

まぶたがゆっくりと開いて、めんたまがこっちの方に向いた。

一瞬頭の中が真っ白になった。

ちよっと調子に乗りすぎちゃったかな?

「……何やってんだ?」

「あつ、いや、その、これは」

「都留たん、隠したって無駄だよ」

「二人して顔に落書きかよ。相変わらず平和な奴らだな」

「う……ごめんなさい」

「ボクも調子に乗りすぎちゃって、ごめんなさい」
馬鹿だったな、おいら達。

さすがの真奈さんでも、こんな事されたら怒っちゃうよ。
「しょうがねえなあ」

そう聞こえたかと思うと、またまぶたを閉じた。

「ほらっ、もつと描けよ」

「え？ いいのか？」

「どうせ洗ったら取れるだろ？ もつと描いていいぞ」

「真奈さん、ありがとう」

「どういたしまして」

「良かったね、都留さん」

「うん。じゃあ今度は耳の裏にハートマーク描くんぞお！」

「ボクも描く〜」

第5話：バレンタイン直前に大喧嘩？！

「もうすぐバレンタインだな」

兵ちゃんがニコニコしながら話しかけてきた。

毎年この時期になると、兵ちゃんのテンションが一気に上がるのだ。

付き合い始めてからずっとバレンタインの手作りチョコ交換をしてるけど、毎年兵ちゃんの力の入れようがすごいのだ。

ある時は二人の名前が入った特大ハート型チョコケーキ、またある時はメキシコ産やベネズエラ産の力カオをわざわざ取り寄せてふんだんに使った生チョコレート、本格的すぎてもう何て呼べばいいのか分かんない上に食べにくいチョコの時もあった。

たぶん今年も希望を訊いてくるんだらう。

これまでの経験からして、希望からかけ離れた得体の知れねえチョコになるのは分かり切ってる。

「そうだな」

「今年はどんなチョコがいいんだ？」

出た！ やっぱりそうか！

おいらの予想に狂いは無かったぜ！

「うーん、そうだなあ」

ぶっちゃんけもう、兵ちゃんのチョコを食い飽きてるような気がする。

十六年間もやってたரசすがにマンネリ化してくるし、毎年兵ちゃんのが豪華すぎて、おいらの質素なちっこい失敗しまくりのチョコが申し訳なく思えてくる。

それに、前から薄々とやってみたかった事があるのだ。

「なあ、兵ちゃん」

「ん？ 何だ？」

「今年は皆で一緒に作らねえか？」

「え？」

兵ちゃんの顔色が変わった。

「もつず〜とおんなじ事ばかり繰り返してるし、たまには違う事してみてもいいだろ？ 皆で材料持ち寄ってさ、わいわいやりながら作るうぜ」

「嫌だ！」

「え？」

「俺は都留男と二人だけでバレンタインを楽しみたいんだ。作るなら二人で作ろうぜ」

「何だよ。それじゃ他の皆がかわいそうじゃねえかよ」

「そんなの前からずつとそうだろ？」

「そうだけど、今年は皆で一緒に作りたいんだよ。ちようどはあとももかつちゃんも仕事ねえみてえだし、最近は大ちゃんとも知り合つて」

「都留男は俺と友達どつちが大事なんだよ?!」

突然鋭い目で睨みつけながら怒鳴ってきた。

昔からこいつはやたらと「二人だけ」に妙にこだわる所がある。

普段は友達と遊んでても全然平気なのに、こういう特別な時だけは変にこだわるのだ。

家で俺の誕生日パーティー開いて楽しくやろうと思ってたのに急に中止させられた時は、本気で別れてやろうかと思つた。

大体いくら恋人同士だからって、四六時中ベタベタ出来る訳ねえだろ?!

しかももう十六年も経ってるんだからとつくに愛も冷めてるっつーの!!

「お前そんな女みてえな気持ちわりい発言やめろよ！」

「気持ち悪いだど?! 大体都留男は友達も俺もおんなじ扱いにしすぎなんだよ?!」

「同じ人間同士仲良しこよしで何が悪いんだよ?!」

「毎日こんなに愛を注いでんのに何で俺だけが特別な存在じゃねえ

んだよ?!」

「はあ?! 四十のおっさんが幼稚園児みてえな事言つてんだよ!
! たかがバレンタインのチョコごときで何が「特別な存在」だ?
!」

「都留男の中ではその程度のもんでしかなかったのかよ!？」

「当たり前だよ! チョコはチョコじゃねえかよ! もうやつて
られねえよ!」

「こつちだつて一氣に作る氣失せたぜ!」

「あゝっ、そうですか。それはわるうございましたね」

「何だよその態度! 全然謝る氣ねえじゃねえかよ?!」

「おめえが「嫌」とか言い出したのが悪いんだろ? 兵吉の馬鹿野
郎!」

我慢できなくなつてソファから立ち上がり、リビングを出て乱
暴にドアを閉めた。

全く! バレンタインのチョコぐらいで何なんだよ?!

心が狭い奴だな!

家を出てズカズカと歩き、しばらく歩くとマンションが見えてき
た。

中に入り、勝次の部屋がある階までエレベーターで上っていく。

喧嘩した時はいつも、こいつに愚痴を聞いてもらつてるのだ。

やがて目的の階に付き、エレベーターを出て勝次の家のチャイム
を鳴らした。

ドアが開き、奴が出てきた。

「何だよ? また兵吉さんと喧嘩でもしたのか?」

「おう!」

「とりあえず上げれよ」

「邪魔するぜ」

中に入るとリビングに案内された。

その辺に座つてると奴が茶と煎餅を持ってきた。

「で、今日はどんな喧嘩をしたんだ？」
「バレンタインはどうするかって話になって、俺は「皆で作りたい」
って言ったのに、兵吉は「二人だけで過ごしたい」とか言いやがっ
たんだよ」

「ふ〜ん、そうなのか」
人がせつかく話してるのに、勝次は興味無さそうに煎餅を齧って
る。

> i 1 1 9 1 9 — 1 6 3 7 <

「お前らほんつと平和だな」

「どこがどう平和なんだよ?!」

「平和じゃねえかよ。俺なんかそんな風に喧嘩できる彼女いねえん
だぞ」

「喧嘩するぐれえなら恋人なんていねえ方がマシだよ」

「お前それ何万回言ってるんだよ？ もう俺の耳にタコ出来まくりだ
ぞ」

「恨むなら兵吉を恨めよ」

「へいへい。で、これからどうするんだ？」

「どうするって?」

「このままじゃ、家に帰りづれえだろ?」

「ふんつ、誰が帰るもんか!」

「まさか、俺のところに泊まるとか言い出さねえだろっな?」

勝次が目を細めた。

「良く分かったな」

「お前と三十年も付き合ってたなら嫌でも分かるぜ。ぜってえ泊めね
えからな」

「そんな事言わずにさあ、泊めてくれよお」

「ダメだ! 俺んちはホテルじゃねえんだぞ」

「もう「かつちゃん」って呼ばねえからさあ」

「ダメだ！　んな馬鹿な事言ってる暇があるんだったら、兵吉さんと仲直りして来い！」

「やだ！　もうあんな奴知らねえもん！」

「子供だなあ。お前ももういい歳なんだから、素直に謝ればいいんじゃないね？」

「何であんな奴に謝らなきゃなんねえんだよ?!」

「じゃあいいのか？　ずっとこのままでも。本当は仲直りしたいんだろ?」

うつつ、確かにそうだ。

こんなつまんねえ事で喧嘩したままじゃ駄目だってことは俺もよく分かってる。

兵吉と楽しく笑いながらチョコレートを作る方がぜってえいいしな。

「俺、やっぱり謝ってくるぜ」

「そうしろ」

「お邪魔しました」

勝次のマンションを出、俺は家まで全速力で走った。

一刻も早く、兵吉に謝りたい！

やっとの思いで家に着き、ドアを勢い良く開けた。

「兵吉！」

返事はない。

まだ怒ってるんだろうか？

リビングまで行ってみたが、そこに奴の姿は無かった。

他の部屋にいるのか？

ダイニングや台所やトイレや洗面所や浴室、寝室やあいつの書斎や俺の部屋や空き部屋や屋根裏まで家の中を隈なく探したが、どこにも居なかった。

そんな……あんな一回の喧嘩で出て行っちゃったのか？

嘘だ！　絶対どっかに居るはずだ！

家を飛び出し、町の中の至る所を探した。

公園、商店街、駅や学校や図書館、市役所や病院や警察、消防署や郵便局も探したが、奴は一向に見つからなかった。

畜生！ どこ行きやがったんだよ？！

疲れ切って、その辺をとぼとぼと歩きながら涙を流した。

何でバレンタインのチョコくらいでこんな事になるんだよ？！

帰って来いよ！

「お前、何やってんだ？」

聞きおぼえがある声が聞こえた。

まさか？！

振り向くと、そこには奴が居た。

「兵吉！ 今までどこ行ってたんだよ？！」

「どこって、商店街のスーパーまで買い物だぞ？」

はあ？！ 買い物？！

「お前それくらいメモに書いて置いとけよ！ 俺がどんだけ探したと思っただよ？！」

「……ごめん」

「こっちこそ、つまんねえ事で言いすぎてごめん」

「……都留男、やっぱり皆で作っていいぞ」

「え？」

「さつき露^{あひろ}が来て、喧嘩の事を話したら「お互いの意思を尊重した方がいい」って言われたんだ。だから俺も大人として、都留男の意思を尊重するぜ」

「兵吉……ありがとな」

「その為に、今チョコの材料買って来たんだ。バレンタインに皆で作ろうな」

「うん」

「じゃあ、帰ろっか」

「そうだな」

バレンタインデー当日

「で、仲直りしたんだな？」

「うん！」

呆れるかっちゃんにおいらは元気よく返した。

はあとんも大ちゃんも呼んだし、今日はみんなで美味しいチョコを作るぞお！

「さあつ、どんなチョコを作る？」

兵ちゃんがチョコのレシピ本を持ってきて広げた。

「そうだなあ。やっぱりチョコケーキがいいぜ」

「チョコクッキーも美味しそうだぞ」

チョコクッキーの写真を指差す兵ちゃん。

「いや、今日は絶対チョコケーキだ！」

「クッキーなら皆で分けれるんじゃないかねえか？」

「ケーキも分けれるじゃねえかよ！」

「クッキーの方が割と簡単に作れるぞ！」

「ケーキみたいにしっとり作るのもいいじゃねえか！」

「何だと?! 俺がこないだ買ってきた材料はクッキー用だぞ！」

「ケーキ用のを買い足してもいいだろ? っつかぶっちゃけそんなに変わんねえだろ?」

「俺は都留男とクッキーを作るのを今日まですんげえ楽しみにしてたんだぞ?!」

「だからなんだってんだよ?!」

「おめえらぜんっぜん懲りてねえな」

また勝次の呆れた声が聞こえた。

第6話：店長のそらたろくさん

「いらつしゃい！」

いつも通り、学校帰りに来た超自ちやうじに元気よく声をかけた。ぼつちやりしてて、まゆげが太くて、メガネをかけてる。

おいらも出た私立色好学園しりついろよしがくえんじやうがくえん小学校に通ってる小学四年生で、よくおいらが働いてるBIG BANGに来てくれるんだ。

制服はおいらが通ってた頃から変わってない。

白いシャツにピンクと黄色のネクタイ、ピンクに黄色いチェックが入ってる上着とズボンに白い靴下と黒い靴。

服の至る所に黄色いハートに羽根が生えた校章が付いてて、ランドセルは緑色だ。

「つるおくん、今日も制服きまつてるね」

「ありがと。超自の制服もきまつてるぞ」

「ほんと〜?」

「ほんとだぞ」

やっぱ褒められると嬉しいもんだなあ。

白い襟が付いたオレンジのシャツに、星がいっぱい散りばめられて、真ん中におっきくお店の名前が書いてある。ネクタイは赤と白と黄色のストライプだ。

ここで働き始めたばかりの頃に、おいらがデザインしたんだ。

「エキワルチヨコ、ある?」

「もちろんだぜ! この間たつぷり入荷したんだ」

「わ〜い、やった〜! 今日のテストで百点とれたら買おうかと思つてたんだ」

「おっ! ここに来てるって事は、百点とれたな! おめでとう!」

「ありがと」

「さあ行きたまえ。百点を取った者だけが行く事を許される奥のお菓子売り場へ」

「うん！」

超自は嬉しそうに店の中に入って行った。
ほんと子供はかわいいなあ。

超自だけでなく、学校帰りの小中学生がよく立ち寄ってお菓子を
買った話しかけたりしてくれる。

もちろんお菓子だけじゃなくて、ぬいぐるみやフィギュア、ゲー
ムやプラモデル、ミニカーやラジコン、パズルやパーティーグッズ、
文房具やちよつとしたカジュアルな服まで何でも揃ってる。

中でも目玉商品は、何と言ってもコスプレだ！

動物の着ぐるみやメイドさん、警察官、チャイナドレスといった
定番の物はもちろんの事、メジャー級からマイナー級に至るまでさ
まざまなアニメやゲームのコスプレ、こちら辺一帯の小中高の制服
コスプレまである。

売れ行きも良くって、色んな好みの大きなお友達が買いに来てく
れる。

「お前ら本当に仲良しだなあ」

お店の中から店長のそらたろくさんが出てきた。

> i 1 1 9 2 3 — 1 6 3 7 <

丸々と太ってて口元のひげがトレードマークで、いっつもニヤニ
ヤしてる。

高校三年生の頃から、お友達めかたの目加田岳一たけかずさんと五嶋烏美人ごとうさん
とずっとこのお店をやってるんだ。

「へへへ、いつ見てもかわいいですからね」

「お前もいつ見てもかわいいぜ」

そらたろくさんはニヤニヤしながら、おいらのケツを触ってきた。

「もーっ、すぐそういう事するのやめてくださいよ」

「いいじゃねえか。俺と同じズボン履いてるんだし」

そう、上はシャツとネクタイだけど、下のズボンはずっとそらた

ろくさんのズボンを履かされてるんだ。

「岳一さんと烏美人さんからは「やめろ」って言われてるけど、全然やめようとしなない。」

「なんでも「かわいい店員達と同じズボンを履くのがいい」んだぞうだ。」

「こんな感じで、昔からとにかく男の人ばかり雇っては、かわいい、かわいいって言うてる。」

「おかげで毎日体を触られたり、着替えを覗かれたりしてるんだ。」

「俺はお前が中学の時からずうっと雇ってるんだぜ。いやあ、もう二十二年かあ。早いもんだなあ」

「それとこれとは話が別です！」

「そうだぞ。まったく関係ねえからな」

「気がつくよ、乱蔵らんぞうがムツとした表情で立ってた。」

「そらたるくさんの甥っ子で、ちよくちよく様子を見に来てるのだ。色好学園小学校の四年生で、超自とおんなじぐらいぼっちゃりしてるけど、本人はそれを気にしてるらしい。」

「学校帰りや土日にお店を手伝ってくれてて、悔しいけどおいらより数倍仕事ができる。」

「おう、乱蔵。来てたのか」

「来てたぞ。またセクハラしてたんだな」

「おじさんを思いつきりにらみ付ける乱蔵。」

「これはセクハラじゃないぞ。大人のコミュニケーションだ」

「なあにが大人のコミュニケーションだよ。どっからどう見てもセクハラだろうが。それと岳一から聞いたぞ。また風俗に行ったんだってな」

「そういう情報を仕入れるのは早いなあ」

「感心してる場合か！ まったく、店の経営管理の事は岳一と烏美人にまかせつきりで自分は遊んでばかりで。そんなんでよく店長とか言えるよな」

「相変わらず乱蔵はズバズバ言うなあ。」

どっちが大人なんだか。

って、んな事考えてる場合じゃねえな。

「そらたろくさん！ お店と男遊び、どっちが大事なんですか?!」

「ははは、お前まで何言ってるんだ？ そりゃあ店に決まってるだろ。なぜかおいらの頭をなでなでするそらたろくさん。」

「さあ、俺も掃除でもするかあ」

そらたろくさんはお店の中に戻って行った。

うつつ、全然答えになってないよ。

「そうかあ。やっぱり何年経ってもあいつは変わんねえなあ」

兵ちゃんも笑いながらお茶をコップに注いだ。

夕飯の餃子とチャーハンと鶏のから揚げを食べながら、昼間の話をしていたのだ。

「笑い事じゃねえよ。もう二十年以上もそうなんだから」

「ごめんごめん。まあでも昔からエロかったしなあ」

お茶を飲みながらしみじみする兵ちゃん。

「小学生の時からもう既にこっちの世界の住人で、エロ本にめっちゃくちゃ詳しくて、中学の時にはもうエロオヤジ相手に売春してたからなあ。それが学校にバレて停学になったりもしたけど」

「そ………そうなんだ」

ここまで変わってない人も珍しいな。

まあおいらも人の事言えねえけど。

「でも、おもちゃとか人を楽しませる事とかは人一倍好きな奴だったな。そこも昔から変わってない」

確かにそうだ。

おもちゃやコスプレが好きじゃなかったら、店を始めたり二十二年も続けてやったりしねえからなあ。

おいらもおもちゃやお菓子が大好きで、夢がある仕事をして行きたいからずっと働いてるわけだし。

「それに、陰で色々と努力してるのかもしれないぞ。店の経営が難

しいってのは俺も身をもって知ってるし」

「そうだよなあ」

「でも都留男は俺だけのものだから、手出しをしようものならさすがの俺もキレルけどな」

「も〜う！ 兵ちゃんまでそんな事言っつて」

「ごめんごめん」

翌日

「おはようございます」

「おはよう」

そらたろ〜さんはニヤニヤしながらあいさつを返してくれた。
今日も全身をまじまじと見てくる。

「早く制服に着替えるよ」

「ぜったいにのぞかないで下さいよ！」

「分かってるって」

不安になりつつも、更衣室に入った。

荷物を置き、着てきたTシャツを脱いだ。

ドアの方をしてみた。

特に何も起こってない。

続いてベルトを外し、ズボンを脱ぎ始めた。

ドアの方をしてみた。

まだ何も起こってない。

ズボンを脱いで制服のシャツを着ようとした時、物音が聞こえた。

ドアの方まで歩いて開けてみると、そこには予想通りそらたろ〜

さんがいた。

「バレちまったか」

「バレバレですよ」

「わざわざパンツ一丁で開けに来るなんて、サービス精神旺盛だな

あ

「そんなサービスしてません！」

こんな店長で本当に大丈夫か？
まあ何だかんだで二十二年経ってるし、いつか。

第7話：はあとんと桜のロンゲコント

「ふう、後はこれに色を塗るだけだな」

下書きが終わって、ほっと一息ついた。

五年前からやってるサークル「にじいろおっちゃんず」の新刊に載せるイラストを描いてるんだ。

メンバーはおいらと兵ちゃん、後輩のかける、兵ちゃんの幼なじみの露あいつさんの4人。

B I G B A N Gでの休憩中に、かけるがすごい上手い絵を描いてたのをきつかけに始めたサークルだ。

自分たちで考えた絵や小説の本や、大好きな特撮「中年戦隊エキワル」の本をイベントがある度にちよくちよく出してると。

最初はコピー本だったけど、そらたる〜さんが知り合いの印刷所さんを紹介してくれたりもして時々使わせてもらってる。

「今度のエキワル本、どうなるんだろうなあ。こないだの話も良かったなあ。第三百二十七話「リアルな中学浪人生は涙が止まらなかった!」クロストワルによって体調を崩されそうになる中学浪人生それを救うアカエキワル達! くうっ、感動ものだぜ! おいらもあんな男になりてえ!」

「中年戦隊エキワル」は、この世のストレンジパワーを集めて、全ての人々の体調を崩そうと目論む悪の組織「ストワル」に立ち向かう中年の戦士、エキワル達の物語だ。

普段はサラリーマンとして、中小企業で頑張る平均年齢四十歳の五人のおっちゃん達。

しかし、ひとたび人々の健康が危ぶまれるとアカエキワル、アオエキワル、キエキワル、ミドリエキワル、ダイダイエキワルに変身! ヘルスパワーでクロストワル、ヤミストワル、アクマストワル、キンストワル、エンマストワルと戦うんだ!

土曜の朝七時半から放送してて、全国の頑張るおっちゃん子供

達に勇気を与える素晴らしい番組だ。

「さあつて、お茶でもいれるかあ」

ソファから立ち上がったその時、呼び鈴が鳴った。

インターフォンを覗くと、はあとんが今にも泣き出しそうな表情で立ってた。

ど、どうしたんだ？

玄関のドアを開けて、外の門を開けると、はあとんがいきなり泣きついてきた。

「わあ〜ん！ 都留たんどうしよう〜！」

「な、何がだよ」

「ボクひとりじゃ無理だよあ〜！」

「泣いてちゃ分かんねえだろ？ とりあえず落ち着けて」

「わあ〜ん！」

「中入ろうか。中入ってお茶でも飲んだらすつきりするだろ？ な？」

「わあ〜ん！」

「中入るのが嫌だったらここで話すか？」

「わあ〜ん！」

「落ち着かないと何も分かんないぞ」

「わあ〜ん！」

「どうするんだ？ 中に入るか？ それともここで話すか？」

「わあ〜ん！ 中に入るう〜！」

「お茶、入ったぞ」

いれたての二人分のお茶をテーブルに置いた。

はあとんはソファに座って、涙をすすってる。

「で、何があつたんだ？」

隣に座って訊いてみた。

「あのね、ぐすん、今度いか公園で「若星町スペシャルお花見ライブ」桜と笑い舞う春〜」ってこういうイベントがあるんだ。それでね、

ぐすん、それに事務所の先輩のラフターヨガさんが出る事になってただけど、ぐすん、飯八百めしやさんも無関むせきさんも体調崩しちゃって、ぐすん、出れなくなっちゃんだ。で、急にボク達が出る事になっちゃったんだ」

「そうか」

「イベントまでに「桜」がテーマの十分間のコントのネタを考えなくちゃいけないんだけど、何も思いつかないんだ」

「でもネタはいつもきよつちゃんが考えてくれてるんだろ？」

「それが最近忙しくて、全然考えられてないみたいなんだ。今日だってピンのお仕事で遠くに行っちゃって、明日の夜中まで帰って来ないんだ。それでボクが考える事になったんだけど、何にもおもしろいことなんか思いつかないよ」

「ライブはいつなんだ？」

「明日」

「なあんだ明日かあ。明日ならまあなんとか……ええっ?! 明日
!」

「うん」

「明日なのにまだ何にも思いついてないのか?!」

「うん」

「じゃあこんな事してる場合じゃねえじゃん!」

「そうなんだけど、ボク一人じゃお客さんにウケるネタなんか無理だよ。おねが〜い都留たん、一緒に考えて〜」

瞳をうるうるさせながらこちらの方を見てくるはあとん。

「そう言われてもなあ。今度の新刊に載せるイラストも描かなきゃなんねえし」

「このままじゃボク達何にも出来なくなっちゃうよ」

「う〜ん、でもなあ、新刊のしめ切りも明日なんだよ」

「サークルの本とお友達のネタ、どっちが大事なの〜?」

うつつ、そう言われるとどっちも大事だ。

しめ切りを守らないと兵ちゃんが恐いけど、はあとんも困ってる

し。

どうしよう。

「都留たんなら考えてくれるよね？ だってボク達お友達だもんね」
そうだ、おいら達は友達だ。

小学校時代からずうつと付き合ってる、大事な大事な友達だ。
でも兵ちゃんとは幼稚園からの付き合いだし、自分達で作ったサークルの決まり事は守らないといけねえしなあ。

「都留たん達のサークルは趣味だけど、ボク達はお仕事でやってるんだよ。舞台の上で何も出来なかったら、お給料も出ないし、生活もしていけなくなっちゃうんだよ」

確かにそうだ。

ゲーセンのバイトだけじゃあ食っていけねえしなあ。

「ねえ都留たんおねがい、一緒に考えて〜」

「し……仕方ねえな。ネタでも何でも考えてやるよ」

「やったあ！ ありがとう都留たん！ それでこそ都留たんだよお！」

おいらの手を取って、嬉しそうに揺らすはあとん。

まあいつか。ネタを考えてからイラストを描けばいいし。

「よおつし、さっそく紙に書き出していくか」

さつきイラスト用に使った鉛筆を取り、その辺の紙を持ってきて目の前に置いた。

「「桜」がテーマの十分のコントだったよな」

「うん」

「じゃあシチュエーションは「お花見」って事で。はあとんときよっちゃんが二人でお花見してるイメージな」

「うん」

紙に「きよおはあとのコント」「桜」「と書く。

「それはそれでいいけど、どういう風に面白い方に持っていくかだよなあ」

「そうだね」

「何か桜のお化けでも出すか。」「わっはっはっはー！ 私は桜のお化けだー！」みたいな感じで」

「でも衣装とかどうするの？ 一日で用意できないよ」

「そうかあ。じゃあ二人が普通の恰好で出来るおもしろいことな
いと無理だなあ」

「そうだねえ」

「うーんじゃあ踊りでも踊るか」

「でも三十代になってから体がしんどいよ。それに一日じゃ覚えられないし」

「難しいなあ。おいらお笑いなんてやった事ねえからなあ」

おもしろいことを考えるのって大変なんだなあ。

きよつちゃんは毎回はあとのために、アイデアを練りに練って
ネタを作ってるんだなあ。

「じゃあ言葉遊びでもするか。」「さくらが咲いた方がらくさ」とか
さ」

「意味分かんないよ」

「いちいち意味なんか考えなくても、おもしろければ何でもいいん
じゃねえの？」

「そうだね」

「「花よりタンゴだね。それを言うなら団子だよ」とかさ。そうい
うのを入れていこうぜ」

「そうだね」

その後もおいら達は次々と言葉遊び（ダジャレ？）を入れていつ
た。

けど、十分間のコントつてのは思ったよりもだいぶ長い。

ギャグを入れても入れても全然埋まらない。

「疲れてきたな。ちよつと休むか」

「うん」

もつとつくに冷めちまったお茶を二人で飲んだ。

「そうだ、この間新作ゲーム買ったんだ。ちよつと息抜きにやらね

えか？」

「どんなゲーム？」

「シューティングでさ、モンスターをバンバン撃ちぬいていく爽快感がたまらねえらしいんだよ」

「へえ、おもしろそうだね。やるうやるう」

「おう！」

テーブルの上を片づけて、さっそくゲームの準備をした。

「じゃーん！ こんな風な銃型のコントローラーがあるんだ。どうだ？ かっこいいだろ」

「わあ、っ、かっこいい！ これでものを倒していくんだよね？」

「そうだよ。さあ、TVとゲーム機の電源を入れてっ」と

電源を入れるとオープニングムービーが流れ、タイトル画面になった。

「一人だけじゃなくて二人対戦が出来るんだぞ」

「よおっし、負けないぞお！」

「おいらだって！」

スタートボタンを押して、メニューから「対戦」を選んで決定。

さっそくステージが始まった。

「制限時間は三分。その間に何年も前に使われなくなったビルに潜るモンスターを撃って、より多く撃った方が勝ちだ」

「どんどん撃つぞお！」

銃を構えつつ進んでいき、慎重にモンスターの出現を待つ。

すると急においらの所にモンスターが現れた！

とっさに引き金を引く！

見事モンスターは倒れた。

「ふうっ、危なかった」

「襲われたらどうなるの？」

「HPが減って行って、ゼロになるとゲームオーバー」

「そうなんだあ」

そんな事を言ってるうちに、はあとの所にもモンスターが現れた！

恐がりながらも思い切って引き金を引く！

無事モンスターを倒した。

「恐かったあ」

「やるじゃねえか」

「迫力満点だね。よおっし、この調子で行くぞお！」

「おいらも負けねえからな！」

その後もおいら達はどんどんモンスターを撃っていった。

先に行くことにモンスターも手ごわくなつていき、一発では倒せない奴や大ダメージを与えてくる奴まで色々出てきやがった。

やがて三分が経ち、結果が表示された。

二十対十四でおいらの勝ち！

「やったあ！」

うれしすぎてついバンザイしちゃった。

「次は絶対負けないからね！」

「へっへ〜ん！ 次こそおいらに勝てるかなあ？」

その後もおいら達は何試合もした。

おいらが勝つたり、はあとんが勝つたりでどんどん試合は続いていき、気がつくと百五十勝百三十敗になつてた。

「あゝあ、また負けちゃったよ〜」

「はっはっはっはっはー！ おいらの力を思い知ったか！」

「も〜う……あっ！」

「何だ？」

「都留たんっ！ もうこんな時間だよ！」

「えっ……うわっ！ ホントだ！」

なんと、もう夜中の二時になつてた！

「どうしよう。三時にきよっちゃん帰つてきちゃっよ」

「そっなのか？！」

「ネタって何分ぐらいの分まで出来てたっけ？」

「大体三分ぐらいだよなあ。後七分をどうするかだな」
「そうだね」

「とにかく考えるしかねえな」
ゲーム機を片づけて、その辺に置いたネタの紙と鉛筆を持ってきてテーブルに置いた。

「で、どうする？」

「どうしよう。ゲームやりすぎて頭が回らないよお」

「そうだよなあ」

「都留たんがゲームやろうとか言い出すからだよ」

「ごめん。まさかこんなに長引くとは思わなかった」

「早く考えないときよっちゃん帰ってきちゃっよお」

「うーんでも……ねみいしなあ」

思わずあくびが出た。

何かいい案ないかなあ？

考えたら、小学校の学芸会や中高の時の文化祭で漫才やコントなんかやった事なかったしなあ。

ん？ 学芸会？

そうだ！ 確か超自が前に学芸会でコントやってて、それを見に行っただは！

奴には悪いが、それを使わせてもらおう。

「はあとん、いいネタがあるぜ」

「えっ？ 何？」

「それはな」

翌日

「いやあ、桜の下でお酒を飲みながら清雄きよおさんと葉亜人かあさんのライブが観れるなんて最高だなあ」

「どんなネタなんだろうな」

兵ちゃんと露さんはレジャーシートの上でビールを飲みながらわくわくしてる。

サングラス大好きな露さんは今日もお気に入りのサングラスをきてきてる。

> i 1 1 9 5 6 — 1 6 3 7 <

おいらはと言うと、必死で超自がやってたネタを思い出して紙に書き、なんとか十分ぐらいのコントに仕上げた。

その後へとへとになって寝てたら高校の同窓会から帰ってきた兵ちゃんに起こされて、隣ではあとんが寝てる理由もちゃんと話した。「ネタはな、俺のとっても優しい友達思いの都留男が一生懸命考えたんだぞ」

「そうなんだ。都留男くん優しいんだね」

「何だかんだ言っても、やっぱり友達ですからね」

「こんにちは〜」

こ、この声は！

思った通り、超自が乱蔵と一緒にこっちにやってきた。

「あつ、超自くん。こんにちは」

「今日は乱蔵くんも一緒なんだね」

「俺は行かねえって行ってるのに、こいつが無理矢理連れて来やがったんだよ」

「いいじゃない。春なんだし、さくらもきれいだよ」

「まあな」

や……やべえ！ パクリって事がバレたらどうしよう？

ここはもう立ち去るしかねえな。

「へ、兵ちゃん、露さん。おいらちょっと向こうで見てくるよ」

「え〜っ、何で〜！ 都留男くんも一緒に見ようよ〜」

「そつだぞ都留男。せつかく超自くんもそつ言ってくれてるんだ、ここで見ようじゃないか」

「いや、あの、その、だ、大ちゃんや真奈さんと向こうで待ち合わせを」

「さつき真奈太朗見たけど、そんな事言っでなかったぞ。さては
前、何か隠してるな？」

ぎくっ！ 乱蔵の奴、鋭いな。

「え？ そうなの？」

「そ、そんな訳ねえだろ？ やだなあ超自、大人を信用しなきゃ
ダメぞ。あ、露さん！ おいらもビール飲みます！」

「そ、そう？ 本当に何も隠してないの？」

「露さんまで何言ってるんですか！ あっ、そろそろ始まりますよ
！」

BGMが流れ、司会の人が見えていよいよライブが始まった。

「さあ始まりました、若星町スペシャルお花見ライブ。トップバ
ターは芸歴十五年の中堅コンビ、きよおはあとです。どうぞ！」

げっ！ トップバッター？！

司会の人が行き、舞台に二人が出てきた。

まずい！ これじゃあすぐパクリだってバレちゃう！

「いやあ、いいねえお花見は」

「そうだねえ。さくらが咲いた方がらくさ〜」

うつつ、今はおいらのギャグだからいいけど、何分かすれば超自
のあれが……。

「おもしろいねえ都留男くん」

「あっ、そ、そうだな超自。わっはっはっはー！」

「お前様子がおかしいぞ」

くつつ、乱蔵め！

「花よりタンゴだね」

「それを言うなら団子だよ」

来るなあ！ 来るなあ！

「ん？ どうしたの都留男くん。何か変だよ」

「えっ、そ、そんな事ねえよ」

「やっぱり何か隠してるな」

「か、隠してねえよ」

そうこうしてるうちに、ついに問題の部分が来ちゃった！

「いやあとってもお花がきれいだねえ。おっは、おはな〜！」

「うわあ、そのダンスとっても楽しそう。ぼくもやっついていい」

「いいよお。みんなでこのダンスを世界に広めよう」

はあときよっちゃんのダンスを見たたん、超自の表情が変わった。

さっきまであんなに楽しそうだったのに、今は少しさめた表情をしてる。

「ダンス楽しかったねえ」

「じゃあ次はくじ引きでダンスを当てに行こう」

「いいねえ。じゃあ九時集合だよ」

ネタが進む度にどんどん超自の表情が険しくなっていく。

こ、これはやべえ。

やがてネタが終わり、はあときよっちゃんが舞台から下りた。それと同時に、超自が立ち上がった。

「ん？ どうしたんだ？」

「ちょっと清雄さんと葉亜人さんの所まで」

「ダ、ダメだぞ超自！ 二人はネタが終わったばかりで疲れてるんだ！」

あいつらの所に行かれちゃまずい！

ここは何としても止めねえと！

「何で都留男くんがそんなに焦るの？」

「そうだぞ。脂汗だって掻いてるし。やっぱり何か隠してるんだろ？」

「んな訳ねえだろ。とにかく、二人の事はそつと」

「つゝるた〜ん」

わ〜っ！ バカ〜ッ！ 来るんじゃねえ〜！

はあとんがスキップしながらこっちに来やがった。後ろからきよっちゃんも来た。

「ありがとう。おかげで大盛り上がりだったよ」

「そ、それは良かったな」

「俺らだけで済ませばええ話やったのに、なんかすまんかったなあ」
「いやいや、いいんだよ」

「良くないよ」

うつつ、超自の声が恐い……。

「二人とも、あれはどういう事なの？」

「何の話や？」

「とぼけないでよ！ 途中からはぼくが学芸会でやったネタとおんなじじゃない！」

い、言っちゃまった……。

「えっ?! そうなん?! 葉亜人、どういう事や?!」

「ボクは都留さんに言われたとおりにしただけだよ」

「都留さん、これはどういう事なん？」

きよっちゃんの目も恐えよ……。

「いや、あの、その」

「まさか、ボクと遅くまでゲームしてて何も思いつかなくて、人のネタパクっちゃったとか?」「そ、それはあ、えっとお」

「そうなんだね都留男くん！」

ひいっ! もうカンペキに超自怒らせちゃまった!

怒るとものすんげえ恐えんだよなあ。

「パ、パクリじゃなくて、その、お、お手本にしようとして」

「都留男、こういう時に正直に事実を言わなきゃなんねえのは小四の俺でも分かるぞ」

乱蔵め! また余計な事を!

「そう言えば都留男、新刊のイラストのメ切って今日だったよな?」

ああっ、忘れてた!

「もちろん、もう描き終わってるよなあ都留男」

「も、もちろんだぞ」

「じゃあ何で脂汗掻いてるんだ?」

ぎくっ!

「で、都留男くん。どういう事なの?! ぼくのネタをパクったって?！」

「あ、あれはだな、えっと、その」

「都留男、×切はちゃんと守らなきゃあいけねえなあ」

「そ、それはあ、そのお」

超自と兵ちゃんが鋭い目で睨みつけながらゆっくりこつちに来る。

こ………怖いよお。

「あっ、あっ、あの、こ、ごめんなさああああああああい!」
なんとかこの場を去ろうと、公園の出口に向かって全速力で走っていった。

「待ってよ都留男くん! 逃げるなんて卑怯だよ!」

「都留男! 新刊はどうするつもりなんだ?!」

後ろから二人の足音が聞こえる。

ひええええええええええ! 何でこうなるんだあああああああ

ああ?!

第8話：届け！CRUSHERSへの想い！

「うん。ちよつとかてえな」

「やっぱりもうちよつと早く火から下ろさないといけないね」

今日は大ちゃんのおうちで二人でカルメ焼きを作ってたんだけど、これがなかなか上手くない。

お玉に入れた水が少なくてザラザラになったり、火から下ろすのが早すぎて固まらなかったり、遅すぎて固くなったり。

「今度は百四十度で火から下ろしてみようか」

「もうこれで三十個目だぜ。さすがに疲れてきたよ」

「そうだねえ」

「最初はうまくいったけど、だんだん味にも飽きてきたしなあ」

「おんなじものばかりだからねえ。そういえば都留男くん、普段どんな音楽聴くの？」

「うんそうだなあ……最近はロックとかよく聴くぞ」

「ロックならいいCDあるよ」

大ちゃんは立ち上がって棚からCDを出した。

あのCDって、まさか？！

「じゃーん！ CRUSHERSっていうバンドのアルバムで、最近知ったんだ」

「おおー！ それならおいらも持つてるぞ」

「そうなんだあ。このベースのKEISUKEってかっこいいよね。友達でKEISUKEを意識したメガネをかけてる人がいるよ」

「おいらも伊達メガネ買ったぞ」

「ホント？ 今度持ってきて」

「いいぞ」

「キーボードのANCHAMもいいよねえ。ダサくないロン毛の人ってそういないよ」

「おいらも髪の毛伸ばしてえなあ」

「これから伸ばそうよ」

「そうだな」

「インパクトと言えば、何と云ってもボーカル兼ギターのKATSUZIEだね。KATSUZIEに憧れてモヒカンにした人が結構いるってTVで言ってたよ」

「すげえなあ」

「やっぱりかつちゃんって皆から好かれてるんだなあ。」

「大ちゃんもCRUSHERSに目覚めてくれたみたいだし、幼なじみとしてうれしいぜ。」

「そうだ！ ファンが増えたって事を本人にも伝えよう！」

「なあ大ちゃん」

「ん？ なあに？」

「KATSUZIEに会ってみたい？」

「そうだねえ。会えるなら会ってみたいね」

「実は、KATSUZIEはおいらの幼なじみなんだあ」

「えっ？ そうなの？」

「こんなつまんねえウソつくわけねえだろ？ 幼稚園から一緒なんだぞ」

「すごいー！」

「家知ってるから、今から会いに行こうか」

「うん！」

「じゃーん！ ここがKATSUZIEの家だぜ！」

「かつちゃんが住んでるマンションのドアを誇らしげに手で示した。」

「この奥にKATSUZIEがいるんだね」

「おう！ さっそく呼び鈴押すぞ」

「呼び鈴を押してしばらくすると、ドアが開いてかつちゃんが出てきた。」

「何だ？」

「今日はかつちゃんに会わせたい人がいるんだ」

「そいつか？」

「そうだぞ。山口大己さんって言って、最近CRUSHERSのファンに」

「帰ってもらえよ」

「え？」

「どうしてそんな事言うんだ？」

「俺はこいつに何も言う事ねえぞ」

「ちよつと待てよ！ 話を最後まで」

「うっせえなあ。俺はお前みてえに暇じゃねえんだよ」

「おいらだつて暇じゃねえよ」

「暇じゃねえか、公園で砂山造ったりして。その時にこいつと知り合っただら？」

「確かにそうだ。」

一人で砂山造ってる時に大ちゃんが来て、一緒に造り始めて、色々話して

でもかっちゃんに来て「知らない奴に声かけちゃいけない」って言われて、ゲンコツ喰らって、結局無理矢理連れて帰られちゃったんだよなあ。

ん？

「おめえまさか、あの時の事をまだ根に持ってるのか？」

「馬鹿な事言つてねえで、さっさと帰ってもらえよ」

「そうなんだろ？！ 数ヶ月も前の事を引きずってるなんて、しつこいぞ！」

「しつこくて結構！ じゃあな！」

勝次は強引にドアを閉めた。

「何だよ？！ せつかく連れてきたのにあの態度？！」

「仕方ないよ。無理に会ってもらつのも悪いし」

「でもこのままでいいのか？」

「いいよ、都留男さんの気持ちだけ受け取っておくから。ありがとう。じゃあね」

大己はにつこりして帰った。

ああ言つてたけど、本当は憧れのKATSUZIさんに会いたかつたんだろうなあ。

それなのに勝次ときたら！ 許せねえよ！

芸能人失格だぜ！

「ひっどおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおい！」

さっきの事を葉亜人に話すとカンカンになって怒鳴った。

「な？ ひでえだろ？」

「せつかく大ちゃんが来てくれたのにそれは無いよ！」

「そう思うだろ？」

「お前らさっきからうるせえぞ。静かに寝かせるよ」

真奈太朗があくびしながらドアから顔をのぞかせた。

葉亜人と真奈太朗は同じアパートに住んで、部屋が隣同士だ。

真奈太朗は一人暮らしだけど、葉亜人は清雄と二人で住んでる。

「寝てる場合じゃないよ！ 大ちゃんがかつじんのファンだって言うから都留たんが会わせてあげようとしたのに、かつじんったら追い返したんだよ?!」

「知るかそんなもん。とにかく静かにしろよ」

真奈太朗はめんどくさそうに去っていった。

「もーう！ 真奈たんまであんな風に言うなんて!」

「皆おかしいよな!」

「あんた達が怒つててもしょうがないでしょうが」

声と共に、しなこが呆れた表情でドアを開けた。

小学生の頃からの幼なじみで、男勝りで女らしさのかけらもない奴だ。

今日も深い青のTシャツにグレーのライダースジャケット、深い緑の綿パンに茶色い靴というダサイ格好で来てやがる。

「おめえ何しに来たんだよ？」

「葉亜人に借りてた本返しに来ただけよ。それと、外まで声が丸聞こえで近所迷惑だから」

しなこはドアを閉め、座敷に上がってちゃぶ台の前に座った。

「だって勝次がひでえんだもん！」

「そつだそつだ！」

「そつだとしても、それは大ちゃんつて人と勝次の問題でしょうが」

「おめえはこのままでいいと思つてんのか？」

「このままでいいも何も、二人が決める事でしょ？」

「う〜んでもなあ」

「しなこちゃん子供んときからかつじんとよくケンカしてたでしょ

?! 今度もガツンと言つてやつてよ！」

「昔と今は違うの。あんた達いい加減自分達が大人になつたつて事

分かりなさいよ。もう成人式から十五年も経つてんものよ」

「おいら達成人式行つてねえぞ」

「うん。公園でブランコに乗りながら「大人になんか、なるもんか

あ！」つて言つてたんだもん」

しなこは呆れ果て、こいつらどうしようもねえなオーラを全開に

してガツクリとした。

> i 1 1 9 5 7 — 1 6 3 7 <

「あゝあ、何で大人になると皆変わつちやうのかなあ？」

「でもかつじん昔の方が突つ張つてたよ。今の方が優しい感じする

もん」

「そつだよなあ。じゃあ何で大ちゃん追い返したんだろ？」

「その大ちゃんつて人はあんたらの共通の友達？」

「おう。おいらが砂山造つてる時に知り合つたんだ」

「砂山つてあんた……。まあでも気が合う友達が出来て良かったわ

ね」

「でも造つてる途中で勝次がすごい勢いでゲンコツ喰らわして来や

がって、「知らねえ奴に話しかけるな！」って言って、無理矢理連れて帰られたんだ。あいつその時の事まだ根に持ってやがるんだぜ」「勝次も勝次よね。あいつ、昔から都留男に対して過保護すぎるというか何というか。まさか、今でもそんな調子とはね」「だろ?」

「勝次には勝次の考えがあるんじゃないの? 都留男をそんなごの馬の骨が分かんないおっさんと付き合わせたくないとか」

「おいらもう大人だぞ!」

「じゃあ大人なりの対応を下さい。こんなところで騒いでも何にもならないでしょ」

大人なりの対応かあ。

帰り道を歩きながら、おいらなりの大人の対応を考えてみた。

かつちゃんの気が変わって、大ちゃんに会いに行くまで待つてみるとか?」

いや、でもやっぱり気になる!

うーん、しなごはああ言ってたけど、やっぱり明日また頼んでみるか。

「ダメなもんはダメだ!」

かつちゃんはギロリと睨みつけてきた。

昼休みの合間に、CRUSHERSが普段勤めてる楽器屋さんに来てみたのだ。

「大ちゃんはお前のファンなんだぞ!」

「それとこれとは話が別だ!」

「おんなじだ!」

「会ってあげたら?」

しなごがこちらの方までやってきた。

この近くにある八百屋さんをお父さんの代から引き継いでやってるのだ。

「お前には関係ねえだろ？」

「確かにそうだけど、ホントに都留男の事を考えてるんだったら、そんな意固地になる事ないでしょ？」

「俺は意固地になんかなってねえよ！」

しな／＼こを睨みつけるかつちゃん。

昨日しな／＼こは「昔と今は違う」って言ってたけど、やっぱり今でもいいコンビだなあ。

「それを意固地って言うんでしょうが！」

「誰があんな人の大事な幼なじみと堂々と砂山造ってるような奴なんかと会うかよ！」

「あんたも都留男も小学生じゃないでしょうが！　いつまでそんなガキみたいな事言ってるのよ?!」

「ぬあにい！　俺は都留男の為を思ってるんだぞ?!」

「だから都留男の為を思ってるんだったら、どうするのが一番いいのか考えてみなさいよ！」

その瞬間、かつちゃんの目が元に戻った。

顔のほてりも治まって、おいら達に背を向けた。

「…………ちよつと、待ってるよ」

しばらくして、一枚の横長の紙を持ってきておいらに渡した。

「今度のライブの特別優待券だ。そのヤマグチって奴に渡しとけ。」

それと、終わった後に特別に楽屋に入れてやるって伝えといてくれって、事は…………会う気になってくれたのか?!

「ありがとう、かつちゃん！」

「かつちゃんって呼ぶなってなんっつかい言ったら分かるんだよ?!

「いつものかつちゃんだあ」

「そうねえ。顔が赤くなってるし」

「いつものって何なんだよ?!」

第9話：広報で大パニック？！

「それでな、はあとんがずっとこけて思いつきり尻もちついたんだよ」
「相変わらずだな。何でも勢い良くやりすぎだ」

かつちゃんはげんなりしてため息をついた。
買い物に行った帰りにはったり会って、色々話してるんだ。

「それにしても、お前達とも長い付き合いだな」

「そうだなあ。兵ちゃんとかつちゃんが幼稚園からだから三十年ぐらいで、はあとんと真奈たんとしな〜こが小学生の頃からだけど、それでも二十五年以上経ってるのか。きよつちゃんは中学からだっ
たな」

「二十年も付き合ったら大体どんな奴か分かるけど、真奈太朗の事は未だによく分かんねえな」

「真奈たん昔つから寝てばかりだし、話ちゃんと聴かないし、付き合い悪いからなあ。おいらもよく分かんねえよ」

「BIG BANGではどんな感じなんだ？」

「すんげえ真面目に仕事してるぞ。よくおいらに注意もするし。でも昼休みに自分から飯食いに行こうって誘ったり、男盛食堂おしんで会った時に自分から話ふったりする事はねえなあ」

「そうか。何考えてるのか分かんねえからな」
確かにそうだ。

無口だし、体が熊みてえだからずっとしりしたイメージがあつて、子供や女の人からも恐がられてるしな。

でもバイトの久ながつちに仕事教えるの上手かったり、子供達に昔おいら達が使ってた遊び場教えてあげたり、おいらが落ち込んでる時にお菓子分けてくれたり、優しい所もあるんだよなあ。

そう言えば、昔からそらたる〜さんと話す時はよそよそしいな。

おいら達と話す時はめんどくさそうなのに、そらたる〜さんにだけ照れた表情見せてるよな。

ケツ触られた時も普段よりすんげえ恥ずかしそうにしてるし。

もしかして

「どうしたんだ？」

「もしかしたら真奈たん、そらたるくさんの事好きなのかもしれねえぞ」

「んな訳ねえだろ」

「いやいや分かんねえぜ。昔からそらたるくさんと話す時だけ顔まっかつかなんだよ。ケツ触られてる時もなんだかんだでうれしそうだし」

「馬鹿つ、お前と奴は違うんだぜ。第一奴が男好きな訳ねえだろ？」

「そうだよなあ」

かつちゃんの言うとおりだ。

おいら何馬鹿な事言ってるんだろ。

「なるほど。そう言う事だったのか」

声と共に健介けんすけが目（と、いうかメガネ）を光らせてやってきた。商店街でカメラ屋をやってる奴で、町内会の広報の編集委員もやってる。

とは言っても、名前を「広報わかぼし」から「スーパーパブリックわかぼし」に変えたり、町の特色や町内会の活動内容を書かずに妙な噂話ばかり書いたり、何かとやりたい放題だ。

おかげで町の人は皆迷惑してて、編集委員をやめるようにも言われてるけど、会長と変なコネがあるらしくなかなかやめないのだ。

「まさか、今の話聞いてたのか？」

「当然だろ？ 俺を誰だと思ってるんだ？ 若星町一の地獄耳ジャーナリスト、優田健介様だぜ。この町で俺が聞いてない会話なんかないぜ」

自慢そうにメガネを上げる健介。

ぬあにが「俺が聞いてない会話なんかない」なんだか。

「言っとくけど、冗談だからな。また変な記事にすんなよ」

「変？ 俺が書く記事が変な訳ねえだろ？」

「どう考えても変だろうが！ この間はしなぐに彼氏が出来たと
か言って結局親戚だったじゃねえか！」

「奴からボコボコにされた事、もう忘れたのか？」

「あれはあれ、これはこれだ。今度こそは本当だぜ」

「毎回そう言ってるけど、本当だった試しがねえじゃねえか」

思わず目を細めるおいら。

かつちゃんも完全に呆れてる。

「お前ら重要な事を忘れてるぞ。まだウソだって決まったわけじゃ
ねえぜ」

「本当だつて決まったわけでもねえぞ」

「とにかく、このネタは頂いていくぜ！ じゃあな！」

健介は止める間もなく去っていった。

「全く！ しょうがねえ奴だな」

「ほつときゃいいんだよ。どうせガセに決まってるんだからよ」

「そうだな」

翌日

「都留男様」

昼休みに、BIG BANGの向かいにある男盛食堂で大好きな
焼肉定食を食つてると、かけるが話しかけてきた。

中学生の時においらがサッカー部に入ってた頃からの後輩で、ず
くくとなついてくれてるかわいい奴だ。

おいらの事を尊敬してくれてるらしく、社会人になった後でも敬
語で話しかけてきて、最初は変に思ったけど、今じゃもう慣れてる。
チビでデブでおまけに虹色のバンドナでハゲを隠してて、女の人
からかなり退かれてるけど、本人は全く気にしてないらしい。

「なんだ？」

「これって本当なんですか？」

手に持ってた広報を机に置いて、見せてきた。

そこには案の定、健介の野郎の馬鹿記事がデカデカと載っていや

がった。

「んな訳ねえだろ？ おいらが冗談で言った事をあいつが真に受けて書いただけだよ」

「そうなんですか」

「それよりも、迷惑がかかるから本人には言わねえようにしようぜ」「そうですね」

「何のお話？」

奥から漢太^{かんた}おねえさん（こう呼ばないと怒られるのだ）が出てきた。

スキンヘッドで、頭とおでこに入れてる椿の刺青がとにかくインパクト抜群だ。

太いへの字型のまゆげ、大きな目、眉間や口元のシワ、がっしりとした体格といかにも「男！」っていう感じだけど、本人曰く「心はいつまでもオ・ト・メよんっ」「だそうだ。」

自称「ミス若星町商店街」だけど、当然誰も認めてない。

お店ではいつもかっぱう着を着てるけど、お世辞にも似合ってるとはいえない。

「な、何でもねえよ」

「そ、そうですね」

と言いつつも、おいら達はすっかり脂汗を掻いてる。

「あらそう？ 何かあたしに隠してるような気がするんだけど」

「か、隠し事なんかねえよ。なっ、かける」

「は、はい！ ありません！」

「あんた達、正直に言わないとおねえさんの愛のお仕置きよおん漢太おねえさんの顔がカウンター越しにどんどん迫ってきた。うつつ、こええよ。」

「ほ、本当に何でもねえから！ こ、ごちそうさまあ！」「ごちそうさまでしたあ！」

お金を置いて逃げるように食堂を出た。

おねえさんじゃなくておっさんだろ？

兵ちゃんや露さんやそらたるくさんと同級生らしいからもう四十だし。

「あっ、都留つち！ 大変だよ」

お店から久つちが慌てて出てきた。

この近くの色好学園中学校の二年生で、本当はバイト禁止なのに柔道部の部費の為にバイトしてるのだ。

まあおいらも中一の頃からBIG BANGで働いてるから人の事は言えねえが。

柔道をやってるだけあって、体はぶくぶくと太っててとってもデカイ。

ぶつといまゆ毛に、おつきくてらんらんとした目に赤いメガネがいつ見ても目立ってる。

「どうしたんだ？」

「広報を読んだ人がどつと店に押し寄せて来たんだよ」

「なにい?!」

まさかそんな事になってるなんて!

「とにかくすぐに止めようぜ!」

「そうだね!」

「はい!」

店に入ると、久つちの言うとおりの人が一斉にこつちに来た。

> i 1 1 9 9 9 — 1 6 3 7 <

「都留男さん！ 真奈太朗さんがそらたるくさんの事好きだって本当なんですか?!」

「本人に訊こうと思ってもないんですよ!」

「同僚の口からお願いいたします!」

そ、そんな事言われても……。

「かけるさんからもお願いします!」

「えっと、その、あの」

と、とにかく町の皆さんを落ち着かせなきゃ。

「み、みなさん落ち着いてください」

「落ち着いていただけますか！ 私はひそかに真奈太郎さんの事が好きだったのよ?!」

「私は宙太郎さんの事が好きだったのよ！ こんなのって無いわ！」「き、気持ちは分かりますが、だからと言ってこんな事をされましても」

「こんな事って何よ?!」

「そうだそうだ！ 俺達はお客なんだぞ！」

何も買ってねえくせに何がお客だ！

「お願いします！ 噂の真相を教えてください！」

「僕らもお願いします」

「私からも」

「わしからも」

「俺からも」

「あたしからも」

「わたくしからも」

「あたいからも」

「あたくしからも」

「わてからも」

「おらからも」

「おいどんからも」

「ミーからも」

「いい加減にしてください！」

奥から声が聞こえ、岳一さんがカンカンになって現れた。

そらたるゝさんの同級生で、普段は主に経理事務をやってる。

店の中で一番厳しい人で、おいらもしょっちゅう怒られてる。

「うちの店員は芸能人じゃありませんし、そうだとしても迷惑です

！ ここはプライベートを探る場所じゃありません！ 何も買わないなら出ていってください！」

その直後、町の皆さんはがっかりしたり舌打ちしたり文句を言ったりしながら帰っていった。

「ありがとうございます」

「いや、いいんだ。それにしても、何でこんな事になったんだ？」「すみません。昨日僕が冗談で言った事を健介が聞きつけて記事にしたんです」

「そうだったのか。まったく、あいつにも困ったものだな」

「それにしても、真奈つちがそらたろくさん好きだなんて、都留っちよく考えたね」

「俺がどうかしたか？」

「気がつくよ、真奈たんが帰ってきてた。」

「な、何でもねえよ」

「うつつ、また脂汗掻いてるよ。」

「あつ、真奈つち。広報見た？ 真奈つちがそらたろくさん好きだつて事が」

「わくつ、バカ！」

慌てて久つちの口を塞いだ。

「お前何バタバタしてんだ？」

「何でもねえつて」

「広報つてこれか？」

真奈たんは手に持つてる広報を掲げた。

「も、持つてたのか？！」

「さつき健介の奴がばら撒いてたぞ。お前が隠してる事も知ってるからな」

「うつつ、そうだったのか」

「何でそんなコソコソしてたんだよ」

「だって、直接きいたら真奈たんに迷惑かかるとかと思って」

「かかる訳ねえだろ？ 本当の事なんだから」

真奈たんはめんどくさそうに頭をボリボリ掻いた。

なぐんだ、ホントの事だったんだ。

よかったよかった。

……え?!

「ホントの事なのか?!」

「若い頃の話だけだな。今はそらたろくさんが色んな男に声かけた
りしてるのが分かってるし、もう愛とか恋とかいう奴は諦めてるぜ」

「そ、そうだったのか」

「おいらの冗談がホントだったなんて……。
信じられねえぜ。」

「つて事は、ちゃんと気持ちを伝えてないの?」

「んなもん伝える訳ねえだろ?」

「今からでも遅くありませんよ」

「だから、今は愛とか恋とかいう目で見てねえって言うてるだろ?」

「その気持ちは伝わってるぞ」

奥からそらたろくさんが現れた。

その瞬間、真奈さんの顔がまっかつかになった。

「き、聞いてたんですか」

「ああ。仮眠を取ってたんだが、岳一の声で目が覚めちまってるな。
それからずくと聴かせてもらってたぞ」

「にんまりするそらたろくさん。」

「それはすまなかつたな」

「いいんだ。なんか大変だったみたいだしな」

「い、いつから気付いてたん……ですか」

「そりやお前がバイトし始めてすぐに決まってるだろ」

「そんな昔かよ。」

「真奈さんは高校の時からバイトしてるから、かれこれ十九年前に
なるな。」

「つーか十九年も気づかないおいらも相当鈍いよな。」

「気付いてたんなら……なんでもっと早く言ってくれなかつたんで
すか?」

「馬鹿だなあ。店員同士で恋愛のゴタゴタ起こしたら店長失格だろ」

？ 俺は真奈だけじゃなくて、都留男もかけるも久兼ひさかねも岳一も烏美人も乱蔵も皆が大好きなんだよ」

そう言つて、おいら達全員の頭をなでなでしてくれた。

「そらたるゝさん」

「ん？ なんだ？」

「俺……昔は好きでしたけど……今は実らなくても、そらたるゝさんが男に声かけまくつても、どんな形でも傍に入れて幸せです」

「そうか。嬉しい事言ってくれるじゃねえか」

そらたるゝさんはもう一回真奈さんの頭をなでなでした。

大変な騒ぎになつちやつたけど、真奈さんの事をもっと知れて良かったかもしれねえな。

「なゝるほど。そういう事だったのね」

こ、この声は？！

恐る恐る振り向くと、そこには予想通り漢太おねえさんが燃え上がりながら立つた。

「都留たん、何であたしに教えてくれなかったのかしらん？」

「む、むやみに言いふらすと、迷惑かかると思つて」

「あゝら、そんなにあたしは信用されてないの？」

「そ、そんな事無いですう」

漢太おねえさんが近づいてくる度に、おいらは一步步後ずさりしていった。

「かける、何があつたんだ？」

「さっきの話を漢太おねえさんに内緒にしてたんです」

「だからあんなに慌てて出て来たんだね」

うつつ、あいつら人が困つてる時に平気でしゃべってやがる。

「お、お前ら助けてくれよお」

「む、無理だよお。漢太おねえさんからすごいオーラ出てて怖いもん」

「都留男様、大変申し訳ありません。ここは耐え忍んでください」

「何言つてるの？ かけるんも同罪よ」

第10話：隣町にライバル店が出来た？！

「あっちいなあ」

床にモップをかけながら、つい独り言が出ちまった。

ここ最近暑い日が続きまくりだ。

夜寝れない事が多いし、アイスや扇風機が手放せないし、お客さんも半袖や短パンが目立つようになった。

あまりにも暑いから、つい今日から制服の夏服が解禁された。

白い襟が付いたポロシャツで、青と白の爽やかなストライプ柄だ。冬服と同じで、中学時代にここでバイトし始めた頃に、おいらがデザインした奴だ。

下は相変わらず宙太郎さんのズボンだけど、まあいっか。

「都留男様、僕は外を掃いてまいります」

かけるがほつきとちり取りを持ってやってきた。

「おう、よろしくな」

ぐだぐだ言っても仕方ねえし、おいらもかけるを見習ってモップかけるか。

「邪魔するぜ」

ん？ お客さんか？

入口の方へ向くと、おいらと同じ年ぐらいの男の人が立ってるのが見えた。

> i 1 2 0 0 0 — 1 6 3 7 <

太いまゆ毛にだんご鼻にたらこ唇、アゴヒゲはジヨリジヨリしてる。

グレーのTシャツに薄い緑の短パンを履いてて、ぽっちゃりした体だ。

「いらっしゃいませ」

「BIG BANGはここだよな？」

「はい、そうです」

「ふん」

男は店内を見渡した。

もしかして、初めてなのか？

「……ちやつちい店だな」

な、何い？！

いきなり現れて、何なんだこいつ？！

「お前こんなところでよく働けるよな」

「はい。このお店が大好きですので、ずっと働かせてもらってます」

「とか何とか言って、ホントは金の為なんだろ？ まっ、生活して

いかなきゃなんねえしな」

くうっ、ムカつく！

でも我慢だ！ ここでキレたら大人として、社会人としてダメだ！

「いえいえ、お客様の笑顔が第一です」

「へいへい、マニュアル通りの綺麗事はいいから」

だから何なんだよさつきから？！

イライラするけど、ここは大人の対応をしなくっちゃ！

「何かお探ですか？」

「店長の黒巻宙太郎って奴はいるか？」

「申し訳ありません。店長はただ今出かけております」

「そうか。じゃっ、お前でもいいや」

男はポケットから紙を出して渡してきた。

『時代の最先端に行く総合エンターテイメントショップ「ISLA

ND」

夜月町についてオープン！

コスプレからおもちゃ、同人誌に至るまであなたのエンターテイメントライフを充実させる品揃えで、皆さまのお越しをお待ちしております！』

紙にはそう書いてあり、店までの地図や住所、連絡先が後に続い

てた。

「それを店長に渡しといてくれ」

「はあ?! いきなり現れて嫌味を言った挙げ句、他の店の宣伝を渡せだど?!」

もう頭に来た! これは何が何でも追い返すしかねえな!

「困ります! 大体あなた何なんですか?!」

「俺は酒井民之亮。さかいたみのすけその店のもんだ」

「何がその店のもんですか! 人の店に来てまで宣伝するなんて、何考えてるんですか?!」

「ふんつ、俺達の店はお前らがやってるこんなちんけな店より、数倍も数十倍も数百倍もゴージャスで便利で商品の品質もいい店だぜ」
「それがどうかしたんですか?!」

「こゝんなもんとはレベルが違うって事を言いたいだけだよ!」

民之亮とやらはその辺にあるぬいぐるみを掴んで、壁に向かつて思いつきり投げつけた。

ぬいぐるみは壁にぶつかり、さっき拭いたばかりの床に落ちた。
あのぬいぐるみ、超自が「おこづかいたためて、いつか買うんだ」
って楽しみにしてた奴だ。

海外から輸入した奴で一個しか手に入らない奴だ。

おいら達が……毎日丁寧に並べてる商品に……そんな事するなんて!
て!

ぜつつてえ許せねえ!

「用が済んだんならさっさと帰ってください!」

怒鳴りつけると、やっと民之亮とやらが帰っていった。
入れ違いにかけるが中に入ってきた。

「都留男様、あの方は?」

「知るかよそんなもんっ! 何がこれを渡せだ!」

奴から渡された紙をくしゃくしゃにして床に叩きつけてやった。

「何ですかそれ?」

「他の店の宣伝だよ! あゝっ、ムカつく!」

「都留男様、少し落ち着かれた方が」

「うるせえ！ 大体何でお前今でも敬語なんだよ?!」

「ぼ、僕に八つ当たりされましても」

「お前達何騒いでるんだ?」

奥から宙太郎が出てきた。

こんな時はこいつのニヤニヤ顔さえ嫌に思えてくる。

「あつ、そらたるゝさん。都留男様が大変お怒りになられて、紙を床に叩きつけなさったんですよ」

「そうか。これだな」

紙を拾い、元通りにする宙太郎。

「ほう。夜月町（よげつまち）にISLAND（いすらんど）ってのがオープンしたのか」

「夜月町（よげつまち）って確か、隣町でしたよね?」

「そうだ。明日皆で行ってみないか?」

「僕は遠慮しときます」

誰がそんなもんに行くか!

「都留男、もう少し大人になれよ」

「だってさつき来た奴が嫌味言つて紙渡した拳（こぶし）げ句、商品を乱暴に扱（あつか）ったんですよ!」

「嫌味言つ奴や商品を乱暴に扱（あつか）う奴なんか今までも何人もいただろ? とにかく、明日は休みだし、皆でここに行こうな」

「僕はぜ（ぜ）った（った）たい行きませんか」

「そうか。好きにしてくれ」

「おかわり!」

もうこれで飯十杯目だ。

でも今日は食わなきゃやってられねえ!

「都留男、俺達もう若くないんだから無理にやけ食（やけく）いたら体壊（たゝ）すぞ」

「知るかつ! 飯でダメなら酒だ酒つ!」

茶碗を置いて、台所の冷蔵庫を強引に開けた。

「やけになつて酒飲むはもつと危ないぞ」

「あゝっ！ 大事に取つといたコーラのチューハイがねえ！」

「ごめん。この間露が来た時に飲んじまった」

「そんなあゝ！」

今日はとことんついてねえぜ。

「都留男、とにかく落ち着けよ。かけるくんだつてそう言つてたんだろ？」

「だつて宣伝したり店の悪口言つたりしたんだぜ！」

「その民之亮さんがそんな事したのは何か理由があるんだよ。せつかく宙太郎が行こうつて言つてるんだから、明日は行けよ」

「やだ！」

「他の店見るのもいい経験になるぞ」

「ぜつてえやだ！」

「何か面白い発見があるかもよ」

「ねえよそんなもん！」

「そうか。都留男がそこまで言うんだつたら仕方ねえな」

兵吉は立ち上がったどこかへ行った。

ふんっ、あいつまで宙太郎側に立つのかよ。

「都留男」

さつきよりも明らかに恐い兵吉の声が聞こえた。

そして鞭を手に持ち、厳かにリビングに現れた。

わざと俺に見えるように堂々と鞭を構えてみせる。

や、やべえ！ これは明らかに本気モードだ。

「どうしても明日行かなかつたら、裸に引ん剥いて縛り上げて、この鞭でケツを千回打つぞ！」

「いいい行きます行きます！ 行きますからどうかやめてください
！」

「何なら一万回にしてやるつか？ それとも十万回がいいかな？」

「行きます行きます！ いや、行かせてください！」

「そうか。なら楽しんで来いよ」

「は、はい」

「こ、こええよお。」

超自といい漢太といい、何でおいらの周りにはこんな奴ばかりなんだ？

翌日

「都留男様、来て下さるって信じてました!」

集合場所(って、言っても店の前だけど)に着いた途端、かけるが目を輝かせてこちらを見てきた。

「いやあまあ、色々あつてな」

「さては、兵吉の脅しが利いたな?」

相変わらずニヤニヤするそらたろくさん。

多分昨日の事は電話かなんかで本人から聞いたんだろう。

「そ、そうです」

「いいから早く行きましようよ」

「そうだな。いやあ楽しみだなあ」

何だかんだで歩きだした。

「どつやつて行くんですか?」

「十麗とれいしん印電車の若星町駅まで行って、電車で一駅だ」

「電車でお出かけなんてわくわくしますね」

「おっ、かわいい事言うじゃねえか。真奈はどうだ?」

「い、いや……俺は……別に……」

「俺と一緒に何でも楽しいんだろ?」

「そ、それはその……ですね……」

「照れる事ないぞ。この間愛を確かめ合ったばかりじゃねえか」

「あ、愛とか恋とか言ったら店長失格だって、言ってたじゃないですか!」

「ははは、冗談だ」

そつこつしてるうちに駅に着き、電車で十分ぐらいで夜月町についた。

「いやあ、懐かしいなあ。夜月町なんて何年ぶりだろ」

「そう言えば夜月町は宙太郎さんの故郷でしたね」

「ああ。高三で店を始めるまで住んでたな。高三から大学卒業までは、若星町に構えた店兼家と夜月町にある学校を行き来したなあ」

宙太郎さんはホームを歩きながらしみじみした。

「確か大学は兵ちゃんから「経営学学んだ方がいい」って言われて行ったんですよ」

「そつだ。俺は店の経営一本で行こうかと思っただが、あいつが強く勧めるからな。高三の時は店の経営と大学の受験勉強ですんげえ忙しかったなあ」

そんな忙しい中で、当時中一のおいらをバイトで（本当はダメだけど）雇ってくれたんだな。

ありがてえ事だ。

「何でお前が泣いてるんだ？」

「だってえ、お店と受験勉強で忙しい時に、本当はダメなバイトをさせてくれたのが嬉しくて……。おいらと真奈たんが高三の時も「行き場が無いんだったら、これからもずっと雇ってやるぞ」って言うて下さつたし、一年後にはかけるにも同じ事言うてたし」

「涙もろい奴だなあ。ほらっ、さっさとISLANDって店探すぞ」

「はい！」

駅の出口から歩いて商店街まで行き、ISLANDと思わしき店を探し始めた。

「なかなか見つかんねえなあ」

「何言うてんだよ。そこにあるじゃねえか」

真奈たんが指さす方向を見ると、そこにはすんごいでっかい派手な建物があった。

壁は真っ黄色で、電飾で「ISLAND」って書いてあって、周りにも宝石や星や動物の電飾が散りばめてある。

のぼりもたくさん立ってて、バニーガールが風船やピラを配ってる。

「すげえな」

「僕たちのお店と違って、華やかですね」

「華やかっつーか、趣味わりいな」

「あんた達、ここに来たんでしょ？」

「バニーガールのうちの一人がこちらに来て話しかけてきた。」

「そうですけど」

「今セールやってるから、何か買って行ったら」

「バニーガールは紙を渡してきた。」

「ぶっきらぼうな奴だな。」

「お譲ちゃんここで働いてるのか？」

「そらたろ〜さんが話しかけた。」

「そう。バイトだけど。あんた達は何しに来たの？」

「おじさん達も隣町で店をやってな、参考に來たんだ」

「ふ〜んそうなんだ。じゃあがんばってね」

「バニーガールは元の位置に戻った。」

「なんかやる気無さそうな感じの奴だったな」

「そうでしたね」

「え〜つとなになにに、「開店記念フレッシュセール実施中！ 全品

六割引！」こんな事してんのか」

「僕たち全然安売りなんかしてませんからねえ」

「いいから中に入ろっぜ。こんなとこにばっかりいても仕方ねえだ
ろ」

「じゃあセールとやらを見せてもらおうじゃねえか」

張り切って、堂々と店内に足を踏み入れた。

「な、何じゃこりゃ！」

「す、すごいですー！」

中は想像を絶する広さだった。

チェーン店のスーパーみたいな広さで、人もうちの数倍は入って
る。

商品も今まで見た事が無いようなものがズラリと並んでる。

「これはすげえな」

「いい勉強になりそうだ」

「でも値段はどうかな？」

試しにその辺にある軍服のコスプレを手にとって、値段を見てみた。

「うっ、うちより三千円も安い！」

「こんなんで儲かんのかよ」

「意外と儲かるのかもしれないぞ」

「都留男様」

かけるが肩を突いてきた。

「何だ？」

「あの方、昨日の方ではないでしょうか？」

見ると、確かに前の方に民之亮がいた。

黄色い襟が付いた赤いポロシャツを着てる。

「ほっとけばいいんだよあんな奴」

「よう。どうだ？ お前らの店とは違うだろ？」

民之亮がこつちまで来やがった。

「安いのはいいけど、店の見た目はどうかと思うぞ」

「俺が見た目決めてんじゃねえよ」

「バニーガールが態度悪かったぞ」

「ああっ、あいつは岡光おかみつはるかかって言っつて、前からああなんだよ」

「そうだったのか」

「お前ら仲良しだな」

太ったメガネのおつちちゃんがこちらにやってきた。

民之亮と同じく、黄色い襟が付いた赤いポロシャツを着てる。

この服装はこの制服なのか？

「ち、違います！ そんなんじゃないです！」

「仁にしよみ之みじゃねえか！」

そらたろゝさんが嬉しそうに声をかけた。

「知り合いなんですか？」

「知り合いも何も、俺の学生時代からのライバルなんだぜ。そうかあ、やっぱりお前の店だったのか」

「おいらはてつきり民之亮の店だと思ってたぜ」

「んな事ひとつことも言ってるねえだろ！」

「まあな。高三の時のあの日、絶対店造って対抗するって約束しただろ？」

「そうだったな。しばらく連絡ないと思ったら、開業で忙しかったんだな」

「俺はお前に勝つ為に、22年間必死で会社で働いて開業資金を貯めてたんだ。お前みてえなボンボンと違って、一般庶民は大変なんだよ！」

「そう言えばそらたろくさんって、日本で三本の指に入るおもちや会社の社長の息子だったな。」

高校三年生の時に「店をやる」って言ったら「じゃあうちの商品を入荷するって約束ですぐ資金を出してやる」って言われて、一瞬で店持つこと出来たみたいだし、普通の家の人にとっては夢みたいな話だ。

「ご苦労さま」

「まあおかげで民之亮って言う恋人とは出会えたけどな。俺が開業するって言ったら「一生ついていきます」って言うってくれたんだ」

え？恋人？

「ほう、良かったな」

「お前、仁之さんと付き合ってるのか？」

「ま、まあな」

「へえ、お前みたいなダサイブサイクな男にも恋人出来るんだな」

「うるせえ！ お前だったただのチビデブおっさんだしイケメンじゃねえじゃねえか！」

「俺とそんなに身長変わんねえだろ？」

「俺の方が1cm、いや、2cmは高いぜ！」

「お前らいつの間になんかに仲良くなっただ？」

仁之さんが不思議そうにこちらを見てきた。

「うちの都留男はな、すぐに誰とでも仲良くなれるんだ」

「へへへ、そう言われると照れちゃいますね」

「それはいい事だな。民之亮も見習えよ」

「よ、余計なお世話ですよ！つてかお前、ツルオって言うのかよ！
変な名前だな」

「お前の名前だつて変じゃねえか」

「と、とにかく！俺はお前の永遠のライバルだからな！」

「おっ、言つたな！じゃあおいらもお前の永遠のライバルだ！」

永遠のライバルかあ。

昨日はムカついたけど、なんか面白そうな奴じゃねえか。

第11話：海で女の人と遭遇？！

「うわあ、やっぱ海はでっけえなあ」

おいらは車の窓を開けて、目の前いっぱい広がる海を見てた。

梅雨も明けたし、都合のいい日にかっちゃんの車でみんなで海に行こうって事になったんだ。

「窓から顔出してばっかだとあぶねえぞ」

「分かってるって」

「でも残念だね。兵吉さん来れなくて」

後ろから大ちゃんのちよつと寂しそうな声が聞こえた。

「宙太郎さん達と温泉旅行に行ってるから仕方ねえよ。同級生水入らずで楽しんでるって」

「そうだね」

「都留たん、大ちゃん。海に着いたらおっきい砂のお城作るうね」

「おう！」

「お前らいつつも砂山作ってるじゃねえかよ」

「そのテクニクを生かすんだよ」

「やれやれ」

海に着くと駐車場から砂浜まで歩いて、適当な所にレジャーシートを敷いてパラソルを立てた。

「よおっし！ さつそく水着になって泳ぐぞお！」

「ちゃんと準備体操もするんだぞ」

うつつ、そうだった。

「は〜い」

「都留たん、早く服脱いで体操しようよ」

「そうだな」

「ぼくも脱ごうかな」

「よお〜っし！ じゃあ、みんなで一斉に脱ごうぜ！ せ〜の！」

着てきたTシャツを一気に脱ぎ、短パンも脱いだ。

下に水着を履いて来てるから、これだけでもうおしまいだ。

「とつとと体操済ませて泳ごうぜ！」

「お〜う！」

体操を済ませて、早速海まで走っていった。

大ちゃんとはあとんと三人で水をかけあったり、泳ぎの競争をしたり、海の中に潜ったりした。

海に飽きると今度は砂浜で文字を書いたり、砂のお城を作ったり、嫌がるかつちゃんを無理矢理引つ張つてきて砂に埋めたりした。

「いやあく、やつぱ海は最高だなあ」

レジャーシートに座って、持ってきたジュースを飲んだ。

「何が最高だ！ 勝手に人を埋めやがって！」

かつちゃんはまだ怒ってる。

埋められた後自分で出てきてゲンコツ喰らわしてきたからなあ。

「せっかく海に来たんだから楽しもうじゃねえかよ」

「俺は来たくなかったんだよ。それなのに、運転免許持ってねえおめえらが連れて行けつて言うから仕方なく来たんだよ」

「え？ どうして来たくなかったんですか？」

大ちゃんが不思議そうに訊いた。

「それはだな……」

「おめえ、いらねえ事言ったら殴り倒すぞ」

「いいじゃねえかよ。大ちゃんはお前のファン……」

「それなら尚更言うな！」

「かつじんはねえ、カナツチなんだよお」

海の家でかき氷を買って戻ってきたはあとんが堂々としやべった。その瞬間かつちゃんの目の色が変わって、はあとんにプロレス技をかけ始めた。

かき氷が見事にこぼれて、はあとんの顔はべちゃべちゃだ。

「はああああああああとおおおお！ お前って奴はああああ

あ！

「うわあつ！ やつ、やめてえ！ ごめんなさあああああああ
あい！」

「ははははは！ おもしろえ！」

「勝次さんつて、カナヅチだったんだね。それで泳ごうとしなかつ
たんだ」

「他のファンに言うと、お前までボコボコだぞ」

「気をつけるよ」

「さあつてと、おいらはさつき膨らませた浮輪で浮いてくるかあ」
「いつてらつしやい」

浮き輪を持って海に入り、適当な場所に浮かせて乗った。

みんなでわいわい騒ぐのもいいけど、こうやってのんびり浮くの
もいいよなあ。

この浮き輪は若い頃から使ってるから、もう十年以上もってるよ
なあ。

はあ、若い頃かあ。

あの頃よりかは体力は落ちたけど、今でもこうやって海に来れる
つていいよなあ。

青い海、白い砂浜、照りつける太陽……。

波の音がいい具合に聞こえてくるぜ。

たまにはこうやってのんびりするのもいいよなあ。

そんな事を考えながら浮かんでるうちに、時間が過ぎていった
どれぐらい経ったんだろつ？

もうそろそろみんなの所に戻ろつかない？

さつきはあとんがかき氷こぼしてたから、代わりの奴を買ってあ
げてみんなで食べよう。

浮き輪から下りて、砂浜の方へ走っていった。

あれ？ でも何か景色が違う。

さつきはどこまでも砂浜が続いてたのに、今は奥の方で木が生い
茂ってる。

人気はほとんどなくて、ただ風が吹いてるだけだ。
もしかして……全然違うところに流された？！

「おい！ みんな〜！」
返事が無い。

「かつちゃん！ 大ちゃん！ はあとくん！」
やっぱり返事が無い。

ど、ど、どうしよう！？
とりあえず探すしかねえな。

「大ちゃん！」

「はあとくん！」

「かつちゃん！」

「どこだ〜？」

「いたら返事してくれ〜！」

「おい！」

その辺を走りながら、何度も呼んでみた。
でもみんなは全然見つからない。

はあ……何でこうなっちゃったんだろう？

みんな今ごろ心配してるだろうなあ。

もう走るのも疲れて、とぼとぼ歩くしかなかった。

こんな事なら、誰かと一緒に遊んどけばよかった。

みんな……ごめん。

ふと、足元に何かが当たった。

ん？ 何だろう？

とっても柔らかい感触だ。

見てみると、赤い水着を着た髪の毛の長い女の人が倒れてた。

「うわあっ！？」

思わず声が出て、とっさに後ずさりした。

その拍子に尻もちもついちまった。

恐る恐る近づいてみた。

二十代ぐらいの人で、髪の毛は波打ってて、化粧もばっちりして

る。

背は結構高めだ。

どうしたんだろう？

「大丈夫ですか？」

体を揺すって、声をかけてみた。

反応は無い。

「もしもし」

もう一度体を揺すって、声をかけてみた。

まだ反応は無い。

「聞こえてますか？」

さらに体を揺すって、声をかけた。

「う……うん」

女の人が目を覚ました。

大きくてキリツとした鋭い目だ。

「だ、大丈夫ですか？」

「はい、何とか」

女の方は起き上がった。

「よかったあ」

一時はどうなるかと思ったぜ。

「あたし、ここに倒れてたんですか？」

「ええ、そうです」

「助けていただいて、どうもありがとうございます」

女の方が突然、おいらの手を握りしめてきた。

顔が真っ赤になるのが分かった。

> i 1 2 2 5 8 — 1 6 3 7 <

こういう時、どうすればいいんだろう？

今まで女の人から手を握られる事なんてなかったからなあ。

手を握られるどころか、女の人と話すことすら苦手だしなあ。

と、とりあえず何か言わなきゃ。

「ど、どういたしましたか？」

「あなた、お名前は？」

「で、出淵都留男です」

名前きかれるとは思ってなかったぜ。

「あたしは井ノ内千亜希いのちちあきです」

井ノ内さん？ 変わった名字だなあ。

まあおいらの名前もよく「変わってる」「って言われるけど。

「い、井ノ内さんですか。よ、よろしく」

「名字で呼ぶなんて、何だか遠いような気がしません？」

「そ、そうですね？」

いきなり何言い出すんだろう？

「どうぞ名前でお呼びになってください」

な、名前で？！

最近の若い人って、大胆なのかな？

う、うーん。まあ、その方がいいんだったら、呼んでみようかな。

「ち、千亜希……さん」

これでいいのかな？

「都留男さん。私達、ここで出会ったのは何かの運命ですね」

「は、はあ」

大分イタい人だな。

「さあ二人で、未来という懸け橋を渡っていきましょう！」

な、何なんだろうこの人。

よく分かんねえなあ。

あっ！ おいら大ちゃん達を探してたんだった！

どうしよう？ 井ノ内さんにきいてみようかな？

「あ、あのお、それはいいんですけど」

「何でしょうか？」

「こ、この辺りで、ぼ、僕と同じぐらいの年で、か、髪の毛の色が派手な人達を見ませんでしたか？」

「いいえ、そんな奴らは知りません！」
や、奴ら？

髪の毛の色が派手な人達が嫌いなのかな？
まあいいや。知らねえもんはしょうがねえ。

「そうですか」

「あのお」

「はい」

「よろしければ、その方々を探すのを手伝いましょうか？」
えっ？！

「い、いいんですか？」

「もちろんです。困った時はお互い様です」

おおーっ！ それはありがてえ！

でも、なんか申し訳ねえな。

「お、お気持ちは、ありがたいんですけど、や、やっぱり、一人で探します」

「いいえ、行かせてください！」

な、何かよく分かんねえけど、押しの強い人だなあ。

「で、でも、来ていただくのは、申し訳ないですし」

「そんな事ありません！ さあ、一刻も早く探しに行きましょう！」

うっつ、確かにこうしてる間にもみんな心配してるだろうしなあ。

こう言ってる事だし、一人より二人の方が見つかりやすいかもし
れねえな。

「で、では、よろしくお願いいたします」

「早速探しましょう！」

井ノ内さんはそそくさと立ち上がり、おいらの手を引っ張って
いった。

ちよつと強引だけど、手伝ってくれるみたいで良かった。

「すみません」

「はい」

さっそくその辺にいる人に話しかけた。

「この辺りで、三十代ぐらいで髪の毛の色が派手な方々を見ませんでしたか？」

「さあ。知りませんねえ」

「そうですね。ありがとうございます」

その人の所を離れて、またおいらの手を引っ張っていった。

「わざわざすみません」

何だかすごく恥ずかしくなった。

本当はおいらがきいて回ったらいいのに。

「いえいえ。それよりも、早く見つかるといいですね」

「そうですね」

そのためにも、おいらも努力しないと！

「すみません」

「はい」

今度はおいらが話しかけた。

「この辺りで、三十代ぐらいで髪の毛の色が派手な人達を見ませんでしたか？」

「いやあ、見ませんでしたねえ」

「そうですね。ありがとうございます」

その後もこんな感じで聞き込みをして回った。

でもみんなは全然見つからない。

歩いてるうちに人が多い所にも出てきたけど、それでも見つかなかった。

だんだん体がだるくなってきた。

暑い中で何も飲まずにずっと歩いてきたからなあ。

「あ、あのお」

「はい」

「ちよつと、一休みしません？」

「そうですね。あの海の家で、冷たいものでも飲みましようか」
た、助かったあ。

早速、海の家まで歩いて行って、中に入った。

「つ、都留男！」

この声は！あのテーブルに座ってるのはまさか？！

「し、しなごこ！」

「あんた……誰よその女！」

「いや、話せば長くなるんだけど、あの、海で出会って、かつちゃん達を探すのを手伝ってくれてる人だよ」

「勝次達を探す？ まさかあんた、あいつらと一緒に来てはくれたの？」

「そうなんだよお。で、探してたらこの人と会ったんだ」

「それはいいけど、何でこんなとこにまで来てもらってんのよ」

「いや、この人がどうしても一緒に探したいって言ってたし、一人より二人の方がいいかなあとと思って」

「はあ、そうなの」

「都留男さん」

「はい」

「カツジって、何ですか？」

あっ、しまった！ おいらかつちゃん達の名前言うの忘れてた！

そりゃ見つかるわけないよお。

もつと早く言ったらアナウンスだつて入れてもらえてたかもしれないのに。

「すみません。今探してる友達の名前なんです。湯川勝次さんと山口大己さんと光野原葉亜人くんです」

「そうだったんですか。すみません、あたしてつきり髪の毛の色が派手な女の人を探してるんだと思ってました」

うわあーっ！ よく考えたら性別すら言っただけだった！

そんなんで見つかる方が奇跡だよな。

はあ……若い女の人の前で緊張してたけど、そういう事はちゃんと伝えなきゃなあ。

「こちらこそ、ちゃんと伝えてなくてすみませんでした」

「あのお、ちょっといいですか？」

しな〜こが申し訳なさそうな顔で口を挟んできた。

「これ以上あなたに迷惑をかける訳にもいきませんし、私、今こいつが探してる奴らを知ってるんです。ですから、私とこいつで探させていただいてもよろしいでしょうか？」

確かにそうだ。

これ以上井ノ内さんについて来てもらう訳にはいかねえ。

「いえ。あたし、大人として一度決めた事は最後までやり通したいんです」

「はあ……そうなんですか」

しな〜こはぽか〜んとした。

「さあ、都留男さん。さつさと探しましょう」

「いや、僕一休みしたくてここに入ったんですけど」

「あつ、都留た〜ん！」

声が聞こえたかと思うと、はあとんが勢い良く飛びついてきた。

「わあ〜ん！ どこ行ってたんだよ〜！ 探したんだよ〜！」

「ごめん、はあとん」

井ノ内さんがつかんでる方の手を振りほどいて、はあとんを優しく抱きしめた。

「つ〜る〜お〜！」

声と共にカンツカンになったかつちゃんが現れた。

「お前つて奴は！ どこほつつき歩いてたんだ?!」

「ごめん。海で浮かんでるうちに流されちゃったんだ」

「見つかつて本当に良かったよ」

かつちゃんの後ろから大ちゃんが来た。

「大ちゃんもごめんな」

「気にする事ないよ。流されたのはしょうがないもん」

「で、あの女の人は誰なんだ？」

「ああつ、かつちゃん達を探してる間に会って、協力してくれた人なんだ」

「そうだったのか。どうも、この馬鹿がご迷惑をおかけしました」

かつちゃんは無理矢理おいらの頭を下げて、自分のも下げた。

「いえいえ。じゃああたしはこれで」

井ノ内さんは海の家から去っていった。

「はあゝっ、疲れたぜ」

なんか、どつと肩の荷が下りたような気がする。

「こつちもすんげえ疲れたぜ」

「ごめんごめん。でも、女の人と話すのって緊張するんだよなあ」

「俺たち小学校から高校までずっと男子校だったからなあ」

「店でも未だに上手く話せないんだよなあ。しなくこみたいなあ男っ

ぽい女の人ならともかく、女らしい女の人ならまるでダメだ」

「誰が男っぽいって?!」

あつ、本人がいるの忘れてた!

顔が引きつって、拳を作ってて、全身がメラメラと燃え上がってる!

「いや、あの、その」

「あたしだって女よ!」

頭の上からすんげえ勢いでげんこつが降ってきた。

「いってえ!」

第12話：夏祭りは夜月町と

うーん、よく晴れてるなあ。

自転車を漕ぎながら、今日も商店街に向かっている所だ。風が気持ちいい。

ん？ いか公園でちようちんが吊るされてるな。

今年も来たかあ。夏祭りの季節が。

毎年この時期はわくわくするんだよなあ。子供の時は遊ぶ側として、今は店をやる側として色々楽しませてもらっている。

たこ焼き、焼きそば、綿菓子、りんご飴、千本引き、金魚すくい……ほんとにいろんな屋台がある。

それに毎年、花火大会も同じ日にやるからすんげえきれいな花火も見れる。

色んな人の笑顔が見れたり、話が弾んだりするし、いいことずくめだぜ。

「あつ、都留た〜ん！」

はあとんが公園から出てきて、こっちにやって来た。

「よう、はあとん。お前も手伝っているのか？」

自転車を止めて、話しかけた。

「うん。今日はお笑いのお仕事無いからこっちを手伝っているんだ〜」

「そうかあ。今年も盛り上がるといいなあ」

「そうだねえ。都留たん、屋台が終わったら花火見たり盆踊り踊ったりしようね」

「おう、しような。じゃあな〜」

また自転車を漕いで商店街へ向かった。

よおっし！ 夏祭りの為に、仕事頑張るぞお！

「お疲れさまでした〜」

閉店した後、皆に向けて元気よくあいさつした。

「お疲れ様です、都留男様」

「お疲れ。相変わらず元気だなあ」

そらたろくさんが奥からニヤニヤしながら出てきた。

「その調子で、夏祭りも盛り上げてくれよ」

「もうすぐですからね。わくわくしちやいます」

「そうか。実は、今日はそれに関する話し合いをしようと思ってな、お客様にも来ていただいているんだ」

「お、お客様……ですか？」

「ああ」

ま、まさか、町内会の会長さん？！

急に緊張してきた。

「おい、入ってきてくれ」

来る！ 来る！ こっちに来る！

「やあ、都留男くん。久しぶりだな」

……ん？

奥から出てきたのは仁之さんと民之亮だった。

「そらたろくさん、お客さまって、まさか」

「まさかも何も、仁之達だぞ」

やっぱり。

でも何で、仁之さん達がここに來てるんだ？

「急に來たから驚いただろう」

「はい、てつきり町内会の会長さんだと思っちゃいました」

「ははは、えらく大それたもんにされたなあ」

「実はな、今年は若星町と夜月町とで合同で盆踊り兼花火大会をする事になってな、それで仁之達に來てもらったんだ」

「なあんだそうだったんですかあ」

「そうなんだ」

「若星町と夜月町で夏祭りをやる為に仁之さん達に……ええーっ？！」

そんな話、今初めて聞いたぞ！

「と、いうわけでこれからISLANDさんも交えて話し合いを行う」

「……はい」

「うちの町内会の会長が「前からやってみたかった」って言って、夜月町の町内会の会長に声をかけてな、「面白そうだ」って事で実現したんだ」

そらたろくさんが台所から人数分の紅茶を運んできた。

店の二階はそらたろくさんの家になってて、おいら達は今リビングにいるのだ。

「よろしくな」

仁之さんは改めておいら達に会釈した。

おいら達も会釈し返した。

「それじゃあ、何の屋台をやるのか決めようか」

「焼きそばは……どうでしょうか？」

かけるが恐る恐る提案した。

そう言えばこいつ、いつもバンダナ付けてるから焼きそばとか向いてそうだな。

「ほう、確かに焼きそばは美味しいな」

「原価も安いしな」

「他にはないか？」

「……チョコバナナ」

今度は乱蔵だ。

おおつ、懐かしいなあ。

いやあ、おいらも小学生の時作ったんだよなあ。

乱蔵も最近作ったのかな？

「おやつ、子供らしい事言うじゃねえか」

「ま、まあな」

「宙太郎、俺はラーメンを作ろうかと思うんだ。昔勤めてた銀行の近くに美味しいラーメン屋があつてな、その味を忠実に再現しよう

と何度も家で奮闘したもんだ」

と、仁之さん……夏にラーメンは暑いつす。

「それもいいな」

そらたろくさん！

「馬鹿言え。このクソ暑い時に客がくると思うか？」

「岳一さん、その通りつす。」

「そういうお前は何がいいんだ？」

「それはもちろん焼き鳥だ。安い原価でぼろ儲け出来る」

た、岳一さん……ぼろ儲けつて。」

「それなら焼きとうもろこしの方が美味いぞ」

「お好み焼きも美味いつすよね」

そう言えば、前に久つちとお好み焼き屋行った時、すんげえ食つてたな。

普段から好きなんだな。

「真奈はどうだ？ 何がいいんだ？」

「な、何でもいいつすよ」

「ははは、お前らしいな」

「店員としてはどうかと思うけどな」

「都留男はどうだ？」

う〜ん？ 何がいいだろう？

何年か前にわたあめ作ったから、また作ってみたいなあ。

「わたあめなんかどうでしょう？」

「おっ、いいな。民之亮はどうだ？」

一瞬、奴がびくつとした。

そう言えば、一言もしゃべってねえな。

「か……かき氷」

「おおっ、涼しくていいねえかき氷」

鳥美人さんが話しかけたけど、奴は何も答えない。

「よしつ、大体出揃った所であみだくじをするか」

あみだくじかよっ！

そらたるゝさんは早速紙と鉛筆を持ってきて、くじを書き始めた。

「さあつて、何が当たるかなあ？」

「どきどきしますね」

「ふふふ、そうだな。では、ただいまよりあみだくじを開始する！」

緊張の一瞬！

鉛筆が上から下へどんどん動いていく

「よしっ、決まったぞ。かき氷だ」

「えっ?!」

一番驚いたのは民之亮だった。

「よかつたじゃねえか民之亮！」

「ま、まあな」

「そうだ、今日うちに来ないか？」

「な、何でお前のうちなんか行かなきゃなんねえんだよ?!」

「せつかくおんなじ屋台をやる事になったんだし、後一週間しかね

えんだから予行練習しようぜ」

「何が予行練習だ！ そんなガキみてえな事出来るか！ とにかく、

俺は帰るからな！」

「行ってみてもいいんじゃないかねえか？ せつかく都留男くんが誘って

くれてるんだし」

「そ、そうっすか？」

「俺の事は心配するな。ゆっくり楽しんで来い」

「ま、まあ、仁之さんがそこまで言うんでしたら……行きますよ」

「よしっじゃあ！ じゃあさっそく行こうぜ！ おいらの恋人も紹介

してやるよ」

「お前も恋人いたのかよ?!」

「いらっしやい」

兵ちゃんは民之亮を笑顔で出迎えてくれた。

リビングで兵ちゃんに民之亮を紹介した所だ。

「おいらの恋人の兵ちゃん。幼稚園の頃から遊んでくれてて、高校

卒業した時から付き合ってるんだ。普段は商店街で本屋さんをやってるんだぜ」

「よろしく」

「酒井民之亮です。よろしく」

「今度の夏祭りでかき氷をやる事になってさ、その予行練習のために来てもらったんだ」

「そうか。俺は露とひえひえパインをやる事になったんだ」

「お互い頑張ろうぜ」

「じゃあさっそく始めるか。まあ家庭用のかき氷機しかないけどな」
「シロップはどうするんだ？」

「いちごと練乳とブルーハワイ、レモンと抹茶とコーラ、キャラメルやパッションミントってのもあるぞ」

「おおーっ！ 色々あるんだな」

「さっそく持つてくるぜ」

兵ちゃんも台所からかき氷機とシロップを持ってきてくれた。

「で、どっちが氷をかいて、どっちがシロップをかけるんだ？」

「あっ、決めてなかった」

「まあ氷をかくって言うっても、実際は電動の奴を借りるんだろっけどな」

「そうだなあ。お前はどっちがやりたい？」

「別に、どっちだっていいよ」

「じゃあおいらがシロップかけるから、民之亮は氷をかいてくれ」

「へいへい」

こうしてかき氷の予行練習が始まった。

民之亮がかいた氷はすんげえきれいで、見てるとほればれしちまう。

> i 1 2 5 0 3 — 1 6 3 7 <

「都留男、早くかけないと溶けちまうぞ」

「おおっ、そうだった」

急いでいちごのシロップをかけた。

「うわっ、一気に出るもんなんだな!」

「そんなにかけると氷がすぐべちゃべちゃになるぞ」

「ミルクミルク!」

慌ててコンデンスミルクをかけた。

かけ終える頃にはもうかき氷じゃなくて、ただのいちごとミルクに水が混じったもんになっちまった。

「ごめん、民之亮」

「気にすんなよ。それよりさっさと次やるぞ」

「おう!」

その後も次々とやっていったけど、どうしてもうまくいかない。何回やってもかけすぎちまう。

そのうち氷が無くなってきた、その日はそれで終わりになった。

「お疲れ様」

兵ちゃんが冷たいグレープフルーツジュースを用意してくれた。

「ありがとう」

「俺はこれ飲んだら帰るからな」

「今日はわざわざありがとうな」

「どうって事ねえよ」

その時、民之亮の携帯が鳴った。

最近のJ・POPっぽい感じの着うただ。

奴は携帯を手に取り、ジュースを飲みながらメールを確認した。

「何だったんだ?」

「何でもねえよ」

「教えてくれたっていいじゃねえかよ」

「お前には関係ねえだろ?」

「隠すようなメールなのか?」

「そ、そんなやましいメールじゃねえよ」

「じゃあ見せるよ」

「やだ」

「やっぱりやましいメールなのか？ 出会い系とかに登録してるのか？」

「ば、バカッ！ んなわけねえだろ?!」

「じゃあ見せてみるよ。でないとお前が出会い系に登録してるって、仁之さんに言っぞ」

「わ、分かったよ」

民之亮は渋々携帯を見せた。

【宙太郎と飲んでたら話が弾んちまって、今夜は泊まる事にしたぜ。家の事はよろしくな〜。】

仁之】

「家の事って、お前仁之さんと住んでるのか?!」

「ま、まあな」

「ISLANDの二階に住んでるのか?!」

「そうだよ」

「ひゅ〜ひゅ〜、アツイね」

「うるせえ！ お前もあのおっさんと暮らしてるじゃねえかよ！」

「なあ、お前も泊まっていかねえか？」

「な、な、何言ってるんだよ?! 何でおっさんがおっさんの家に泊まるんだよ?!」

民之亮の顔が急に真っ赤になった。

「いいじゃねえかよ。それに、本当は泊まりたいって思ってるんだろ?」

「んなわけねえだろ?!」

「じゃあ何で顔が真っ赤なんだ？」

「こ、これは、その……とにかく、泊まんねえからな！」

「なあ兵ちゃん、泊まってもいいだろ？」

「人の話を聞け！」

「ああっ、もちろんだ」

「やったあ！」

「俺はまだひとつことも泊まるなんて言っただけぞ！」

「え〜っ、せつかくだから泊まっていけよ。どうせ帰っても一人なんだから？」

「し、仕方ねえな。泊まってやるよ」

「そうこなくっちゃ！　じゃあ一緒に風呂入ろうぜ」

「何でおっさん同士と一緒に風呂入るんだよ?!」

風呂から上がって、アイス食べたりはあとんやきよっちゃんが出てるTV見てたりしてたらあつという間に十一時頃になった。

「俺はリビングで寝るから、二人で寝室使っただけぞ」

「ありがとう。じゃあおやすみ〜」

「おやすみ」

おいらと民之亮は寝室に行っただけで、二人でベットに寝転んだ。タオルケットを上からかぶる。

「いやあ、お前とこんな風に並んで寝れるとはなあ」

「いつもは兵吉さんと並んで寝てるのか？」

「そっだぞ」

「おやすみ」

「おやすみ〜」

今日はもう遅いし、さっさと寝るか。

「……ごめんな」

「ん？」

「この間、変な事言ったり、商品投げつけたりして、本当に、ごめんな」

「何言っただよ。いいに決まっただろ？　それより明日、ISLAND休みなのか？」

「ああ」

「じゃあ明日も予行練習しようぜ。おいらも休みだし」

「おう」

あの事、やっぱり気にかけてくれてたんだな。
いい奴じゃねえかよ。

兵ちゃんに脅されて渋々ISLANDに行ったけど、民之亮がいじりやすい奴だって分かったし、こうやって謝ってくれたし、行ってよかったぜ。

次の日もその次の日も、おいら達は予行練習を続けた。

シロップをかけるのに時間がかかるけど、失敗もよくするけど、それでも頑張った。

民之亮は何だかんだで毎日うちに来てくれて、毎日泊まっていた。

店では仕事が終わった後に、時間帯ごとの屋台の店番を決めた。おいらと民之亮とかけるは、夏祭りが始まってすぐの当番になった。

そんなこんなであったという間に一週間経って、いよいよ夏祭り当日になった。

「都留た〜ん、いよいよだね」

「いか公園に行くと、はあとんがもう来てた。」

「おうっ、いよいよだね」

「いよいよですね、葉亜人さん」

「ボクはね〜、きよっちゃんとジュースを売るんだよ」

「おいらとかけるは夜月町の民之亮って奴とかき氷をやるんだぜ」

「わ〜っ、後でどんな人なのか紹介してして〜」

「もちろんするぜ」

「盛り上がってるわね」

「しな〜こがこちらにやってきた。」

「よっ、しな〜こ。お前は何やるんだ？」

「ふふふ、うちはズバリ、クレープよ！」

「クレープかあ」

「クレープって、そんなに売れるんですか？」

「売れるわよお。若い女性を中心に大人気なのよ」

「相変わらずがめついなあ」

「去年は焼き鳥が売れるって言ってなかったっけ？」

「その年によつて売れるものは変わってくるのよ。前と同じではなく、常に変えていかなくちやいけないの」

「そ、そうなのか」

「ところで、都留男とかけるは何やるの？」

「夜月町の民之亮って奴とかき氷をやるんだ」

「で、その夜月町の民之亮さんは？」

「まだ来てねえみてえだな。まあそのうち来るだろ」

「そうね」

遅い……。

夏祭りの開始十分前になつたけど、まだ民之亮が来ない。

何やってるんだ？

もうそろそろ準備しねえと間に合わねえぞ。

「都留男くん」

仁之さんが慌てた様子で走ってきた。

「あつ、仁之さん。どうしたんですか？」

「それがな、民之亮が「練習で失敗した分の氷食いすぎて、腹が痛い」って言ってるんだ。もしかしたら今日来れないかもしれない」

「え？」

「そうなんですか？」

「悪いけど、二人でやってくれないか？」

「分かりました」

急いで屋台に行き、準備に取り掛かった。

今日の為にいっぱい練習したのに、おいらが失敗ばかりしたか

ら

民之亮、ごめん。

夏祭りが始まると、さつそくたくさんのお客さんがやってきた。

作っても作ってもどんどん人が来て、とても二人じゃ追いつかない。

「はあ、こんな時民之亮がいてくれたらなあ。

「いやいや、あいつに頼ってばかりじゃダメだ。大人なんだし、かけるもいるんだから、二人でなんとかしなきゃ！」

「その後も、かき氷を作ってはどんどんシロップをかけて行って、売っていった。

「でもやっぱりシロップかけるのに時間がかかるし、その間に列もどんどん伸びて行って、長く待ってる子供が泣き出したりもした。

「やっぱりおいら達だけじゃ無理なのかな？」

「そんな事ない！ 民之亮の分まで頑張らなくちゃ！」

「あの〜っ、まだですか〜？」

「すみません。もう少々お待ち下さい」

「氷が出来たし、急いでシロップをかけなきゃ！」

「あっ！」

「うっかり手が滑って、シロップのボトルが地面に転がっちゃった。

「何やってんだよ」

「声が聞こえて、誰かがボトルを拾ってくれた。

「それは紛れもなく民之亮だった。

「民之亮！」

「民之亮さん！」

「慌てちゃダメだって、練習でも言われてただろ？」

「ごめん。それよりも、大丈夫なのか？ お腹は」

「朝にちよつと痛くなっただけだよ。んな事言っただけで、さっさとやるぞ」

「おう！」

「民之亮が来てくれたおかげで、さっきよりも数倍早く数をさばけた。

「相変わらずシロップに時間はかかるけど、それでも二人で氷かきからシロップからお会計までやってた時よりもマシだ。」

その後もかき氷は着々と売れていって、やがて完売した。

「終わったなあ」

「そうだな」

「この一週間色々あったなあ」

「……初めてだったぜ」

「え？」

「人ん家に泊まるなんて」

「子供の時とか、友達の家泊まった事ねえのか？」

「ねえよ。んな勇氣あつたら苦労しねえし」

「そうか。おいら、楽しかったぜ。お前とかき氷の予行練習したり、一緒に風呂入ったり寝たり」

「平和な奴だな。んな事で喜べるなんて」

「小さな事でも、楽しめた方がいいじゃねえか」

「……そうもしれねえな」

花火が上がった。

色んな色が散らばってすんげえきれいだ。

「民之亮、踊らねえか？」

「え？」

「盆踊り。踊ると気持ちいいぞお」

「いやっ、俺はそんなもんやらねえよ。お前だけで行けよ」

「いいからいいから。一緒に踊ろうぜ」

民之亮の手を引いて、盆踊りの会場まで走ってった。

第13話：大ちゃんの服屋さん

「すっげえ〜！」

「かつじんかつこいい〜！」

「やっぱかつちゃんかつけえなあ。」

「おいらも痩せてて背が高かったらかつこよくなるかな？」

「でも実際はチビデブだからなあ。」

「ボクも雑誌のモデルのお仕事した〜い！」

「そのうち来るんじゃないの？」

「楽しそうだな」

兵ちゃんが紅茶とクッキーが乗ったお盆を持ってこっちに来た。

「兵ちゃん、雑誌くれてありがとう」

「どういたしまして」

「でもよかつたんですか？売りもんなのに」

「いいんだよ。かわいい都留男のお願いなら何でも聞くよ」

「それでこそ兵ちゃんだよ」

「そうっすか」

かつちゃんが呆れた顔で見してきた。

「あつ、そういえば大ちゃんって服屋さんに勤めてるんだよね？」

「はあとんがクッキーをかじりながら聞いてきた。」

「商店街から少し歩いた所にあるんだっただな」

「去年の秋ぐらいに「行く」って言うってから一回も行ってないよ〜」

「まあ、忙しかったしなあ。はあとんは正月番組の収録で忙しかつ

たし、毎年クリスマス前はうちの店も書き入れ時だし」

「今年に入ってからもあるという間に秋になったな。正月があつて、

バレンタインに都留男と喧嘩して、葉亜人くんと清雄くんのお花見

ライブがあつて、梅雨に都留男と二人で紫陽花あじさいを見に行ったな」

「海に行ったり、夏祭りで盛り上がったたりもしたよな。小学校のプ

ールの監視員も頼まれたし、超自から宿題教えてって言われたし、

久つちの柔道の練習試合見に行ったりもしたなあ」

「ねえねえ今から行こうよ」

「行きたいけど、店の名前聞いてないんだよな」

「かつじん知らない？」

「知るわけねえだろ」

「この雑誌の写真撮った時に大ちゃんのお店のお洋服着てないの？」

「んなもん分かんねえよ」

「こうなったら、大ちゃんに直接聞くしかねえな！早速家に行くぞ」

と、いうわけで大ちゃんの家の前まで来た。

呼び鈴を押すとドアが開いて大ちゃんが出てきた。

でも何だか元気なさそうだ。

「あつ、大ちゃん」

「よう」

「大ちゃんあのね、今度大ちゃんがお仕事してる服屋さんに行こうと思うんだ。でも、店の名前分かんないから教えて」

「潰れたんだよ」

え？潰れた？！

それって、どういう事だ？！

> i 1 2 8 0 2 — 1 6 3 7 <

「大ちゃん！ 店が潰れたってどういう事なんだ？！」

「何で？ どうして潰れちゃったの？ お店潰れちゃったら大ちゃんこれからどうするの？」

はあとんはもう涙目だ。

「どうするかは何も考えてねえ」

「でもお店潰れちゃったら、大ちゃん生活出来なくなっちゃおうよ？」

「知らねえよ」

「何で〜?! 大ちゃん的生活でしょ〜?!」

「はあとん、落ち着けよ。大ちゃん、今日はもう失礼させてもらおうよ。じゃあな」

泣きわめくはあとんを連れて、仕方なくその場を後にした。

「そつだったのか」

話を聞いた兵ちゃんは悲しそうな表情をした。

おいら達が出かけてる間に、露さんと仁之さんも来たみたいだ。

今は5人でテーブルでコーヒーを飲んでる。

「どこも経営は大変なんだな」

「自営業が大変なのは、俺達もよく分かってるしなあ」

はあ、大ちゃんの服屋、行きたかったなあ。

でもはあとんの言うとおり、大ちゃんこれからどうするんだろう?

店潰れたんだつたら退職金出る訳ないし、貯金してるかどうか分かんねえし。

してたととしても、それだけで生活していける訳ねえしなあ。

第一、あのマンションのローンとかどうなってるんだ?

そのうち追い出されて、ホームレスとかになっちまうかもしれねえ。

やっぱり大ちゃん、困ってるだろうなあ。

おいらが何かしてあげられる事はないかな?

……よしっ! 一か八かで聞いてみよう!

「仁之さん、ISLANDで大己くんを雇ってくださいませんか?」

「いや、気持ちは分かるんだけどな、うちも大変なんだよ。都留男くんも見たとおりオープニングセールやった時は大盛況だったんだけど、すぐ人が来なくなっただ。派手な電飾や照明やめてもつとすつきりした、清潔感ある感じにしたんだけど、それでもダメなんだ」

「最初はそういうものだろう? うちの本屋もお客さん集めるのに苦

「労したよお」

「さすがに露がゲイの工口本置こうって言いだした時は止めたけどな」

「あれは悪かった」
「やっぱり。」

「そんなにすぐ人雇えるほど世の中甘くねえよなあ。」

「兵ちゃんと露さんの所もダメ……だよな？」

「ごめんよ都留男。こればかりは無理なんだ」

「今は今で別の問題があるんだ。出版不況で本が売れないし、店もだいぶ古くなってきたし」

「やっぱりそうですか」

「どうしたんっすか？顔暗いっすけど」

「かつちゃんが廊下の方から来た。」

「あつ、かつちゃん！実はな、大ちゃんの服屋が潰れちゃってたんだよ」

「マジかよ」

「大マジだ」

「無理だろうとは思っけど」

「無理だ」

「何で分かるんだ？」

「どうせ「大ちゃんを楽器屋さんで働かせて」とか言い出すんだろ？んなもん無理に決まってるじゃねえか」

「さっきまでの話、聞いてたのか？」

「聞かなくても分かるぜ。何十年付き合ってると思っただよ？」

「よおっし！」

「急にはあとんが立ち上がった。」

「ボク、バイト先の店長さんに雇ってもらえないかどうか聞いてみる！」

「聞かなくても分かるだろ？」

「何でやる前からそんな事言っのおおおおおおお？！」

「お前も大人なんだから、考えたら分かるだろうが！」
大ちゃん、どうするんだろう？
しばらくはそつとしておいた方がいいのかな？
でも、やっぱり気になる！
明日仕事終わったら、また行ってみよう。

翌日

「何の用だよ？」

大ちゃんがかったるそうな顔でこつちを見てきた。

「ちよつと、様子見にこようかと思って」

「あのなあ。ガキじゃねえんだから、たかが店潰れたぐらいでいちいち来なくていいんだぜ」

「それでも気になるんだ」

「はあ？」

大ちゃんの手を取って、ぎゅつと握りしめた。

「今はすんげえ辛くて、すんげえ苦しいと思う。でも、そういう事も含めて、何でも話して欲しいんだ。だっておいら達、友達だろ？」「何馬鹿みてえな事ぬかしてんだ？お前に俺の何が分かるんだよ？」「確かに今は分かんねえかもしれないけど、分かっただけでいいんだよ。大ちゃんの事、もつと知りたいんだ」

「ふざけんよ！もう帰れよ！」

「ふざけてなんかねえよ。友達だったら、心配になるの当たり前だろ？」

「ぬあにが友達だ。都合のいい事ばかりぬかしやがって」

「声かけてくれたのは、大ちゃんの方だろ？」

「それがどうかしたのかよ？」

「おいらと仲良くなりたくて、あの日声かけてくれたんだろ？」
それまでこつちを睨みつけるみたいで恐かった大ちゃんの目が、急に優しくなった。

「……うん」

「おいらもあの時楽しかったなあ。最初は「一緒に砂山作ろうだなんで珍しい人だな」って思ったけど、作ってるうちにすんげえ楽しくなってきたんだよなあ」

「俺も、そうなんだ」

「おつ、やっぱりそうかあ。その1ヶ月後ぐらいにスライムの作り方教えてくれた時も楽しかったなあ」

「あの時お前がお腹ではませようとか言い出して、いつの間にか裸になって、後で風邪ひいたんだったよな」

「そうだったなあ。じゃあ、おいら帰るよ。また話したくなかった時に話してくれ」

大ちゃんの手を放して、エレベーターホールの方に歩きだそうとした。

「待てよ」

「何だ？」

「入っていけよ」

「俺大学まで行ったくせに、何もやりたい事なくってさあ。仕方なく普通のIT企業に就職したんだよ」

お茶とお菓子を運びながら、大ちゃんは話してくれた。

「そこで7年間頑張ったんだけど、30の時に急に「経営状態が悪化したので、人員整理を行う」とか言い出して、定年前の奴らとかがクビにされるのかと思ったら、なぜか俺がクビになったんだ」

「それは大変だったな」

「上司に抗議しても「会社が決めた事だから」の一点張り。やけになつて居酒屋で飲んでたら、同僚のひかけしゅんいち日蔭俊一ひかげしゅんいちって奴に「知り合いが服屋やるそうだから一緒に手伝わないか」って言われたんだ。それでこの町に引っ越してきたってわけ」

「いい同僚がいて良かったな」

「ああ。最初の2年ぐらいは楽しかったんだよ。商品の入出荷やハンガー掛け、掃除、接客。会社員じゃ出来ねえ事が色々できたし、

オープンしたてで珍しかったから客もどんどん来たんだよ。でもそれもだんだん減ってきて、新人が入ってきたりもしたんだけど、変に威張って次々といらねえ提案し出したんだよ」

「そうか」

「出来てから3年経った時に店長が「親が急に倒れて自分が実家を継ぐ事になったから、この店は友人に任せる」とか言い出して、経営者変わったんだよ。その新しい店長つてのがとにかくクソで、売れないって分かっただらすぐに路線変えるんだよ。和風になったり、ロック調になったり、欧米っぽくなったり、妙にフォーマルになったり、東南アジアっぽくなったり、TVの影響受けて人気俳優やアイドルが着てるのとおんなじようなもん置いてみたり。どう考えてもそんなにコロコロ変わったら潰れるに決まってるだろ？」

「確かにそうだな」

「案の定、おとつい行ってみたら「すまん。この店は今日で閉店する事になった」とか言いやがる。逆に奴が来てから2年もった方が不思議だ」

「色々あったんだな」

「色々ありまくりだ」

「これからどうするんだ？」

「さあ。就活めんどくせえし、親に金送ってもらって夢だけ見て生きていこうかなあ？」

「今はそれでよくても、歳いってから苦労するぞ」

「もう歳いつてるじゃねえかよ。俺達35だぞ」

「もっとだよ。50や60になってもそんな事言っつもりか？」

「言うね。俺は50や60になっても言うぜ」

「そうかあ。就職した方がいいと思うんだけどなあ」

「俺は就職なんかしねえぜ。ずっとニートで行くんだ」

「おっ、かつこいいな！じゃあ、さっそく公園にでも行こうぜ！」

「そうだな」

突然顔を真っ赤にして怒鳴り出す乱蔵。

トクベツなカンケイって、なんだ？

しかもそんな言葉どこで知ったんだ？

まさか、そらたるくさんが変な事吹き込んだとか？！

「な、何ですか？ 今すごい声がしましたけど」

かけるが奥から恐る恐る出てきた。

「乱蔵、あんまり大きな声出しちゃダメだろ？」

「……悪かったな」

「珍しいね。乱蔵くんが大声出すなんて」

「こいつが変な事言うからだよ」

「変な事じゃないも〜ん。ねえ〜、それより一緒に行こうよツタ屋敷」

「行かねえって言ってるだろ?!」

ツタ屋敷？ また変な単語が出てきたな。

「そのツタ屋敷って何なんだ？」

「夜月町にあるツタが絡まってるすごい不思議なお屋敷でね、健吾くんがこの間見つけたんだ」

「健吾くんって？」

「男一匹学園おとこいっぴきがくえんの奴で、何でか知らねえけどよくうちの寮に来るんだよ」

「男一匹学園って確か、夜月町にある全寮制の男子校で、兵吉さん達が出られたんですよ？」

「そうだぞ。まあ、色好学園の隣町版って事だ」

「健吾くんが自転車で走ってたら、ツタがいくつぱい絡んでるすごいお屋敷が見えて、じ〜っと見てたら中からブスツとしたおっちゃんが出てきて、追い返されちゃったんだって」

「その人の家じゃねえのか？」

「それがね、変なんだよ。その後健吾くん毎日見張ってたらしいんだけど、朝お仕事に行ってる事もないし、何か変な人がたま〜に来るんだって」

「変な人ってどんな人なんだ？」
「うーん、忘れちゃった。ねえねえ乱蔵、行こうよ」
「そのブスツとしたおっさんに失礼だって何回も言ってるだろが！」
「その人とお友達になれるかもしれないよ」
「なってどうするんだよ?!」
「乱蔵の言うとおりだぞ。超自、あんまり変な事に首突っ込んでんじゃダメだぞ」
「はーい」

「っていう事があったんだ」
晩御飯のグラタンを食べながら、今日あった事を兵ちゃんに話した。

「ツタ屋敷かあ」
「さすがに人ん家に勝手に行こうってのはまずいだろ？」
「俺がガキの頃からあるぞ」
「ええっ?!」
「そうだったのか！」

「夜月町の七不思議の一つで、昔から変な一家が住んでるって噂だったなあ。あいさつしても素っ気ない返事しか返ってこなかったり、ほとんど家から出なかつたり。家から奇声が聞こえてきたり、変な鳥が飛んでたりってのも聞いたことあるな」

ど、どんな家なんだ……。
「まあ、しばらくすれば超自くんもその健吾くんって子も忘れるだろうから、そんなに気にしなくてもいいんじゃないかねえか？」
「そうだな」

数日後

「都留男、ちょっと来てくれないか」
いつものように掃除していると、奥からそらたろーさんの声が聞こえた。

「何でしょうか？」

掃除をかけるにまかせて事務室に行くと、机に中ぐらいのダンボール箱が置かれてるのが見えた。

「これを夜月町の日和さんひわのお宅に届けてくれないか？ 俺はこれから町内会の会議に出なくちゃいけないんだ」

「分かりました」

配達なんて久しぶりだなあ。

いつもは久つちが自転車で回ってるからなあ。

ダンボールを自転車に乗せて、早速自転車を走らせた。

若星町と夜月町は電車で一駅だけど、自転車で行くと結構距離がある。

なんだか急に町が広くなったように感じる。

出発前にもらった地図を確認しながら着々と進んでいく。

数十分かかってようやく夜月町に着いた。

「え〜っと、日和さんのお宅は」

「何してるの？」

声ができる方を見ると、ツインテールの若い女の子が立っていた。

ペロペロキャンディーを舂めながら、興味深そうにこつちを見る。

な、何か見覚えがあるような無いような……。

「日和さんのお宅を探してるんです」

「ああっ、あのおっさんね。そこにこの荷物を届けようって訳ね」

「そうです」

「良かったら案内しようか？」

「すみません。お願いします」

自転車から降りて、手で押しながら女の子についていった。

「それがあんたんとこの制服なのね」

「あっ、はい」

「雑貨店の制服ってどこも派手なの？」

「いえ、そんな事は無いと思います」

「ふうん」

や、やっぱり女の人と話すの緊張するなあ。

「若星町に住んでるの？」

「はい、子供の頃からずっと」

「ワタシはここに住んでたけど、最近若星町商店街のお菓子屋さんでバイトするようになったから引越したの」

「そ、そうなんですか」

「顔赤いけど、大丈夫？」

それを聞いて余計ドキドキした。

「だ、大丈夫です」

「そう。あんた歳いくつ？」

「さ、三十五です」

「じゃあもういいおっさんねえ。結婚とかは？」

「し、してません」

「彼女は？」

「い、いません」

「じゃあ一人身なんだ」

「いや、あの、こ、恋人は……います」

「えっ？ 二次元の？」「ナントカは俺の嫁」とかいうアレ？」

「ち、違います」

「あんたまさかゲイ？」

「そ、それは、その、ですな」

「そうなんでしょ？ ワタシの前のバイト先も、まあ前のバイト先って言ってもオープニングスタッフで二週間だけなんだけど、ゲイがやってる店で、店員と付き合ってたらしいのよ。まあ、別にいいんだけど」

「は、はあ」

何だか、よく喋る子だなあ。

この間海で会った人と言い、この子と言い、どんどん女の人が苦手になっていってるような気がする。

しなぐことなら気兼ねなく話せるんだけどなあ。

「あつ、着いたわよ。おっさんの家」

「わ、わざわざありが……えっ?!」

目の前にある家を見て、ただただ驚いた。

> i 1 3 8 1 4 — 1 6 3 7 <

がっしりした門と塀が広々とした敷地を囲んで、その奥には古い映画に出てきそうな迫力のある大きな建物がずっしりと構えてる。その周りにはこれでもかと言うほど、見事なまでにツタが至る所に絡んでる。

間違いない! こないだ超自達が言ってたツタ屋敷だ!

「すごいでしょ」

「す、すごいです」

「じゃあ、ワタシはこれで。あつ、そつだ。あんた名前何て言うの?」

「で、出淵都留男です」

「ふくん、変わった名前ね。ワタシは岡光はるか。じゃあ」

女の子はペロペロキャンディーを舐めながら去っていった。

岡光……はるか?

あつ、そつか! ISLANDでバニーガールやってた子か!

それで見覚えあつたんだ!

まあ、今はあの子の事よりも、このツタ屋敷だな。

とりあえず、呼び鈴押さなきゃな。

恐る恐る呼び鈴を押すと、おっさんのダミ声が聞こえた。

「び、BIG BANGです。お買い上げの商品の配達に参りました」

その途端、門が音を立てて開き、玄関へ続く道が現れた。

わ、渡っていいって事なのか?

自転車を止め、ダンボールを持って恐る恐る歩いていった。

落ち葉でも落ちてるのか、歩く度にミシミシいう。
ゆっくり進みながら館まで行き、扉の前の階段を上がる。

扉がギイツと音を立てながら開き、おっさんのぶつとい足が、ぶよぶよの体が出てくる。

顔が見えた途端、おっさんのたるんでる目が急に見開かれた！

「つ、都留男！」

へ？

「お、お前！ どうしてここに?!」

「お買い上げの商品をお届けに……来たんです」

「あゝつ、そうか！ お前中学の時からバイトしてるからなあ」

「あ、あのお、すみません」

「何だ？」

「失礼ですけど、お知り合いでしたっけ？」

「えっ?!」

おっさんの顔が見る見るうちに青ざめた。

「お、お前、覚えてないのか?!」

「す、すみません」

「小学校から高校まで、ずっと一緒だったのに。「恒ちゃん」って呼んでくれたのに」

「あつ、恒ちゃんか！ ごめんごめん、気が付かなかったよ」

「おおつ、やつと思いついてくれたか！ 「消しゴムと黒板消しの達人、恒ちゃん」だ！」

「お、お前の消しゴムと黒板消し、すごかったよなあ」

だ、誰だっけ？

消しゴムと黒板消しって何なんだ？

「そういえば、まだ金払ってなかったな。待ってるよ。すぐ持つてくるぜ」

恒ちゃんさんは足早に館の中に引っ込んで行った。

ど、どうしよう。

全然思い出せないのに、向こうは思い出してもらったつもりにな

ってる。

う、うん。何とかして思い出せねえかな？

……ダメだ！ 全然思い出せねえ！

そもそもどういう名前から「恒ちゃん」になったんだ？

恒夫？ 恒記？ 政恒？

「お待たせ」

そここうしてるうちに、恒ちゃんさんが出てきた。

「三千円だな」

「はい、確かに頂戴いたしました。あのお」

「何だ？」

「つ、恒ちゃんの、下の名前って、何だっけ？」

「ああつ、恒也だ」

恒也かあ。

……誰だっけ？

「またいつでも来てくれ」

「お、おう。今度は仕事以外で来るぜ」

「楽しみに待ってるからな」

と、とりあえず、ツタ屋敷の正体があったただけでもいっか。

第15話：父ちゃんがやってきた

さみいなあ。

暖房つけても、コーヒー飲んでも寒い。

一体どうなってるんだよ。

ソファの上で毛布にくるまりながら、そんな事を考えてた。

ホットミルクでも飲むか。

あゝ、でもここから動くのめんどっちいなあ。

「ただいま。いやあ、回覧板回しに行っただけなのに、向かいの超

自くんのお父さんと話が長引いちやっさあ」

兵ちゃんがここにこしながら廊下の方からやってきた。

「ちようどいい所に来たぜ。ホットミルク作ってくれねえか？」

「さつきもコーヒー飲んでただろ？」

「そんな事言わねえでさあ、一杯ぐらい作ってくれよお」

「ダメだ。そもそもそれくらいソファから立って行けよ」

「ここで気持ち良く寝転がっているとさあ、そういうのさえ面倒にな

るんだよなあ」

「へいへい」

その時、呼び鈴が鳴った。

「はゝい」

兵ちゃんは玄関の方へ行った。

仕方ねえ。ホットミルクぐらい自分で作るか。

立ち上がって台所の冷蔵庫まで行って、扉を開けた。

あつ、ホットミルクじゃなくてココアでもいいなあ。

はちみつレモンも捨てがたいぜ。

「都留男、留津文るつぶんさんが来たぞ」

え？

とっさに冷蔵庫の扉を閉めた。

父ちゃんが……来たのか？

リビングに戻ると、そこには紛れもなく父ちゃんがいた！

白髪がまじった髪、顔にくつきり入ったシワ、おつきな目、ちょっと太った体型。

「父ちゃん！」

思わず声が出ちまった。

「元気にしてたか？」

にんまりした顔が返ってきた。

「今お茶淹れますね」

兵ちゃんは台所の方へ行った。

「店の方はいいのか？」

「大丈夫だ。今日は定休日だからな」

そんな話を話しながらソファーに座った。

おいらの実家は、おでんがおいしい事で有名な居酒屋なのだ。

隣の夜月町よりさらに向こうの理亜流町りありゅうって所にあつて、結構にぎわってるらしい。

父ちゃんは昔から、店の切り盛りをしながら時々こっちに顔を見せに来てくれるんだ。

色好学園小学校に入学して寮に入っただから、子供の頃はほとんど会わなかった。

だから休みの日に会いに来てくれたり、夏休みや冬休みや春休みに実家に帰れるのがすごく嬉しかった。

自分で決めた事だけど、やっぱりまだ子供だったから一緒に遊んだり、しゃべったり、甘えたりしたかったんだ。

でも、会ったんびにいつも後ろめたい気持ちになつてた。

父ちゃんはおいらが家を出て、私立で全寮制で男子校でおまけに遠くにある色好学園小学校に入学するのを猛反対してたから。

それでもせっかく幼稚園で知り合ったかつちゃんと別れるのがどうしても嫌で、どうしてもおんなじ学校に行きたくて、いっぱい勉強するって言ったけど、それでも「ダメだ！」としか言われなかった。

母ちゃんがフォローしても全然聞いてくれなくて、結局勉強する為の塾の手配や入学の手続きは全部母ちゃんがやってくれた。

入学してからもよく会いに来てくれたけど、毎回「寂しくないか？」とか「帰りたいと思わないか？」とかきかれた。

父ちゃんは学校を辞めさせて、おいらを実家に帰すつもりだって言うのを小耳にはさんで、夜にベットで一人で泣いた。

同じ部屋のかっちゃんが「大丈夫か？」ってよく言ってくれたのを覚えてる。

中学生になつて、BIG BANGでバイトしてるって言ったらしかめつ面をされた。

最初は校則違反のバイトについて怒られてるのかと思ったけど、後でそらたるくさんがセクハラする事について怒ってるって事が分かった。

父ちゃんはおいらに何回も「辞める！」って言ったけど、おいらはおもちやも、あのお店の雰囲気も、そらたるくさんのおもちやや人を楽しませることへのひたむきさや一生懸命さも大好きだったから、何回言われても辞めなかった。

今でもBIG BANGの事は、あんまりよく思っていないと思う。そんな訳で父ちゃんが来ると、嬉しいけどなんか後ろめたくて申し訳ない、複雑な気分になるんだ。

「仕事はどうだ？ 順調か？」

「うーん、最近夜月町にISLANDつてのが出来て、ちょっとお客さんとられぎみなんだ」

「そうか。なかなか厳しいもんだな」

「お茶、入りましたよ」

振り向くと、兵ちゃんがお茶とお菓子を用意してくれてた。

いつの間にか来客用のイスも出てる。

「いつもいつもすまん」

「いえいえ」

ダイニングテーブルの方に行つて、席に着いた。

兵ちゃんと父ちゃんは、昔おいらがゲイだつて事とか一緒に暮らす事とかでかなりもめてたけど、今じゃすつかり打ち解けてる。恋人になるずっとずっと前から付き合いがあるから、もしかしたら話しやすかったのかも。

全然知らねえ赤の他人紹介されたら、こつはいかなかっただろうなあ。

「大変だつたでしょう。理亜流町からわざわざここまで来られるのは」

「いやいや、電車ですぐだよ。理亜流町も若星町も小さな町だからな」

「そうですねえ」

「兵吉くんはどうなんだい？ 商売繁盛してるのか？」

「おかげさまで、何とかやっていけてます」

「そうか。それは良かった」

「なあ父ちゃん。今日は泊まつていくのか？」

「つい気になって、きいてみた。」

これまで何回かこのうちに来た時は、大抵泊まつていったのだ。

父ちゃんと一緒に風呂入ったり、あがつた後に髪の毛乾かしてくれたり、兵ちゃんが選んでくれたパジャマを自慢したり、同じベツトで寝ながらしゃべったり、子供の頃出来なかった事が出来てすごく嬉しかった。

今日も泊まつていってくれたらいいなあ。

風呂上がりに一緒にホットミルクでも飲んでえなあ。

「いや、すまんが今日は知り合いの家に泊まる事にしてるんだ」

「じゃあ仕方ねえな」

「それより都留男、今日は話があつてきたんだ」

「何だ？」

「ほらっ、俺ももう若くないだろ？ 母さんだつて心配してるし。

だから、その……お前に、店を継いでくれないか？」

え？

一瞬目の前が真っ白になった。

何で、そんな事今さら言うんだ？

父ちゃんは、おいらがこの町で暮らす事を認めてくれてると思っ
てたのに。

「もちろん、すぐに答えを出せとは言わない。ただ今のお前の気持ち
を」

「父ちゃん、忘れたのかよ」

「何をだ」

「高校卒業する前、言ってくれたじゃねえかよ。「この町が大好き
だったら、二度と戻ってくるんじゃないぞ」って」

父ちゃんは目を丸くして驚いた。

「まだ、覚えててくれたのか」

「あたりめえだよ！ おいら、あれ聞いてすんげえ嬉しかったんだ
ぞ。やっと父ちゃんに認めてもらえたって思えたんだぞ。卒業して、
この家で暮らし始めてからも来てくれるたんびに「いい家だなあ」
とか「兵吉くんと出会ってよかったな」とか言ってもらえて、分か
りあえたと思えたんだぞ。それなのに、何で今さらそんな事言うん
だよ！」

気が付くと、自然と涙が流れてた。

「都留男がこの町が大好きなのはよおっく、分かってる。でもな、
父ちゃんも不安になるんだよ。もう若くないから、いつまで続けら
れるかも分かんねえし、いくら兵吉くんがいい人でも、結婚はでき
ないし」

「継がせるなら夢彦ゆめひこにすればいいじゃねえか」

「もちろんあいつの所にも行ったさ。でもな「継がせるならクソ都
留にしるよ」の一点張りだったぞ」

なるほどな。

あいつらしいっちゃらしいな。

「これまでも何回も言おうかと思ったんだが、お前の楽しそうな笑
顔を見てるととても言う気になれなくてな。そうこうしてるうちに

どんどん歳とつてきて、ふと、俺がいなくなった後の事や後継ぎの事ばかり考えるようになって、やっぱり都留男と夢彦の気持ちを確認した方がいいかと思っただんだ」

「そうか」

「明日のお昼頃にまた、ここに来させてもらおう。その時に答えを聞かせてくれ」

「分かった」

父ちゃんが帰った後、ずくとソファでぼくとしてた。

高三の時、担任の先生と面談があつて進路についてきかれたけど、おいら何にも考えてなかつたから「何も考えてないっす」って、軽い気持ちで言った。

そしたら先生が「湯川はロックバンド、光野原はお笑いコンビ、あの遊大ですらちゃんと就職活動してるっていうのにお前は何だ！」ってものすごくキレて、机を拳で思いっきり叩いた。

みんながちゃんと将来の事を考えてるのに、おいらは何も考えてないって事が初めて分かつて、すごく落ち込んだ。

そんな時、父ちゃんが来てくれて「理亜流町に帰って、一緒に店を継がないか」って言うってくれた。

「帰ったら、ずっと父ちゃんと暮らせるぞ」って言われて嬉しくなつて、すぐにOKしちゃった。

でもその後そらたるくさんから「行くあてがないなら、ずっとここで働いてもいいぞ」って言われたり、兵ちゃんから「ずっと好きだったんだ。卒業したら一緒に暮らそう」って言われたりして、どうしようかと悩んだ。

そんな時、かっちゃんに「俺は実家に戻る気なんかさらさらねえし、この町が好きだから楽器屋やりながらロックバンド組むことにした。お前はどうなんだ？ この町が好きなのか？」って言われて目が覚めた。

小学校から高校までの事が一気によみがえつてきて、涙が出てき

た。

おいら、この町も、みんなの事も大好きだ！

この町を離れるのなんてやだ！

そう思っつて、次の日に父ちゃんに店を継がない事と兵ちゃんと二人で暮らす事を伝えた。

父ちゃんはおいらも兵ちゃんもゲイだつて事と、二人が愛し合つてる事に尋常じゃないほど驚いた。

「しばらく考えさせてくれ」つて言っつて、その日は帰つた。

さらに次の日になつて、おいらが寮の部屋のドアを開けると、いきなり父ちゃんに「今すぐ荷物をまとめる！」つて言われた。

「こんなとこにいても、お前は幸せになれない！ 兵吉くんは駆け出しの本屋だから生活力が無いし、あんなセクハラ店長の店で働いても何もいい事が無い！ お前は俺と一緒に理亜流町に帰つて、店を継いで、地元の女の人と結婚するべきなんだ！」つてすんごい怒鳴られた。

もうショックなのと何も分かつてないつていう怒りと何で分かつてくれないんだろつていう悲しいのとで訳分かんなくなつて、「何も分かつてなくせに！ 兵ちゃんが本屋さん開くまでにどれくらい努力したかとか、そらたるゝさんがどんだけおもちゃに愛情を持つてて、どんだけ優しい人なのか知らないくせに！ 父ちゃんのバカッ！」つて思いつきり叫んだ覚えがある。

その時ちようど兵ちゃんが来てくれて、「俺、確かに駆け出しの本屋で生活力が無いですけど、それでも都留男を幸せにします！」つて土下座までしてくれた。

気がつくとかつちゃんもいて、「おやっさん、都留男が心配なのはよおつく分かります。こいつすんげえ馬鹿で、人の手助けがねえと生きていけねえんです。でも、おやっさんの生き方を押しつけるのはどうかと思いますぜ」つて言っつてくれた。

父ちゃんは少し黙つた後、「都留男、本当にこの町が大好きなんだな？」つてきいてきた。

おいらは力強く「うん！」って答えた。

「だったら、二度と戻ってくるんじゃないぞ」って言って、強く抱きしめてくれた。

父ちゃんの体はおつきくて、すんごい温かった。

それから高校を卒業して、兵ちゃんとこの家での生活が始まった。父ちゃんもおいらの顔を見に、良く来てくれた。

「兵吉くんの作る飯はうまいなあ」とか「都留男がいい人と出会えて、父ちゃん幸せだ」とか言ってたけど、ちよつと寂しげな感じがするの薄々気づいてた。

「まだ考えてるのか？」

兵ちゃんが声をかけてくれた。

横に座って、優しくおいらの方を見た。

「うん」

「ゆつくり答えを出してもいいと思うぞ。明日のお昼まで時間はあるわけだし」

「おいら、親不孝者だよな」

「え？」

「幼稚園の時に、「かつちゃんとおんなじ学校に行きたい！」って言って父ちゃんの反対押し切ってこの町に来たし、高校卒業する時も、今みたいに後継ぎの話してくれたのに、結局断っちゃったし。全然親孝行してねえよ」

言いながら、自分で自分が情けなくなった。

おいら、何て息子なんだろう。

息子失格だ。

「やっぱり、継ごうかな」

「都留男がそう決めるんだったら俺はどこへでも行くぜ。でも、本当にそれでいいのか？ この町を離れたら、みんなと会えなくなるぜ」

確かにそうだ。

引越す事知ったら、みんな悲しむだろうなあ。

はあとんなんか、悲しすぎて泣き叫びながら抱きついてくるかもしれねえ。

かと言って店を継がなかったら、親孝行も出来ないし、父ちゃんだけでなく母ちゃんも寂しいだろうし。

うーん、どうすればいいんだろう？

この町やみんなの事が大好きだ。

でも、ふと自分が働けなくなった時の事を考えたり、ずっと寂しい思いをしてきたりした父ちゃんに何かしてあげたい。

やっぱり両方は無理なのかなあ？

「いい案があるぞ」

兵ちゃんがおいらの顔を覗き込んできた。

「お店を継ぐ事は出来ないけど、年一回手伝いに行ったらどうだ？
そうか！

実家ですつと働けないけど、電車で何駅かだから年一回ぐらいなら行ける！

「ありがとう！ 兵ちゃん」

「どういたしまして」

翌日

「答え、出してくれたか？」

ダイニングテーブルの向かいの席に座って、父ちゃんがきいてきた。
た。

「ごめん。やっぱりおいら、店を継ぐ事は出来ないよ」

「そうか。それじゃあ仕方ないな」

「でも、年に一回は手伝いに行くよ。今まで迷惑ばかりかけた分、いっぱい親孝行したいし」

「嬉しい事、言ってくれるじゃねえか」

父ちゃんの目に涙が浮かんでる。

「そんな事言ってくれるなんて、もう立派な大人だな」

「あつたりまえじゃねえか。もう三十五だぞ」

「そうだったな」

「父ちゃん、これから帰るんだろ？」

「ああ」

「だったらさっそく手伝わせてもらっつぜ。昨日そらたろくさんに電話して、休みにしてもらったんだ」

「おっ、そうか。じゃあみっちり働いてもらっつからな」

「おっ！」

第16話：恒ちゃんと大ちゃんと探偵

「ただいま戻りました」

「おかえり」

配達から戻ってきたかけるに元気よく声をかけた。

「今日はどこまで行って来たんだ？」

「夜月町の日和さんのお宅です」

夜月町の日和さん……またか。

ここ一ヶ月ぐらいちよくちよく注文くるんだよなあ。

あれから配達に行く度にガキの頃の思い出話をされるけど、誰だつたか全然思い出せねえ。

向こうはおいらの事をすごく覚えててくれるのに、何か悪いな。

「で、どうだったんだ？」

「今日は都留男じゃないのか」とすごくがっかりされていました

「そうかあ」

「都留男様、ものすごくあの方に好かれていたんですね」

「みてえだな。お前は覚えてるか？ 日和さんがどんな子だったか」

「申し訳ありませんが、全く記憶にございません」

「だろうなあ。はあ、どうしよう」

「ベラベラしゃべってねえで、さっさと仕事しろよ」

真奈たんが怒りながらこっちにやって来た。

「ご、ごめん。なあ」

「何だよ」

「小学校から高校まで一緒だった日和恒也って奴、覚えてるか？」

「ヒワツネヤ？」

「そう。恒ちゃんって呼ばれてた奴」

「誰だそれ」

「やっぱりなあ。」

「訳分かんねえ事言ってねえで、さっさと仕事しろ！」

「は〜い」

そうだよな。

日和さんの事が気になるけど、今は仕事に集中しなきゃ！

「こ〜んにちは〜！」

超自が元気よく店に入って来た。

「いらっしやい！」

「都留男くん聞いたよ。ツタ屋敷の人、都留男くんのお友達なんだってね」

「う、うん。そうなんだ」

たった今忘れようとしてたのに……。

仕方ねえ。んな事知らねえだろっしな。

「小学校から高校まで一緒なんてすごいね」

「おいらも色好学園出身だから、エスカレーターでずっといけたんだ」

「じゃあ僕も乱蔵とず〜っと一緒だね」

「そうだな」

「ねえねえ。都留男くんは小学生の時、どんな子だったの？」

「う〜ん、すぐく元気で活発で、よくケガするって言われてたなあ」

「じゃあツタ屋敷さんは？」

「うわあ〜！ それだけはきかないでくれえ〜！」

「えっ、え〜つと、も、ものすぐく、ツタが、だ、大好き、だったなあ」

「へ〜、やつぱり昔からツタが好きなんだ。中学校でも高校でもそうだったの？」

「う、うん。そうだったよ」

何言ってるんだおいら。

ああ〜っ、ますます気になる〜！

数日後

「はあ〜っ」

日和さんってどういう子だったんだろう？
すんげえ気になる。

せつかくの休みでも気が休まらねえよ。

「何か悩み事あるんだろ？ さつさと言っちゃまえよ」

かつちゃんタバコをもみ消しながら、こつちを見た。

「日和恒也って奴、覚えてるか？」

「さあなあ」

やっぱり覚えてねえのか。

「ただ影薄かったんだ日和さんは。」

「そいつがどうかしたのか？」

「一ヶ月ぐらい前に、その人の家まで配達に行ったんだよ。そしてものすごくびっくりされて、話を聞いてたらガキの頃ずっとおいらと同じ学校だったらしいんだけど、全然思い出せねえんだよ」

「別に無理に思い出さなくてもよくね？」

「最近ちよくちよく注文があつて、届ける度に思い出話されるんだよお」

「軽く聞き流せばいいじゃねえかよ。大体おめえ優しすぎるんだよ」

「そうかなあ」

「どうしたの？」

はあとんが不思議そうにこつちを見ながらおいらの横に座った。

「あつ、はあとん。日和恒也って奴、覚えてるか？」

「ヒワツネヤ？」

「うん」

「それって、恒ちゃんの事？」

「ガキの頃はよくそう呼ばれてたらしい」

「らしいって、都留たん覚えてないの？！」

「ぜんぜん覚えてねえんだよ」

「えっつ、何で何で！ 小学生の時よく三人で「黒板の粉飛ばし対決」とかしたじゃない！」

「そうだった？」

「恒ちゃんすんごいいっぱい消しゴム持ってて、黒板消しと黒板消しを叩いた時の粉もすんごいたくさんの粉をすんごく遠くまで飛ばせるから「消しゴムと黒板消しの達人」って呼ばれてたんだよ〜！」
「本人から聞いたよ」

「おめえそんなつまんねえ事よく覚えてるな」

「ボクにとつてはつまんなくないも〜ん！ 恒ちゃんが超ウルトラスーパーDXデカイ消しゴムっていうのを持ってて、都留さんと二人で「すんごいすんごい！」って言ってたんだも〜ん！」

「あつたよな無かつたよな……」

「あつたじゃな〜い！ 都留さん何で忘れちゃったの〜?!」

「な、何でって言われてもなあ」

んな昔の事覚えてるおめえの方がすげえよ。

「都留たんよく恒ちゃんと探偵ごっこしてたじゃない」

「探偵ごっこ？」

「恒ちゃんがよく探偵が出てくるお話を図書館から借りてきて、それのマネっこでよくやってたじゃない」

あつ、そうだった！

恒ちゃんがいつつも本読んでるから、どんな本なんだろうと思つて声かけたのが最初だった。

それから探偵の事で話が弾んで、よく図書館で二人で本借りたりしてたんだつた。

「そう言えば、そうだったなあ」

「恒ちゃん今何してるんだらうね？」

「探偵好きだったから探偵事務所やってたりして」

「さすがにそれはねえだろ」

「だよなあ」

「ねえねえ、恒ちゃんどこに住んでるの？」

「夜月町にあるでっかい屋敷で、とにかくツタが絡まりまくりなんだよ。すんげえ恐かつたぜ」

「あ〜っ、知ってる〜！ 夜月町でお仕事した時帰りに通つたんだ

よ。その時にね、お屋敷の中から大ちゃんが出てきたんだよ」

「え？ 大ちゃんが？」

「うん。でも声かけたらすんごく怖い顔して「この事は誰にも言うなよ！」って言われちゃったんだ」

「それを今おいらに話したらダメだろ？」

「あつ、そうだね」

「ツタ屋敷から出てきたって事は、恒ちゃんと知り合いなんだろうな」

「二人で探偵ごっこしてるんだよ」

「その恒也つてのはさすがにまともになってるだろ？んな事してねえよ」

「そうかなあ」

「探偵ごっこはともかく、恒ちゃんの事が思い出せてよかったよ。ありがとう、はあとん」

「えへへ、どういたしまして」

次の日

「と、言う訳で無事恒ちゃんの事が思い出せたんだ」

「おめでとうございます、都留男様」

「いちいち大げさだな」

昨日の事を話すとかけるは喜んでくれて、真奈たんは仕事しながらさらっと受け流した。

「何の話だ？」

そらたろくさんが例によってニヤニヤしながらこっちにやってきた。

「夜月町の日和さんが僕の学生時代の同級生らしくて、昔どういう子だったのかずっと思い出せなかったんですけど、昨日やっと思い出したんです」

「おつ、それは良かったな。じゃあ、記念にその日和さんのお宅まで配達に行ってもらおうか」

「またご注文なさつたんですか？」

「お前のおかげでいいお得意さんが出来たよ。こんなかわいい奴が配達してくれて、しかも同級生だったら何回でも頼みたくなるのは分かるよなあ。あつ、もちろんかけるも真奈もかわいいぞ」

「な、何言ってるんですか！ 仕事中ですよ！」

真奈たんが照れながらそらたるくさんの方を向いた。

「とか言いつつ、顔真つ赤じゃねえか」

「あのく、荷物はどこでしょうか？」

「おっと、すまん。事務室にあるから持って行ってくれ」

「分かりました。行ってきます」

奥の事務室まで行って荷物を取り、自転車のカゴに乗せて夜月町に向かった。

それにしても、恒ちゃんと大ちゃんが知り合いだったとはな。

二人で本当に探偵ごっこしてたらびつくりだよな。

まあいい大人だから、さすがにそんな事はねえか。

数十分かけて夜月町まで行き、前にはるかちゃんに教えてもらった道を進んだ。

やがて、いつものツタ屋敷が見えてきた。

ん？ 今日は大ちゃんもいるな。

門の向こうに恒ちゃんもいて、なんか話してる感じだ。

「よう、奇遇だな」

声をかけると、二人ともバツの悪そうな顔をした。

「どうしたんだ？」

「な、何でも無いぞ。いつもありがとうな」

「じゃあ俺は帰るぜ」

大ちゃんは機嫌悪そうに帰っていった。

「恒ちゃん、大ちゃんと知り合いだったんだな」

「ま、まあな。あつ、こ、これが金だ」

「まず門を開けてくれねえと渡せねえぞ」

「す、すまん」

恒ちゃんが柱の後ろにあるスイッチを押すと、門が開いた。

「ま、待たせたな。これが金だ」

「大丈夫か？ 手、震えてるぞ」

「そ、そうか？ あっ！」

小銭が何枚か地面に落ちた。

「やつぱり何かあったんだろ？ 様子がおかしいぞ」

小銭を拾いながらきいてみた。

「な、何でも無いぞ」

「ホントかあ？」

「ホ、ホントだって。し、信じてくれ」

「ならいいけど」

商品を渡して家を後にしたけど、なんか落ち着かなかった。

一体何があったんだ？

そんなに隠すような事なのか？

ふと、前の方に大ちゃんが見えた。

大ちゃんなら何か知ってるかもしれない。

「大ちゃん！」

声をかけると、ブスツとした顔が帰ってきた。

「何だよ」

「恒ちゃんと何があったんだ？」

「何もねえよ。あんなおっさんとなんか」

「じゃあ何でそんなに機嫌悪いんだ」

「別に。機嫌なんか悪くねえよ」

「悪いじゃねえかよ。服屋が潰れて以来、ずっとそんな感じだろ？」

「何にも知らないくせに」

「え？」

「俺の事何にも知らないくせに、偉そうな事ばかり言っな！」

「急にどうしたんだよ？」

「俺はおめえなんかこれっぽっちも興味ねえからな！」

「そんな事言われても、何が何だか分かんねえよ」

「じゃあ分かるように説明してやるよ！ 何ヶ月か前、この辺ブラブラしてたらあの日和っておっさんに声かけられて「探偵やってみないか」って言われたんだよ」

え？ 探偵？

「ガキの頃、出淵都留男って奴が好きだったんだけど結局告白できずに卒業して、社会人になってからはそいつの事を忘れようと普通にサラリーマンやってたけどやっぱり忘れられなくて、探偵事務所開いたって話を聞いたんだ。で、直接本人に会うのは恥ずかしいから、奴の情報を集めて自分の所に届けてくれっていう馬鹿みてえな事を頼まれた」

恒ちゃんが昔、おいらの事が好きだった？

何の話だ？

恒ちゃんが大ちゃんにおいらの情報を集めてくれって頼んだ？

何だそれ？

「俺は最初断つただけけど、それなりの報酬を用意するって言われて引き受けたんだ。それで、ちょっと前からおめえに近づいたってわけ。おめえの情報を色々とおのおっさんに伝えてたんだけど、今日行ったら「最近都留男がうちに商品を届けてくれる」とかいう話をしやがって、ふざけんな！ って怒鳴ったんだ。本人が来るんだったら、俺なんか必要ねえじゃねえか！ って言ってケンカになつて、そこにおめえが来たんだよ」

「大ちゃん、それマジで言ってるのか？」

「そうだよ。まあ、信じらんねえだろうけどな。とにかく、俺は遊ぶ金の為におめえに近づいてただけだよ。誰がおめえみたいなたびデブクソオヤジに興味持つかバーカ」

「すげえな」

「へ？」

「昨日はあとんと「恒ちゃんと大ちゃんが二人で探偵ごっこしてるんじゃないか？」っていう話をしてたんだよ。それが現実になるなんて、すげえな」

「おめえまさか、あのキモゲロ派手オヤジからツタ屋敷で会った事聞いたのか？」

「聞いたぞ。ちゃんと注意もしたし」

「あんの野郎おおおおおおお！ ぜってえ言うなって言っ
といたのに！」

拳を震わせる大ちゃん。

「まあまあ、そう怒るなよ」

「何がだ！ 大体おめえも何でそんな平然としていられるんだよ！」

「平然も何も、昨日はあとんとしゃべってた事が事実になっただけ
じゃねえかよ」

「はあ？！ おめえまさか、こんなアホ話信じるとか言い出すんじ
やねえだろうな？」

「言い出すぞ」

「かーっ、おめえ本物の馬鹿だろ？ 小学校、いや、幼稚園から出
直してきた方がいいんじゃない？」

「じゃあ、大ちゃんも一緒に行くか」

「行くわけねえだろうが！ どこまで俺を馬鹿にしたら気が済むん
だ！」

「冗談だよ。それより、探偵つて事はリストラされたとか服屋が潰
れたつて話も全部ウソなのか？」

「当たり前ええだろ」

「おーっ、かつこいっ！」

「おめえぜつてえ俺をなめてるだろ。商店街で働いてて収入安定し
てるからつて、クソニートの小馬鹿にしてるだろ」

「本当の大ちゃんはニートなのか？」

「そうだよ。悪いか？」

「悪くねえよ。本当の大ちゃんの事が知れただけでも嬉しいよ」

「変なヤツ」

「ん？」

「自分の事を調査してたとか言う訳分かんねえ奴にまだそこまで興

味持つなんて、ホント変な奴だな」

「そうか？　せっかく出会ったんだからもっともっと知っていきただけだぞ？」

「こんな頭ラリってる話をベラベラ喋るような奴でもか？」

「他の奴から見たら変でも、おいらからすれば十分面白い話だぞ」

「調査対象自分だったのにか？」

「調査してたのがおいらだったからこそ面白いんだよ」

「やっぱり変なヤツ」

「なあ、せっかくだから一緒に若星町に帰らねえか？」

「どうせ断つてもついてくるんだろ？」

「じゃあ、若星町に向けて出発進行！」

「へいへい」

第17話：本当の大ちゃん

「あつ、都留男。このドラマ面白いぞ。一緒に観るか？」

リビングに行くくと、兵ちゃんがレンタルDVDを観ようとしてる所だった。

「どういうドラマなんだ？」

「ゲイのデブ探偵が旅行先で湯けむり殺人事件の謎を解き明かす、二時間サスペンスだ」

「た、探偵？」

「デブ探偵って、大ちゃんとおんなじじゃねえか！」

「まあ、おいらと兵ちゃんも「ぼっちゃりしてる」とは言われるけど、大ちゃんほどは太ってない。」

「そう言えば、大ちゃんってゲイなのか？」

「ずっと付き合ってきたけど、そういう話が全然出なかったし、彼女もいなさそうだ。」

「何回か一緒にエロビデオやゲイ雑誌観た時はすんげえ興奮してたから、もしかしたらそうかもしねえ。」

「恒ちゃんの依頼引き受けたのも、きつと男に興味あったからだ！」

「ちよつと大ちゃんの家行ってくる！ あつ、ドラマはまた今度観るぜ」

「そうか。いつてらっしゃい」

「何だよ?! まだ俺に何か用あんのか?!」

「大ちゃんの家に行くくと、予想通りブスツとした顔が出てきた。」

「ちよつとききたい事があるんだけど」

「さつさと言えよ！」

「大ちゃんって、ゲイなのか？」

「その途端、大ちゃんの顔が真っ赤になって、鼻血が噴き出した。」「ば、馬鹿! そんな訳ねえだろ!」

「じゃあ何でそんな興奮してんだ？」

「してねえよ！ とにかく、俺はそんなキモいもんじゃねえからな！」

「恒ちゃんのプロバの話を引き受けたのも、男が好きだったからだろ？」

「遊ぶ金の為だって言ってるんだろ？！ とにかく、俺にもう関わるな！」

大ちゃんはそれだけ言い残して、ドアを強引に閉めた。

「素直じゃないわね」

はるかちゃんがペロペロキャンディーを舐めながらこっちに来た。つて、何でここに？！

「は、はるかちゃん！」

「なかなか大己の心を開くのは難しいみたいね」

「し、知り合いなの？」

「昔のバイト仲間。ファミレスで知り合ったのよ。まあもう四年も前の話だけど」

「そ、そうだったんだ」

「大己の事、色々教えてあげようか？」

「え？」

「とりあえず、喫茶店にでも行こうか」

「う、うん」

と、いう訳でなぜか商店街の中の喫茶店に来る事になった。

女の子と二人で喫茶店に来るのなんて初めてだから、緊張するなあ。

適当な席に着くと、ウェイトレスさんが注文を取りに来た。

「キャラメルマキアートとシフォンケーキ。あんたは？」

「エ、エスプレッソ」

「畏まりました。ごゆっくりどうぞ」

ウェイトレスさんが去っていくと、はるかちゃんが最初に出された水を飲みながら話し始めた。

「ワタシが高一の時に、同じファミレスに同じ時期に入ってきたのよ。いい歳したおっさんなのに礼儀もクソも無くて、よく先輩や上司やお客さんに突っかかってたわね」

それでよく面接受かったな。

「マイナス思考で変な感じのおっさんだったけど、話しかけるとよく喋るおっさんではあったわね。昔の事とか色々話してくれたわ。リストラされたとか、勤めてた服屋が潰れたとか」

「そ、それって、本当だったんだ。探偵だってバラした時は「ウソだ」って言ってたのに」

「あんな手の込んだウソつける訳ないでしょ？ 全部本当の事」

「は、はあ」

「おまたせしました。キャラメルマキアートとシフォンケーキ、エスプレッソでございます。ごゆっくりどうぞ」

ウエイトレスさんが注文したものを持ってきて、またどこかに歩いていった。

「それで、その話は、ファミレスより前、なの？」

「そうよ。大学卒業後にIT企業に勤めてリストラされて、知り合いの知り合いの服屋に勤めて潰れて、その後ファミレスよ」

はるかちゃんはシフォンケーキを切りながら、淡々と話した。

「ファミレスは、辞めたの？」

「服屋と同じく潰れたのよ」

災難だなあ。

「まあ、立地条件も最悪だったしね。携帯のメルアドとか番号とか交換してたから、潰れた後も連絡は取り合ってたわよ。探偵の事も話してくれたし」

「はるかちゃんには、何でも話してくれるの？」

「そうね。でも、若い女の子が好きって感じじゃないわね」

「え？ じゃあ」

「あんたと同じよ。こっさりゲイのAV買ってるの見たし、おやじのお客さんが来た時明らかに興奮してたし」

やっぱりそうだったのか。

「恒也さんの依頼受けたのも、男が好きだった、からかな？」

「でしょうね。本人は「遊ぶ金の為」とか言ってるけど、本当はあんたがどんな男なのか興味あったんじゃないの？」

う、うくん……そう言われると複雑だなあ。

「チビデブおっさんのくせにモテモテね。彼氏いるそうじゃないの」

「大ちゃんから、聞いたの？」

「そうよ。ゲイでデブのおっさん同士で三角関係になるかもね」

「お、大人をからかっちゃ、いけないよ」

「ハタチだからワタシも大人よ」

「そ、そうだね」

コーヒーを飲んだり、ケーキを食べたりした後お会計して、外に出た。

「で、どっちを取るの？」

「と、取るって？」

「決まってるじゃない。大己と彼氏、どっちを取るかよ」

「そ、それは、その、あの」

「お前ら何やってんだ？」

前から大ちゃんが相変わらずブスツとしてやってきた。

「喫茶店であんたの事を話してたのよ」

「はあ?! このゴミクズに俺の事をべらべら喋りやがっただど?」

「ちよつとは素直になりなさいよ。本当は都留男の事が好きなんですよ?」

大ちゃんの顔がまた真っ赤っかになった。

「だ、誰がこんなクソ野郎の事なんか好きになるか!」

「携帯に都留男の色んなかわいいシヨットを残してるのは誰だっけ?」

「うっっっ」

「毎晩都留男の事を考えながらちんちんシコシコしてるって言ったのはどこのどいつだったっけ？」

「そ、それは……」

「銭湯に行った時に、虹橋かけるって奴と一緒にこっそり都留男のパンツを嗅いでたらしいのはだあれ？」

「や、やめろお！」

そんな事してたのか……。

ってか何でかけるまでおいらのパンツ嗅いでたんだ？

「大人しく都留男が好きだって認めなさいよ」

「認めねえよ！ ぜってえ認めねえからな！ 誰が初めて会った時から都留男の事が好きで好きでしょうがねえなんて事言うつかよ！」

「大己くん、それは本当なのか?!」

兵ちゃんが目を吊り上げてメラメラと燃え上がりながら、大ちゃんのをばまで来た。

「へ、兵ちゃん。ドラマ観てたんじゃなかったのか？」

「観ようと思っただけど、都留男と今度観る事にしてやめたぞ。それで野菜が無かったからしなこちゃんの八百屋さんまで買いに行つて帰ろうとしてたら、何だこの有り様は?!」

「いや、あの、こ、これには深い事情が」

「おっさんには関係ねえだろ？」

兵ちゃんを睨みつける大ちゃん。

「年上の人に向かつておっさんとは何だ?! それと、俺と都留男は幼稚園の時に知り合ってから三十年間ずっと一緒なんだぞ！ 恋人になつてからも十六年は経ってるんだぞ！」

「へへ、そんなに経ってたらさすがに愛が覚めてるんじゃないですか？」

「何だとお?!」

ず、凶星だ……。

「とにかく、都留男はずっとずっとずっと俺のものだ！」

「どうぞ好きにしてください。別に奪うつもりありませんから」

「ああっ、ど、どうしよう！」

「何か面白い事になってきたわね」

「全然面白くないよ！」

「都留男、あなたまさか」

「な、なんか聞きおぼえがある声だな。」

「恐る恐る振り向くと、前に海で出会った井ノ内さんが呆然と立っていた。」

「い、井ノ内さん！」

「知り合い？」

「ま、前に、う、海で、ちょ、ちよつと会った人だよ」

「ああっ、新作の取材で来た先で劇的な再会をしたかと思ったのに、まさかあなたがホモだったなんて！」

「こ、この人までいきなり何言い出すんだ？！」

「でもあたし諦めない！ 諦めないんだから！ 必ずやあなたを女好きにして、振り向かせてみせるんだから！」

「な、何の話だあああああああああ？！」

「都留男、この女は誰だ？」

「うっつ、兵ちゃんの視線が痛いよ。」

「いや、あの、この人は」

「あんたが彼氏ね」

「そっだ。お前は一体何者なんだ？！」

「数ヶ月前に海で都留男と運命の出会いをして、あんな風やこんな風にひと夏を過ごした井ノ内千亜希よ」

「ああっ、ややこしい紹介の仕方を……。」

「な、何だとおおおおおおおお！ 都留男、これはどういうことなんだ？！」

「ち、違う！ 何もねえつてば！」

「とにかく、都留男を必ずや女好きにしてあなたから奪ってみせるわ！」

「そんな事ぜってえさせねえからな！」

「さあ都留男、大人の女の魅力に目覚めるのよ！」

井ノ内さんが詰め寄ってきた。

こ、怖いよ……。

「都留男、当然俺の方がいいよな？」

兵ちゃんも負けじと詰め寄ってきた。

うつつ、同じぐらい怖いよ……。

「だ、大ちゃん助けてくれ」

「何で俺に助けを求めらんだよ?!」

「あんたの思いが通じたんじゃないの？」

「つまんねえ事言うなあ！」

「都留男、そんなに大己くんがいいのか?!」

「いや、いやらしい意味じゃなくて」

「馬鹿馬鹿しい。俺は帰るからな」

大ちゃんが呆れながら帰っていった。

「あつ、待つてくれ大ちゃん！」

「都留男、やっぱり大己くんがいいんだな?!」

「だ、だから、その、いやらしい意味じゃなくて」

「あゝら都留男、醜いおっさんより美しい大人の女よねえ？」

「そ、それは、その……」

な、何でこうなるんだ?!

第18話：兵ちゃんがないクリスマス

「もうすぐクリスマスだね」

「そうだな」

いつものように、かつちゃんとはあとんと家でだべっているとクリスマスの話になった。

クリスマス……か。

ガキの頃は楽しみだったけど、大人になってからはいつの間にか楽しみじゃなくなったなあ。

「こないだね、サンタさんに会ったんだよ。一緒にクリスマスケーキ作ったり、ツリーの飾りつけしたり、プレゼントにディベアもらったりしてと〜っても楽しかったんだ」

「どうせそういうドツキりだろ？」

「ちがうも〜ん！ ぜったいぜったいホントのサンタさんだも〜ん！」

「お前らは楽しそうでいいよなあ」

「え〜っ、都留たん楽しみじゃないのお〜?!」

「まあな」

「何でえ〜？ クリスマスシーズンはお店も書き入れ時なんでしょお〜？」

「それはありがたいんだけどな」

「毎年毎年兵吉さんが手の込んだクリスマスケーキ作ったり、すんげえ豪華なプレゼント用意したりするから疲れるんだろ？ 毎年言っつてんじゃねえか」

「愛が重いんだよなあ」

「せつかく兵吉さんが頑張って盛り上げてくれるのに、そんな事言っっちゃダメ〜！」

身を乗り出して怒るはあとん。

「い、いめん」

「一緒に過ごせる恋人がいるだけいいだろ？ 俺なんか結局今年も彼女出来なかったんだぞ」

「うーん、やっぱり贅沢なのかな？」

「十分贅沢だと思うぞ」

「兵吉さんがかわいそうだからそんな事言っちゃダメだよ」

「わ、分かったよ」

とは言うものの、やっぱり憂うつなんだよなあ。

二人が帰った後、食器を片づけながらため息をついた。

十数年も付き合っていると、さすがにそんなに好きじゃ無くなってくるんだよなあ。

兵ちゃんに隠れてHなビデオやゲイ雑誌見る回数も年々増えていつてるとような気がするし。

もうマンネリだつて気付かないのかな？

こっちからはなかなか言い出しにくいしなあ。

毎年派手なケーキや豪華なプレゼントに圧倒されて、結局言えなくなってるし。

「ただいま」

か、帰ってきた！

買い物袋を提げた兵ちゃんがニコニコしながらリビングに入ってきた。

「おかえり」

「都留男、今年のイヴは二人でブッシュ・ド・ノエルを作るぞ！

材料もたっくんさん買ってきたからな」

「うわあ、やる気マンマンだよお。」

「そ、そうなんだ」

「楽しみだなあ。都留男と二人で作るブッシュ・ド・ノエル」

んなもん作りたくねえよ。

はあ、つ、せめて今年のクリスマスぐらいはゆっくり過ごしたいなあ。

何とか上手く口実作れねえかなあ？

「そうだ！ はあとのクリスマスライブに行ってる事にしよう！
いや、ダメだ。」

「ぜってえ「なら二人で行こう」とか言う事になっちまう。」

「じゃあ、早めに実家に帰るって事にするか！」

「いや、実家に電話したらすぐにバレちまう。」

「うーん、どうしよう。」

「……そうだ！」

「兵ちゃん」

「何だ？」

「クリスマスイヴなだけどな、そらたろーさんが「同級生でクリスマス会をやるうか」って言ってるんだよ」

「同級生で、クリスマス会？」

「目をパチクリさせる兵ちゃん。」

「そうなんだよ。前に温泉旅行に行ってただろ？ あのノリで集まるうっていう事らしいんだよ」

「じゃあ宙太郎に「都留男とブッシュ・ド・ノエルを作るから行けない」って言っといてくれ」

「し、しまった！」

「このままじゃいけねえ！」

「いや、あの、そ、そらたろーさんどうしても兵ちゃんに来て欲しいみてえなんだよ」

「何でまた俺に？」

「おいらもよく知らないんだけど、兵ちゃんにどうしても渡したいスペシャルクリスマスプレゼントがあるそうなんだ。だから行った方がいいと思うぞ」

「そうかあ、じゃあ行ってくるか。場所はあいつん家なのか？」

「おう」

「ブッシュ・ド・ノエル作れなくて残念だけど、ちゃんと留守番してるんだぞ」

「はい」

ふっふっふっ、ちよるいちよるい。

これでクリスマス・イヴは自由だぜ！

はあとんやかっちゃんやかけるを誘って、大ちゃんちでクリスマスパーティーでもするか！

さっそく電話するぞお！

クリスマス・イヴ当日

ふうっ、やっと仕事が終わったぜ。

しかも今年のクリスマス・イヴは、兵ちゃんから解放されて自由！
こないいい事は無いぜ！

「都留男様、お疲れさまです」

かけるが声をかけてきた。

「おうっ、お疲れ」

「大ちゃんさんのお宅でのクリスマスパーティーに誘っていただき、
ありがとうございます」

「いや、いいんだよ」

「ところで、兵吉さんは今年どちらに行かれてるんですか？」

「そらた……じ、実家に帰ってるんだ」

ふうっ、あぶねえあぶねえ。

そらたろくさんに聞かれたらまずいからな。

「珍しいですねえ、この時期に実家に帰られてるなんて」

「こ、今年はいつもより早く帰るつもりだったらしいんだ」

「そうだったんですか」

「さっ、こうしちゃいらねえな。着替えたら大ちゃんちに案内するぞ」

「はい。よろしくお願いいたします」

制服から私服に着替えた後、荷物を持って大ちゃんのマンションに向かった。

「葉亜人さん達はもう来られてるんですか？」

「直接大ちゃんの家に行くよう言っただけから、来てると思うぞ」
大ちゃんがクリスマスパーティーOKしてくれて良かったぜ。

最初はすんげえキレられて断られたけど、「かつちゃんが来て、
CRUSHERSのクリスマスソロメドレー歌ってくれるそうぞぞ」
って言ったら即OKしてくれたからな。

まあ、その後かつちゃんから「てめえ勝手に余計な事言っんじや
ねえ！」って怒られたけど。

「着いたぞ。ここが大ちゃんのマンションだ」

「近いですねえ。商店街から歩いて五分ぐらいしか経ってませんね」

「だろ？ さっ、中に入るぜ」

中に入り、エレベーターで大ちゃんの部屋がある階まで行って、
ドアの前まで歩いた。

呼び鈴を押すと、しかめっ面した大ちゃんが出てきた。

「おっせえよ。今勝次さんのクリスマスメドレーが終わったとこだ
ぞ」

「ごめんごめん」

「とつと中入れよ」

「お邪魔しまゝす」

リビングまで行くと、かつちゃんがソファでタバコを吸いなが
らTVを見てる所だった。

はあとんはダイニングでテーブルの前に座って、クリスマスケー
キをバクバク食ってる。

「あつ、都留たんにかけるくん」

「こんばんは」

「遅くなっごめんな」

「かつじんのお歌、すんごくかつこよかったよ」

「いい加減、曲って呼べよ」

かつちゃんの呆れた声が聞こえた。

「何か食うか？ はるかか菓子屋で買ったクリスマスケーキな

らまだあるぞ」

「もちろん食うぜ！」

「僕もいただきます」

「飲みもんはコーラとかジンジャエールでいいんだな」

「いいぜ」

大ちゃんは台所の方へ行き、おいらとかけるはテーブルの前の適當な所に座った。

「あれ〜っ、兵吉さんは〜？」

「実家に帰っているそうですよ」

「珍しいねえ。お父さんやお母さんに会いたいのかな？」

「きつとお会いしたいんでしょうね。今年は例年より早く帰る予定だったそうですし」

この話が広まってきてるな。

まあ、別にいつか。

「兵吉さんの実家って夜月町だろ？ そんな近いのにクリスマスイヴに帰るなんて、なんかあつたんじゃね？」

か、かつちゃん！

「な、何もねえよ。今年はその、ゆっくり過ごしたいそうだ」

「ふ〜ん。まあ、兵吉さんも色々あるだろうしな」

そうこうしてるうちに、大ちゃんがクリスマスケーキを持って戻ってきた。

生クリームたっぷり、いちごも熟れててすんげえ美味そうだ。

「いったただつきま〜す！」

「いただきます」

「ボクも食べる〜」

「俺も食うか」

うんめえ！

スポンジがふわふわだし、クリームもびっくりするぐらいなめらかだ。

いちごも上に乗ってるチョコもすんごく美味しい。

「うめえなあ」

「美味しいねえ」

「すごく美味しいです」

「やっぱり甘いもんはやめられねえな」

「ねえねえ、ボクが出てる特番があるんだよ。一緒に見ようよ」

「おう、見ようぜ」

その後、はあとんが出てる特番を見たり、ゲームしたり、大ちゃん探偵だった事を話して本人から殴られたり、かつちゃんがアンコールソロライブしたりして、あつという間に時間が過ぎて行った。

「ふう、食った食った」

「もう十一時じゃねえかよ。いい加減帰ろうぜ」

「え〜っ、まだ居たい〜」

「風呂とかどうするんだよ」

「お風呂ならこの近くに十二時までやってるお風呂屋さんがあるんだよ」

「そうだったんですか」

「うん。今からみんなで行こうよ」

「風呂ぐらい大己に借りればいいだろ？」

「勝次さんはともかく、俺や都留男達はデブだから湯がいくらあっても足りないっすよ。ここは銭湯に行きましょう」

「そうか。まあ、お前がいいんだったらそれでいいぞ」

「わ〜い、さっそく行こう行こう」

銭湯なんて久しぶりだなあ。

みんなで湯船に浸かって、風呂上がりには美味しい牛乳を飲んで…

…。

く〜っ、最高だぜ！

「いやあ、楽しみだなあ銭湯」

「そうだねえ」

銭湯までの道を歩きながら、そんな会話をしていた。

「都留男」

「こ、この声は！」

恐る恐る声が見ると、兵ちゃんが燃え上がって拳を震わせながら立っていた。

「へ、兵ちゃん！」

「どういう事だ?! 宙太郎ん家に行っても「そんな事一言も言っていないぞ」って言われたぞ!」

「いや、あの、こ、これは」

「あれ〜っ、兵吉さん。実家に帰ってたんじゃないんですかあ?」

「え?」

兵ちゃんの目がテンになった。

わ〜っ、葉亜人の奴余計な事を!

「それって、どういう事だ?」

「今年は早く実家に帰ろうと思っていたからもう帰っている、と都留男様からお聞きしましたよ」

「そ、それはだな」

「都留男、俺だけでなく皆にもそんな嘘ついてたんだな」

うつっ、こ、声が恐いトーンに戻ってる。

目から殺気が漂ってるよお。

「お、落ち着いてくれ兵ちゃん」

「落ち着いてられるわけ無いだろ? さあ、どういう事なのかきちり説明してもらおうか」

「こ、恐れよお。」

手をボキボキ鳴らしてるし。

「都留男様、まさか兵吉さんと一緒にいたくないが為にそのような嘘をついたんですか?」

かけるの顔が真っ青だ。

「ち、違う。これは」

「何がどう違うんだよ」

だ、大ちゃんもおいらを睨みつけてる。

呼び鈴を鳴らすと、すぐに民之亮が出てくれた。

「うわっ、お前どうしたんだよ?! ボコボコじゃねえかよ!」

「昨日色々あつてな。誰も家に入れてくれなくて、結局野宿する事になったんだ」

「何があつたんだよ?!」

「いやあ、毎年毎年兵ちゃん豪華なプレゼント用意してくれたり派手なケーキを焼いたりするのが嫌になってきて、兵ちゃんと一緒に過ごせないようにウソついたらこうなつたんだよ」

「明らかにおめえのせいじゃねえかよ!」

「なっ、頼むよ。中に入れてくれ。もうお前にしか頼めねえんだよ」

「ヤダよ! 何でそんな奴家に入れなきゃなんねえんだよ?!」

「若星町から夜月町まで一時間以上かけて来たんだぞ」

「んなもん知るかあ! とにかく、俺に頼つても無駄だぞ!」

「そ、そんなあ!」

第19話：百八人の除夜の鐘

「ふうっ、買った買った」

「これでゆつくりTVが見れるな」

商店街のスーパーでの買い出しを終えて、兵ちゃんと二人で家までの道を歩き始めた。

もう大晦日かあ。

今年も色々あったなあ。

まさか大ちゃんが探偵だったなんて、想像もしてなかったぜ。

恒ちゃんも昔からおいらの事好きだったんだなあ。

そう言えば、大ちゃんこの間「去年の秋から都留男の事が好きで好きでしょうがねえ！」って言ってたな。

井ノ内さんも「あたし諦めない！」とか訳分かんねえ事言い出して、大騒ぎになってたっけ。

うーん、どうしてこうなっちゃうんだろう？

まあ、来年何も起きなきゃいいな。

「どうしたんだ？」

兵ちゃんが不思議そうに顔を覗き込んできた。

「いやっ、何でもねえよ」

「そうか。来年もラブラブでいような」

うっつ、人の気も知らないで。

「よおっし！ 何とか鐘を取り付ける事は出来たわい」
ん？ 町長さん。

広場で何やってるんだろう？

しかも、目の前にすんげえデカイ鐘がある。

あんなのどっから持って来たんだ？

「町長さん、こんにちは」

「おっ、都留男に兵吉」

「何やってるんですか？」

「今日の夜十一時頃から、百八人の町民が一人ずつこの鐘を鳴らすイベントをやるうと思っておるんじや。その為に、わざわざ知り合いの寺から超巨大な鐘を借りてきて、ここの広場に取り付けておった所じや」

「そ、そうなんですか」

「ってか、鐘って借りれるんだ。」

「百八人ってすごいですね。どういった方が参加されるんですか？」

「ふふふ、聞いて驚くな。実は」

「だ、誰なんだ？」

「サプライズゲストでも来るのか？」

「広場の近くの店の奴らに許可を取るのに必死で、肝心の百八人がまだ集まっとらんのだじや」

「……え？」

「それって、ヤバいんじゃないですか?!」

「そうじや。とつてもヤバい状況じや」

「どうするんですか?! もう夕方ですよ!」

「今から集めるしかないのう。悪いが、お前さん達も手伝ってくれんか?」

「僕達はいいですけど、町内会の人達にも声かけないと百八人も集まりませんよ」

「そうじやな。さっそく連絡してくるわい」

「町長さんは駆け足で公民館の方へ走っていった。」

「おいら達もこうしちゃいらねえな」

「そうだな。とりあえず俺は外で皆に声かけてみる」

「じゃあ、おいらは電話帳に載ってる奴らに片っ端から電話掛けるぜ」

家に帰ったおいらは、早速電話帳に載ってる人という人に電話を掛けた。

「けど「忙しい」とか「寒い」とか言われて、なかなかOKしても

らえない。

「いよいよ最後の方になっちまったな。次はかっちゃんだ」
かっちゃん家の電話番号を押して、受話器を耳に当てた。

「はい、湯川です」

「あつ、かっちゃん。おいらだけど」

「何かあったのか？」

「実は今日、夜十一時ぐらいから商店街の広場で除夜の鐘を撞くイベントがあるんだ。それで鐘を撞いてくれる百八人の人を今集めてるんだけど、出てくれないか？」

「わりい。今日は居化戸市で年越しライブがあるんだ」

「そうだったのか。じゃあ、頑張つてな」

「お前も無理すんなよ」

「やっぱ芸能人は忙しいんだなあ。」

「はあとんときよっちゃんも、さつき年をまたいだ生放送があるつて言つてたし。」

「その後何人かに電話を掛けてみたけど、全員に断られちまった。うーん、どうしよう。」

「こつなつたら、このテを使うしかねえな。」

「ぜつてえダメだからな」

「健介は腕を組んで、おいらの方をキツと睨みつけてきた。」

「奴の家の前まで来て広報の号外を出すように頼んだけど、さつきからずつとこの一点張りだ。」

「そんな事言わずにさあ、頼むよお」

「俺は下世話な話しか興味ねえんだよ」

「広報つて元々町の活動とかを書くもんだろ？」

「そんな活動どうでもいいぜ。しかもさつき町長からも全く同じ事言われたぞ」

「や、やっぱり……。」

「とにかく、号外なんか出さねえからな」

健介は家の中に入っちまった。

「ここにおったのか」

町長さんが残念そうな顔をしてこちらに來た。

「どうでした？」

「ダメじゃ。町内会の奴らが何とかイベントの事を広めてくれたんじゃが、全然人が集まらん」

「そうですか」

「あつ、都留男」

兵ちゃんがこっちにやって來た。

「どうだった？」

「ダメだ。誰も見向きもしてくれねえ」

「そうかあ」

なかなか難しいもんなんだなあ。

「お前ら、何やってんだ？」

大ちゃんが相変わらずしかめっ面しながら、声を掛けてきた。

「これから勝次さんの年越しライブに行くつてのに、そんな顔されたらテンション下がるだろ？」

「ごめんごめん。実はな、今日の夜十一時頃から商店街の広場で除夜の鐘を撞くイベントがあつて、鐘を撞いてくれる百八人の人を探してる所なんだ」

「百八人?! マジでそんなに集めんの?!」

大ちゃんは目を丸くして驚いた。

「そつだぞ」

「で、どういう風を集めてんだ？」

「おいらは電話帳に載ってる人という人に電話して、兵ちゃんは町で人に声かけてたぞ」

「わしは町内会の奴らに協力を頼んだぞ」

「がく然とする大ちゃん。」

「お前ら今時そんな古臭い方法で集まる訳ねえだろ? ネット使えよネット」

「ネット？」

「そうだよ。SNSとかつぶやきとかブログとか、色々あんだろ？」

「おいらも兵ちゃんもパソコンよく分かんねえぞ」

「わしも最近やっつと始めたばっかりじゃ」

さらにながく然とする大ちゃん。

「全く、これだからリア充は」

「リア充って何だ？」

「ググレカス」

「え？」

「しょうがねえから、俺も手伝ってやるよ」

大ちゃんは携帯を取り出して、何やらいじり始めた。

「何をやっておるんじゃ？」

「何でしようねえ」

「この商店街の広場で除夜の鐘を撞く、っていつつぶやきを拡散希望で載せてるんだよ」

「そ、そうか」

何かよく分かんねえけど、すげえなあ。

「後一応つぶやきやってない奴らにメール送っとくぞ」

「よ、よろしく」

何かすんげえハイテクだなあ。

「じゃあ、俺は勝次さんの年越しライブがあるんでこれで」

「ありがとな」

大ちゃんは駅の方へ歩いていった。

「今のよく分からぬ事で、本当に人が集まるのかのう？」

「僕達も負けずに集めましょう」

「そうじゃな」

その後も、おいらはまた家に帰って電話を掛け、兵ちゃんと町長さんは町内会の人を作ったというビラをまいた。

そうこうして居るうちにあつという間に真っ暗になり、気付けばもう十時だ。

「つ、疲れたな……」

「そうだな。夕方から五、六時間ずっとやってたからな」

おいらと兵ちゃんは、町長さんの家のコタツにへ口へ口になりながら入ってた。

「結局十一人ぐらいしか集まらんかったが、お前さん達が一生懸命手伝ってくれただけでもよかったぞ」

町長さんは温かいお茶とお煎餅を出してくれた。

「すみません、力になれなくて」

「どつて事ないぞ。お茶でも飲んでゆっくりしてから、鐘を撞きに行くか」

「そうですね」

お茶とお煎餅を頂いてる間に十一時前になって、おいら達は商店街の広場に向かった。

「結局十一回しか鐘を鳴らせんな」

「一人何回鳴らしてもいいようにすればいいんじゃないですか？」

「そうじゃな」

もうすぐ広場だ。

……あれ？

鐘の前に、すごい人だけりが出来てる！

こ、これは一体？！

「あゝら、都留たん。こんなに人集めたの？ すごいじゃない」
完全防寒スタイルの漢太が、こつちに来るなり頭を撫でてきた。

「お、おいらこんなに集めてねえよ」

「じゃあ、兵ちゃんかしら？」

「俺も違うぞ」

「まさか、町長様？！」

「わしも違うぞ」

「山口大己って奴ですよ」

はるかちゃんがどこからともなく現れた。

「何言ってるの?! こういうのはね、勢いが大事よ!」
そうこうしてるうちに、撞木が鐘にぶち当たった。

撞木は鐘を突き抜け、鐘は何とも言い難いとしてつもなくデカい音を立て、豪快に崩れ落ちた。

全員が、言葉を失った。

ただただ、時間だけが過ぎて行った。

しばらくして、町長さんがやっと口を開いた。

「漢太、これはどう弁償してくれるんじゃない?」

「す、すみませ〜ん」

「とにかく、片づけるしかねえな」

こうして、総勢百八人による広場の大掃除が始まった。

鐘の破片があちこちに散らばってて、見つけるのが大変だ。

漢太は町長さんにひたすら頭を下げ、町長さんは知り合いのお寺にどうお詫びしようかと必死だった。

「まさか掃除することになるとはな」

「骨が折れるぜ」

まだまだ大掃除は続いた。

鐘の小さな破片を見つけるのも大変だけど、破片になってない何とか鐘として残ってる部分の処理はもつと大変だった。

「いい知らせがあるわよ」

広場の周りを掃いてると、はるかちゃんがふと声を掛けてきた。

「何だい?」

「十二時になつたわよ」

「え?」

そうか。イベント開始の十一時からもう一時間も経ってるのか。つて、事は……年が明けちゃったのか!

「あけましておめでとございます、都留男」

「あ、あけまして、おめでとございます、はるかちゃん」
「な、何でこうなるんだろう?」

第20話：うさ耳お正月

元日

「明けましておめでとう」

「おめでとう、都留男」

今年も正月がやって来たぜ！

毎年、正月には実家がある理亜流町に里帰りしてるんだ。

兵ちゃんも自分の実家に帰ってるから、今日はいない。

「さっ、中に入れてくれ」

父ちゃんに促されてリビングに行くと、母ちゃんがテーブルにお
せちを並べてる所だった。

「母ちゃん、明けましておめでとう」

「都留ちゃん」

母ちゃんが急に抱きついて頭を撫でてきた。

毎年会うたんびにいつも抱きついて、頭撫でてくるんだ。

「明けましておめでとう。今年もかわいいわねえ」

うつつ、いくつになっても頭撫でられると照れちまうよ。

「や、やめるよお」

「あらあ？ 小学生の頃は寮に行くたんびに「母ちゃん」って甘
えてきたじゃないの」

「いつの話してんだよ」

「新年早々にぎやかだな」

この声は？！

振り向くと、そこには予想通り一つ下の弟の夢彦ゆめひこがいた。

おいらとは違って背が高く細身で、目も切れ長。

似てるのはじいちゃんの代からずっと受け継がれてるぶつといま
ゆ毛ぐらいだ。

普段は若星町よりちょっと都会の居化戸市で、システムエンジニ
アをしている。

「夢彦、明けましておめでとう」

「はあん？ 何言ってるんだ？ おめえが生きてる時点で、めでたくも何ともねえんだよ」

くっ、相変わらず生意気な奴だな！

昔からいつつもおいらをなめてて、兄ちゃんを敬うって事を全然しねえんだよな！

「お前な、今年こそは態度を改めろよ」

「それはこっちのセリフだ。チビデブホモはチビデブホモらしく、そんな偉そうなことは言わない事だな」

どっちが偉そうなんだよ？！

ほんつとム力つく奴だな！

「まあまあ二人とも、ケンカしないの」

「分かってねえなあお袋は。このゴミクズはな、こつやって言葉責めされるのが気持ちいい変態なんだよ」

んな訳ねえだろ？！

「そうだったの？ 都留ちゃん」

認めるな！

「馬鹿な事言ってるんで、お前達もおせちの準備手伝え」

「はい」

「じゃあその重箱を持ってきて」

母ちゃんに言われて、台所の重箱をせっせとリビングに運んだ。

「茂典しげのりくんや鈴音すずねちゃんは？」

「まだ来てないわよ」

「毎年来るの遅いよなあ、あいつら。で、このどうしようもねえ力又豚が毎年早く来るんだよなあ」

「お前も毎年早いじゃねえかよ」

「寄生虫以下の奴と一緒にされたくねえな」

ああ言えばこう言うな！

でも、いいんだ。

所詮こいつにも弱点があるんだから、そこを突けばイチコロだ！

「お前、彼女出来たのか？」

「へっへっん！ 今まではこれを聞いた途端妙に慌て始めたから、
いないの丸わかりだったぜ！」

「さあ、今年も慌ててくれたまえ！」

「出来たぞ」

「え？」

「そ、そんな！ こいつに彼女が？！」

「嘘だ！ 何かの間違いだ！」

「お前があのおっさんと付き合ってるぐらいだから、俺にも彼女ぐ
らいできるぞ」

「くっつ、不覚！」

「はっはあゝん。さては悔しいんだな？」

「そ、そんな事ねえぞ」

「これまで弱点だと思ってたのが、急に使えなくなっただから焦って
るんだな？」

「ず、凶星だ……。」

「んな訳ねえだろ」

「いつまでもそんなテが通用すると思うなよバーカ！」

「くっそお！ どこまでも生意気な野郎だな！」

「お前達、今年こそは仲良くしてくれよ」

「父ちゃんが心配そうにこちらを見てきた。」

「いやあ、おいらは仲良くしたいんだけど、夢彦が生意気でなあ」

「俺も兄貴がこんなクソチビデブホモでなきゃ仲良く出来るんだけ
どなあ」

「なんだとお！ お前ゲイなめんなよ！」

「ホモはホモでも、背が高くてスマートなイケメンだったら許せる
んだけどなあ。お前チビデブだからなあ」

「ふんっ、身長は今からでも伸びるんだぜ」

「お前幼稚園以下の発想の持ち主だな」

「二人とも、今年も買ってきたわよ」

母ちゃんがニコニコしながら、紙袋を持ってきた。

「今年もって、まさか」

「そう！ 毎年恒例の十二支コスプレよ〜ん」

おおっ、今年も来たか！

毎年正月に、母ちゃんが今年の干支のコスプレを買ってきて着せてくれるんだよなあ。

夢彦は昔から全然喜ばねえけど。

いつの間にか居なくなってるし。

「あらっ、夢ちゃんは？」

「毎年コスプレの時はどっか行くんだよなあ」

「もうっ、素直じゃないんだから」

「なあなあ、今年はどんなコスプレなんだ？」

「じゃ〜ん！ 卯年って事でかわいいいうさ耳で〜す」

「おお〜っ！」

かわいくてふわっふわのうさ耳が、紙袋から出てきた。

「さっそく都留ちゃんに付けてあげま〜す」

包装の袋からうさ耳を出して、おいらの頭に着けてくれた。

「きゃ〜っ、今年もかわいい〜！」

「そうか？ どうだ父ちゃん、似合ってるか？」

「とつても似合ってるぞ。鏡で見るといいんじゃないか？」

「はい、鏡」

母ちゃんが用意してくれた鏡に自分を映してみた。

「おお、かわいい〜！」

「でしょ？」

「母ちゃん、ありがとう」

「どういたしまして」

「それにしても、夢彦の奴どこ行ったんだ？」

父ちゃんがピリピリしながら、廊下の方を見た。

「あんな奴ほつとけばいいんだよ。それより、コーラ飲もうぜ」

「あっ、ごめんなさい。コーラ買ってきてなかったわ」

「え〜っ、おいら大好きなのに」

「本当にごめんなさい」

「コーラがねえ正月なんて考えられねえよ」

「何で正月からコーラなんだ？」

「父ちゃんが冷や汗をかきながら、おいらの方を向いた。」

「今から買ってくるわ」

「いやいや、ここは若いおいらが買ってくるよ」

「あら、そう？ 悪いわねえ」

「実家なんかめったに帰って来ねえし、散歩がてら行ってくるよ」

「それじゃあ、いつてらっしやい」

「う〜ん、故郷の空気はうめえなあ」

町をぶらぶら歩きながら、思いつきり伸びをした。

考えてみれば故郷って言っても、小学生になってからは年に数回しか帰って来てねえんだよなあ。

かつちゃんが色好学園に無理矢理行かされずに地元の小学校に通ってから、おいらも地元の小学校に行ってたんだらうなあ。

それはそれでまた別の人生があったわけだな。

はあとんや真奈さんと出会う事も無かったらうし。

当然中学も地元の中学に通ってたらうから、かけるやきよっちゃんとお会う事も無かったらうなあ。

ん？

ふと、目の前を民之亮と仁之さんが歩いているのが見えた。

何でここにいるんだ？

「げっ、都留男」

「民之亮、仁之さん。明けまして、おめでとうございませす」

「おめでとございませす、都留男くん」

仁之さんは深々とお辞儀した。

「何でここにいるんだよ？」

「ここがおいらの故郷だからだよ。お前は旅行なのか？」

「ちげえよ。俺もここが故郷なんだよ」

「そうだったのか!」

「こいつもここ出身だったんだな!

「学校はどこだったんだ?」

「地元の学校だよ。それより、何なんだ? そのだっせえ耳は」

「これか? これは母ちゃんが買ってくれたうさ耳なんだ。どうだ?
? かわいいだろ?」

「ふんっ、そんなの俺が着けたらもっとかわいくなるぜ!」
「な、何だあ?」

いきなりどうしたんだ?

「そ、そうなんですか? 仁之さん」

「いや、コスプレさせるような趣味が無いから分からんな」

「じゃあ今年からその趣味を持つとっじゃねえか」

「え?」

「これと同じ奴、今すぐ買ってこい!」

「ええっ!」

「いいから早く!」

「お、おう」

仁之さんはダッシュでデパートの方へ向かった。

「何で急にそんな事言い出したんだ?」

「決まってるじゃねえかよ。お前の永遠のライバルとして、この勝負は負けられねえからだよ!」

指をビシッとおいらの方に向ける民之亮。

「いつから勝負になったんだ?」

「俺とお前は、同じチビデブサイクホモとして対立しなきゃなんねえんだよ」

こいつこんなキャラだったか?

今年からイメチェンしたのかな?

しかもおいら、別に自分でブサイクだって思ってねえし。
「そ、そうか」

「この勝負に、今年一年の運を賭けようぜ！」
「それはいいけど、勝敗は誰が決めるんだよ？」
「簡単だ。仁之にやらせればいい」
「ならいいけど」
何か訳分かんねえ事になってるな。

しばらくして、仁之さんが戻って来た。

「遅い！」

「すまなかった。これがうさ耳だ」

「早く袋から出して着けさせる」

「分かった」

袋からうさ耳が出され、民之亮に手渡された。

「よおっし、さっそく着けるぞ」

民之亮が頭にうさ耳をつけた。

顔が濃すぎるせいか、お世辞にも似合ってるとはいえない。

仁之さんが素早く鏡を差し出した。

「おっつ、なかなか似合ってるじゃねえか」

まあ、本人が納得してるんだったらいつか。

「おいお前、ジャツジしろ」

「ジャ、ジャツジ?!」

驚く仁之さん。

「そつだ。俺と都留男、どっちがかわいいか言うんだ」

「……分かった。判定は」

「おっ、外でまでうさ耳着けてるなんて、さすがクソ都留だな」

声がする方を見ると、案の定夢彦がいた。

「お前どこ行ってたんだよ？」

「近所に挨拶回りしてたんだよ。それより誰なんだ？ この人達は」

「おいらの友達の民之亮と、兵ちゃんの高校時代の友達の仁之さん」

「どうも初めまして」

夢彦は軽く会釈した。

仁之さんも会釈し返した。

「こいつはおいらの弟の夢彦」

「すみませんねえ。こんな頼りない兄貴で」

「いや、そんな事ないっす！ 夢彦さん、イケメンで背も高くて完璧っすよ！」

「は、はあ。ありがとうございます」

何で夢彦が褒められてるんだらう？

やっぱり今年の民之亮、何か変だな。

「民之亮の奴、都留男くんと初めて出会った時「俺とおんなじような見た目の奴が居て、仲間が出来た」ってすごく喜んでたんですよ。そうだったのか！」

確かにおいらも民之亮もちっこいし、ぶくぶく太ってるし、顔も特にかっこいい事ねえしな。

本当は仲間が出来て嬉しいだけだったのか。

やっぱり純粹でいい奴だなあ。

「なあんだ。さっきから変だと思ったら、そういう事だったのか」

「ち、ちげえよ！ 俺は、あの、こ、今年の運勢を、この勝負に」

「顔赤くなってますよ」

「そ、そうですか？！」

「俺も普段兄貴に「クソ都留」だの「チビデブホモ」だの「ゴミクズ」だの言ってますけど、本当は商店街のおもちゃ屋をバイト時代からずっと支えてる所とか、自分なりに人生を楽しんでる所とか、すごく尊敬してるんですよ。だから民之亮さんも、素直になったらどうですか？」

「……そうっすね。都留男、今年も、仲間として、よろしくな」

「おう、よろしく！」

照れながらものすごく恥ずかしそうにだけど、民之亮の素直な気持ちは聞いて良かったな。

夢彦も何だかんだ言っつて、やっぱり兄ちゃんの事が大好きなんだな。

「よおっし、これから皆でうちでおせち食わねえか？」

「ってかお前、コーラ買いに行ったんじゃないのか？」

「あっ、そうだった！　じゃあ皆でスーパーにコーラを買いに行つて、その後うちでおせちを食べよう」

「へいへい」

「新年早々、都留男くんの実家にお邪魔させてもらうのか。何か悪いな」

「いいんですよ、大勢の方が盛り上がるし。なっ、民之亮」

「お、おう」

第21話：本当にすまなかった！

「本当に、すまなかった！」

奴は人ん家のリビングに来るなり、いきなり土下座してきた。

新発売のゲームをやるうとしてたら急に呼び鈴を鳴らしやがって、「どうしても謝りたい」とか言うから、仕方なくリビングに連れてきてやったんだ。

「あの日あの時、お前に声をかけて馬鹿な依頼をして、本当に済まなかった！ もう都留男には何があっても一切近づかない！ これからは、心を入れ替えて生きていく！」

そんな事を俺に言われてもなあ……。

ポテチを食べてコーラを飲みながら、このおっさんにどう反応すべきか考えた。

おっさんと言っても老けて見えるだけで、実は同じ年なんだけど、そんな事はどうでもいい。

「とりあえず、顔上げろよ」

「許してくれるのか?!」

「いや、許すも何も意味分かんねえし」

「え?」

「結局お前、何したいんだよ?」

「そ、それは、その、つ、都留男に何とかアピールを」

「何で本人に直接言わねえんだよ?」

「や、やっぱり恥ずかしいじゃないか」

「恥ずかしいからって見ず知らずの俺に訳分かんねえ事頼むのか?」

おめえ頭腐ってんじゃね?」

「き、君が暇そうに歩いてたから、つい、その」

「暇そうに歩いてたら誰でも良かったのか? ってか、自分の事なのに人に頼らないと出来なかったのか?」

「……す、すまん」

はあ、何でこんなおっさんとこんな馬鹿みてえな話してるんだ？
まあ、自業自得か。

探偵もどきの依頼受けたの俺だし。

「こ、これからは君にも近づかない」

「そうか」

「あのツタ屋敷でひっそりと暮らしていく」

「勝手にしろよ」

「馬鹿な依頼をして、本当にすまなかった。急に押し掛けてしまつて、本当にすまなかった」

「お前さ、謝る事しか出来ねえのかよ？」

「え？」

「昔からあいつの事が好きだったんだろ？ 俺にはどこがいいのか
ぜんっぜん分かんねえけど」

「そ、そうだ」

「じゃあ、直接言えよ！ お前も男だろうが！」

おっさんの顔が急に真っ赤になりやがった。

「で、出来る訳ないじゃないか！」

「うるせえ！ 本をただせばおめえがちゃっちゃと告白しとけばよ
かったんだよ！」

「い、今さらそんな事は無理だ！」

「はあ？ 人を散々巻き込んで今さら無理だと？ ふざけんじ
やねえ！ さっさと告白して、さっさとフラれて来やがれ！」

「い、行くなら一緒に来てくれ！」

「馬鹿野郎！ 何で関係ねえ俺が行かなきゃなんねえんだよ？！
いい大人なんだから一人で行きやがれ！」

「は、はいいい！」

おっさんはそそくさとリビングを後にした。

全く、世話の焼けるおっさんだぜ。

さあて、今度こそ新発売のゲームでもすっか。

ゲーム機の準備をしようとすると、またしても呼び鈴が鳴りやが

った。

「今度は誰だ？」

インターフォンを見ると、はるかが映っていた。

「入っていいぞ」

通話ボタンを押してそう言つと、奴はすぐ中に入ってリビングまで来た。

相変わらずペロペロキャンディーを舐めてる。

「何か探偵のおっさんが慌てて出て行ったけど、何かあったの？」

「「今まですまなかった。もう二度と君には近づかない」とかいう感じで謝つて来たんだよ」

俺は話しながらゲーム機の準備を進めた。

「ふ〜ん。で？ 何て答えたの？」

「「男なら直接告白して来い」つつと都留男の所に無理矢理行かせたんだよ」

「あんたにしては勇ましいわね」

「そうか？」

「で、あんたと都留男の今後は？」

コードをTVに繋ごうとして手が止まった。

「は？ 何の話だ？」

「あんたも都留男の事が好きだったんじゃないの？」

「んな訳ねえだろ」

「前に直接本人に言つてたじゃないの。諦めたの？」

「あのなあ、元々俺とあいつは赤の他人なんだぜ。あのおっさんがもういいつつつてんのに、何で付き合い続けるんだよ？」

「相変わらず素直じゃないわね。本当はこれからも仲良くしたいんでしょ？」

「つつ、うるせえ！」

「顔が赤いわよ」

「た、確かに火照ってる感じはする……。」

「どうせ収入源ないんでしょ。あのおっさんの所で探偵続けてあげ

たら？」

「昔の同僚の沙由理さゆりから小遣いなら来るぜ」

「それは沙由理さんが稼いだお金であって、あんたが稼いだんじゃないでしょ。あのおっさんもあんたと同じで寂しいのよ。おっさんの寂しさを埋めてあげる事が出来て、しかも都留男にも会えるんだから一石二鳥じゃないの」

「ぬああにが一石二鳥だ！ あんな砂山もスライムもカルメ焼きも何もかも俺が教えてやらねえとろくに作れなくて、子供っぽくて、人の話を何でも鵜呑みにして、すぐ「友達だ」とか何とか訳分かんねえ事言つて、同情するような奴俺は大大大っ嫌いだあああああああああ！」

何でだよ。

何で大っ嫌いだって言つてんのに、涙が出てくるんだよ……。

「本当は大好きなんでしょ？」

「うるせえ！ あゝあ、俺この町出て行こうかな？」

「出て行ってどうすんの？」

「実家に帰るんだよ」

「ふゝん。まあ、好きにすれば？」

次の日から、俺は荷造りを始めた。

何が都留男だ！ 何が探偵だ！

俺はもうそんなもん忘れて実家でのびのび暮らすんだからな！

家の中にあるもんをどんどんポストンバッグに詰めていった。

ゲームもマンガもエロDVDも携帯も音楽プレーヤーも服もスナック菓子もカップラーメンも歯ブラシもハミガキ粉も電動カミソリも全部詰めていった。

あゝっ、せいぜいするぜ！

他に詰めてねえもんは何だ？

辺りを見渡すと、ふとラックに並んでるCDが目についた。

ほとんどがCRUSHERSや勝次さんのソコの奴だ。

たまたま都留男の幼なじみで、それがきっかけで会えたんだよな。ライブのチケットタダでもらったり、生で歌ってもらったりしたよなあ。

CDにサインしてもらったりもしたなあ。

わっ、いけねえいけねえ！

都留男の事は忘れるんだった！

あっ、でもこの町を出たら勝次さんにも会えなくなるな。最後に挨拶だけするか。

いや、どうせなら別れのサインをしておらおう。

確か紙とかペンとかはこのラックの横の棚の引き出しにあるはず。引き出しを開けると、何やらビニールに入ったピンクのものが目に付いた。

都留男と出会ったばかりの頃、兵吉さんと三人で作ったスライムだ。

あの時は奴が腹で弾ませようとか言い出して……くそっ！

何で都留男の事を忘れようとしてるのに、思い出しちまうんだよ！

あんな奴の事なんかどうだっていいのに！

もうあのおっさんに情報届けなくていいのに！

大っ嫌いだ！ 都留男もおっさんも大っ嫌いだ！

荷物はこれでいいから、さっさと実家へ帰ろう！

マンションを出て、ポストンバッグを持って駅へ急いだ。

「あっ、大ちゃん」

何が大ちゃんだよ！

どうしてこんな時に現れるんだよ！

そう思いつつも、ふと足が止まった。

「どこ行くんだ？ 旅行か？」

「んな訳ねえだろ！」

「じゃあどこなんだ？」

「お前には関係ねえよ！」

「どうしたんだよ。何かあったのか？」

「全部、全部お前のせいだからな！」

「何の話だ？」

「俺とお前は、元々赤の他人だからな！」

「何なんだよ?! ちゃんと話してくれねえと分かんねえよ！」

あゝつ、もう! めんどくせえ奴だな!

本当は振り向くもんかと思ってたけど、思い切って振り向いた。

「あの変な探偵のおっさんに昨日謝られて、もう探偵もどきも終わつたからお前とは赤の他人なんだよ! 俺はこの町を出て、実家に帰るからな！」

「何だよそれ! 勝手に決めんなよ！」

「勝手にも何も、元々そうじゃねえかよ！」

「大己は勝手すぎるんだよ！」

都留男が鋭い目で睨みつけてきた。

「探偵だからって突き放そうとしたり、探偵じゃなくなったからって突き放そうとしたり、何なんだよ?! もっと自分に自信持てよ！」

「持てるかよ! 三十で会社リストラされて、その後勤めた服屋もフアミレスも潰れて、変な探偵の依頼も受けて、こんなので持てるわけねえよ！」

「恒也の事変な探偵のおっさんって思ってるみてえだけど、あいつがお前に声かけてくれたから俺達も出会えたんだぜ」

「それがどうかしたのかよ? いや、むしろお前なんかと出会いたくなかつたな！」

「恒也の探偵の依頼引き受けたって事は、やりたいって気持ちがあったからだろ？」

「んなもんねえよ！」

「じゃあ何で引き受けたんだよ！」

「そ、それは……」

街をぶらぶらしてるニートの俺なんか声掛けてくれるのが嬉

しかつたし、少しでもかつこいい夢を見たかつたからだ！
勤め先がどんどん無くなって、もう現実なんか見たくなかつたんだ！

夢だけを見て生きていきたかつたんだ！

また涙がボロボロ出て来やつた。

畜生！ 昨日といい今日といい、何なんだよ！

「友達、欲しやつたんだろ？」

「うるせえ！」

「恒也に声かけてもらえたのが嬉しかつたし、おいらとも友達になれて嬉しかつたんだろ？」

「んな訳ねえだろ！」

「それでいいじゃねえかよ。何で本当の気持ちを隠すんだよ。素直になれよ」

「お前なんか、俺の何が分かるんだよ?!」

「そうやっていつまでも殻に閉じこもってたら、誰も分かつてくれねえよ！ もっと自分から心を開けよ！」

くそつ！ 何なんだよ?!

涙が溢れて止まらねえよ！

「何でだよ！ 何でお前そんなに優しいんだよ?!」

「当たり前だろ？ 友達なんだからよ」

「こんな、こんな俺でもいいのか？」

「いいに決まつてるだろ？ 大ちゃんには、大ちゃんのいい所があるんだよ」

馬鹿だ。俺って、サイテーな奴だ。

こんなに良くしてくれる奴を見捨てようとするなんて……。

「都留男、大己くん」

おっさんが深刻な顔で現れた。

「何だよ？ まだ何か話があんのかよ？」

「本当に、すまなかつた！」

おっさんは地面に頭を擦りつけて土下座した。

俺は全力でおっさんを追いかけた。

おっさんはどこまでも逃げやがった。

後ろから都留男と勝次さんの「何だあれ?」「さあ。よく分かんねえよ」「って声が聞こえるが、んなことどうだっていい!

俺は何が何でもぜったってえこのおっさんを許さねえんだ!

第22話：おいらがTVデビュー？！

「いえ〜い！」

ゲームに勝ったおいらは思いっきりガッツポーズした。

「おめえ、このゲーム強えなあ」

大ちゃんはコントローラーを持ったままぼか〜んとしている。

「へっへ〜ん！ 真奈さんの家に来る度にやってるからな」

「そのたんびにゲームの音で起こされるんだけどな」

真奈たんが寝ころびながら、めんどくさそうにあくびした。

「それにしても、この家ホント落ち着くよなあ」「隣にはあとんと相方のきよつちゃんが住んでるんだぞ」

「そうか」

「あつ、やつぱりここにおったか」

きよつちゃんが急に入ってきて来て、どきっとした。

「よ、よう」

「何や都留やん。えらいびっくりして」

「い、今、きよつちゃんとはあとんが隣に住んでる話してたんだ」

「そうかあ。噂をすれば影やな。ん？ そこにおるんは誰や？」

あつ、まだきよつちゃんに大ちゃん紹介してないんだった！

「おいらの友達の大ちゃん。公園で知り合ったんだ」

「よろしく」

「よろしく。俺は朝林清雄ゆうんや」

「何の用だよ？」

真奈たんのぶつきらぼうな声が聞こえた。

「ああつ、実はな、ちよつと頼みたい事があんねん」

「何だ？」

「驚くかもしれんけど」

「そんな驚くような事なのか？」

「都留やん達に、TVに出て欲しいねん」

えっ?!

「て、て、TViiiiiiiiiiii?!

「そうや」

「何の番組だ? この町の紹介でもするのか?」

「いやっ、俺達がやらせてもらってる「サングァー中年」っていう番組やねん」

「知ってるぜ。この時代には珍しい超過酷なロケや超大がかりなどつきりをやる番組だろ? で、たまくに金はそんなにかからないけど、ものすごくくだらない事もやる。「TVはやっぱり、これぐらいくだらないものであるべきだ」って、雑誌とかでも褒められてたぜ」

「見てくれてんねんな、ありがとう」

「その番組で、おいら達は何をするんだ?」

「ちよつと難しいかもしれんけど、葉亜人を騙してほしいねん」

「あいつにどつきりを仕掛けるのか?」

「そうや。知ってる通り、あいつ下ネタ嫌いやし、恋愛に関する話も全然乗ってこうへんから、もしかするとゲイなんちゃうかって思われてんねんけど、それもよう分からんねん。まあ、ゲイなんちゃうかって思われたんは俺がそうやっていう事を言うてるからってのもあんねんけどな」

「で、ゲイかどうかを訊き出すんだな?」

「慎重にやらなあかんぞ」

「そんな大事な役割を、何で俺達が?」

「ああっ、実はな、中のいい同期の芸人がおつて、最初そいつに出てもらおうかと思ってたんや。けど、別の仕事で海外ロケに行つてそこで飛行機のトラブルに巻き込まれてまだ帰ってこれてへんねん」

「そうだったのか」

「そんな訳やから、よろしゅう頼みますわ」

TVかあ。

TVに出たら、ちよつとは有名になるよなあ。

「出淵都留男さんですよね？」

店で仕事していると、男が話しかけてきた。

おいらみたいにぼっちゃりしてて、すんげえかわいい奴だ。

「はい。そうです」

「見ましたよこの間のＴＶ。すごかったですね」

「ありがとうございます」

「あのお、握手していただいてよろしいですか？」

「もちろんです」

握手するおいらと男。

「都留男さん、俺とも握手してください」

「都留男さん、僕のＴシャツにサインを」

「兄弟そろってファンなんです」

他にもぞくぞくと太った男達が押し寄せてきた。

「はいはい、押さないで押さないで」

ぼっちゃりしたおやじやでっぷり太ったおやじからモテモテでウ

ハウハ。

ふふふふふ。

「もちろん引き受けるぜ！ おいらときよっちゃんの仲だろ?!」

腕を両手でがっしり掴んだ。

「あ、ありがとう。都留やんなんか目えキラキラしてるけど、やましい事考えてるんちゃうか？」

「んな訳ねえだろ？ おいらはただ、きよっちゃんの仕事がつまく

いくように手伝いたいだけだ」

「そ、それならええけど」

「俺も手伝ってやるぜ」

「ありがとう」

「真奈たんも手伝うよな？」

「手伝わねえよ」

「TVに出たらそらたるゝさんに見てもらえて、褒められるかもしれねえぞ」

その瞬間ガバッと起きて、すぐに着替え始めた。

カエルがプリントされたかわいいピンクのTシャツに、ちよっと長めの短パンだ。

Tシャツの首元には、黄色のラインが入ってる。

「さっさと行くぞ」

「あれ？ 真奈たんそんなTシャツ持ってたか？」

「持ってたぞ」

きよつちゃんの案内で、おいら達は商店街の前まで行った。

オープニングトークをとらなきゃいけなかったらしく、緊張の中でなんとかと終えた。

「ふうっ、疲れた」

「さっそく悪いけど、葉亜人に連絡してくれへんか？」

「何て送るんだ？」

「漢太さんの協力で男盛食堂を使わせてもらえる事になってるから、そこに来るようにメールして」

「OK」

ポケットから携帯を出して、さっそくはあとんにメールした。

「送ったぞ」

「じゃあ俺は別るところからモニタリングしてるから、都留やん達は男盛食堂に行つといて。ちなみに中の様子は、特別に付けてもらった小型カメラで撮ってるぞ」

「おう」

「あらっ、いらっしやい」

戸を開けると、すんごくめかし込んだ漢太が出迎えてくれた。

蝶の模様の黒と赤紫のドレスに黒い蝶のブローチ、薔薇のピアスに、なぜかセミロングのカツラまで被ってる。

化粧もばっちりだ。

「て、TVに出るからおめかししてる……のか？」

「そうよお。こんな機会めつたにないんだから、女を磨いて美しく映らなくっちゃ」

の、割には元々がっしりしてるから、服がすんげえピチピチになつてるけどな。

「都留男」

大ちゃんが脇腹を突いてきた。

「あいつ男……だよな？」

「こ、心は女だぞ。それと「漢太おねえさん」って呼ばないと張り倒されるから」

「わ、分かったよ」

「相変わらずキモい格好してんな」

真奈たんがカウンター席まで行ってどかつと座った。

「もうっ、真奈たんだけいつつも素直じゃないんだから」

「へいへい」

「あんた達も座りなさいよ」

「う、うん」

「じゃあ、座るぜ」

真奈たんの横に二人して座った。

「あらっ、見かけない子ねえ」

し、しまった！

大晦日の時に色々あつて、なぜか「山口大己さんは絶世のイケメン」って事になったんだった！

ど、どうしよう。

どう見てもイケメンじゃねえし、それどころか体重百キロの巨漢デブだし。

「え〜え〜つと……こ、公園で知り合った友達で、あの、その」

「山口大己だ」

だ、大ちゃんあ〜ん！

仕方ねえな。除夜の鐘つく時いなくて、イケメンだって事になつてるの知らねえ訳だし。

「まあっ、あなたがあの噂の山口大己さん?!」

ひいっ、もう終わりだ! 「どこがイケメンなのよ?!」とか言われて張り倒される〜!

「ピンクの髪も眼もとってもチャーミングだわ」

え? ど、ど、どという事だ?

「よろしく、漢太……おねえさん」

「まあっ、初対面なのに「おねえさん」って呼んでくれるなんて! 都留たん、あなたいい子見つけてきたわねえ」

「ま、まあな。それより、イケメンじゃなくて怒ってねえのか?」

「あゝら、何言ってるの? きつと昔はイケメンだったに違いないわ」

よく分かんねえけど、何気に失礼だな。

「そう、今はこんなにぶくぶく太っちゃったけど、きつと昔は絶世のイケメンだったのよ。それはもう、この世の全ての女とオカマを虜にするぐらい」

「都留男、こいつさつきから何電波発言しまくってるんだ?」

「ご、ごめん。大晦日に色々あつて、大ちゃんはいケメンって事になつてたんだ」

「はあ? 何だよそれ」

「それにしても、真奈さんとそっくりの体型ね。こゝんなにずんぐり太っちゃつて。あんた達二人とも百キロはあるんじゃないの?」

「あ、あるぜ」

「この間銭湯で測ったらあつたぞ」

「不健康ねえ。そんなあなた達に、お姉さんから健康的でおいしいご飯をプレゼント。何にする?」

「おいら、とんかつ定食」

「俺はうな丼で」

「ジャンボチキンカツカレー」

「分かったわ」

漢太は厨房にメニューの名前を伝えた。

そうこうしてゐるうちに、はあとんが入ってきた。

「あらっ、いらっしやい」

「こ、こんにちは」

「どうぞ、座って」

はあとんがおいらの横に座ってきた。

「やったぜ！ 色々話せる！」

「何にする？」

「う〜んとね、親子丼」

「分かったわ」

漢太はまた厨房にメニューの名前を伝えた。

「よおっし！ さっそく話すぞお！」

……でも急に男が好きか女が好きかどうか訊いていいのか？

番組の構成とかもあるだろうし、何よりバレちゃいけない。

「ここはちよつと遠回りして行こう。」

「は、はあとん、今日は、とっても、天気がいいなあ」

「そうだねえ」

「おい」

大ちゃんがまた脇腹を突いてきた。

「いくらなんでも不自然すぎるぜ」

「あ〜っ、そうかあ」

「おめえ、将来について考えた事とかあんのか？」

「将来？」

「結婚とかすんのかよ？」

「ナイス大ちゃん！」

「よおっし！ おいらもこの話題に乗っかるぞお！」

「あ〜っ、おいらも最近結婚したくなってきたなあ。はあとんはどうなんだ？」

「ボク、結婚しないよ」

きっぱり言ったな。

「ってかこんなに早く答え出ていいのか？」

まあ、十五分ぐらいにまとめたら大丈夫なんだろうな。

TVの事はよく知らねえけど。

「どうして？」

「だって、だって……お嫁さん、もらったら……都留たん達と遊べなくなっちゃうんだもん」

ん？ こんな途切れ途切れで言うなんてめずらしいな。

何かあったのか？

「確かに嫁さんを養わなきゃいけないけど、遊ぶ事は出来るぞ」

「う、うん。そうだね」

「やっぱり何か変だ。」

「最近気になってる男とかいるのか？」

「いないよ」

「じゃあ女は？」

「いないよ」

「結局お前、男と女、どっちが好きなんだよ？」

「真奈さんの邪魔くさそうな声が聞こえてきた。」

「女の子だよ」

「やっぱりそうか。」

昔からゲイじゃないような気はしたんだよなあ。

次の瞬間、戸が開いてきよっちゃんとかメラマンが入ってきた。

「グラビアアイドルの子や歌手の子もいる。」

「葉亜人、お休みって聞いたとったやろうけど、実はちゃうで」

「え？」

「サンダー中年やで。葉亜人、全然恋愛の話とか乗ってこうへんからもしかしたらゲイちゃうかって皆思ってた、それを確かめる為に都留ちゃん達にも協力してもらってどっきりやってん」

「そんなのひどいよ！」

「はあとんが力強く叫んだ。」

目から涙が流れてる。

どうしたんだろう？

やっぱり何かあったのか？

「葉亜人、ただのどつきりやんか。これまでも何回もあったやろ？
しかも、これまではバレたらほっとしてたやん」

「だからって、都留たん達まで巻き込んでやる事ないじゃない！
ボク、ボク、お母さんがいなくてすごく寂しいのに、都留たん達
でボクを騙すなんて……わあ〜ん！」

泣きながら立ちあがって、そのままどこかへ走っていった。

「あつ、葉亜人！」

「ちよつと待ちいや！」

おいらときよつちゃんの後を追った。

でもすぐ見失った。

「ごめんな都留やん。まさかこんな事になるとは思わへんかったか
ら」

「いやつ、やましい目的で引き受けたおいらも悪かったよ」

「そう遠くには行ってへんはずやから、この辺探すか」

「そうだな」

おいら達は歩きながらあとんを探した。

「葉亜人、お母さんがいなくて寂しいって言ってたな」

「そやなあ。お母ちゃんとお父ちゃんが離婚したんやったっけ？」

「うん。元々小学生の時から、私立の全寮制の小学校に入れられた
の、自分がお母さんから嫌われてるからって、思い込んでたんだ」
「そうやったんか」

「小学校二年生ぐらいの時に、お父さんがお母さんと離婚して、新
しいお母さんと再婚するって伝えに来たんだ。そしたらもうすんご
い大泣きして、「新しいお母さんなんかいらないっ！ お父さんの
バカッ！」って大声で叫んで、部屋に閉じこもっちゃったんだ。
それから全然お父さんと会ってない。おいらが「お父さん、再婚や
めたみたいだぞ」って言うても「元のお母さんが来るまで会わない

もんっ！」って言い張って、結局そのまま小学校も、中学校も、高校も卒業しちゃったんだ」

「俺、あいつと長い事付き合ってるのに全然知らなかったわ」

「仕方ないよ。清雄が大阪から転校してきたの中学の時だし、そんな話したくないだろうし」

「そやな」

「おいらが葉亜人のお母さん代わりになってやる」って言った事もあつただけど、「都留たんはお母さんじゃないもん！ お友達だもん！」って言われて、しばらく口きいてもらえなかったんだ」

「そりゃそうやわあ。あつ、都留やんおつたで！」

清雄が指差す方を見ると、確かにいか公園のベンチに座ってる葉亜人がいた。

いか公園の中に入って、ベンチまで駆け寄った。

「葉亜人！」

「来ないでよ！」

キツと睨まれた。

こんな表情、初めてだ。

「ごめんな。ちょっと男と女、どっちが好きか訊くだけやってん」

「もうそんなのどうでもいいよ！」

「今日、様子が変わったぞ。何かあつたのか？」

葉亜人の隣に腰かけた。

その隣にきよつちゃんも座った。

「今日、歌代おばちゃんうたよのここに行ってきたんだ」

「歌代おばちゃんって、色好学園の寮の近くに住んでる人で、子供の頃からよく家に遊びに行ってる人だよな？」

「うん。それでね、クッキー食べながらおしゃべりしてる時に都留たんからメールが来て、おばちゃんが「せっかくのお誘いだから行きなさい」って言って、もっと居たかったのに帰る事になっちゃんだ」

「それは悪いことしたな」

「都留さんのせいじゃないよ。それでね、歌代おばちゃん、お母さんみたいに優しくてあったかいからずっと一緒にいたいけど、やっぱりほんとお母さんじゃないから、ほんとお母さんはどこにいるんだろうつて思ってる」

「悲しくなつたんだな」

「うん。結婚しないのはね、ホントはお嫁さんと一緒にいたら寂しくないだろうけど、お嫁さんはお母さんじゃないからなんだよ」

「葉亜人」

「なあに？」

「おいら、葉亜人のお母さんにはなれないけど、お母さんがいない寂しさは埋められるよ。これまでの三十年近くもそうしてきたじゃねえか」

「うん、そうだね。番組めちゃくちゃにしちゃって、ごめんなさい」

「そう言う事はきよちゃんに言えよお」

「ええんやつて。編集で何とかなるやろうつから」

それから数週間が経って、いよいよサンダー中年のおいら達の回が放送される日になった。

「そうかあ。それは大変だったなあ」

収録の時にあった事を話すと、兵ちゃんはしみじみと答えた。

「いつか、はあとんが本当のお母さんと会えるといいな」

「そうだな。あつ、始まるぞ」

オープニングの音楽が流れ、今日の内容が紹介された。

CMの後、緊張の中டுத்தたオープニングトークが流れ、その後男盛食堂が映った。

「漢太の奴、ばつちりめかし込んでるな」

「最初見た時はびっくりしたぜ」

漢太との会話の後、いよいよはあとんが入ってきた！

「おつ、いよいよだな」

「そうだな」

【は、はあとん、今日は、とつても、天気がいいなあ
そうだねえ】

「何だよこれ」

「いやあ、すぐに訊いていいのかどうか分かんなくて」

「難しいとこだよなあ」

【おめえ、将来について考えた事とかあんのか？

将来？

結婚とかすんのかよ？

あゝっ、おいらも最近結婚したくなってきたなあ。はあとんはど
うなんだ？】

げっ！ しまった！

こんな事言つてたの、すっかり忘れてた！

恐る恐る兵ちゃんの方を見ると、やっぱり目の色が変わってる！

「都留男、結婚ってどういう事だ?!」

「いや、あの、その」

「俺みたいなおっさんよりも、若くてピチピチした女の方がいいの
か?!」

「だから、これは、話の流れで……あつ、そうだ！ 今日真奈たん
家に泊まる約束してたんだっ！ じゃあな！」

その場から一目散に逃げた。

「あつ、待て都留男！ 結婚って何なんだ?!」

「ご、ごめんなさああああああああい!!」

第23話：愛は強引に

「どうしよう?」

腕を組むおいら。

「やっぱり警察に連絡するべきだ!」

兵ちゃんがおぶしを作って、燃え上がりながら叫んだ。

「そこまでする程じゃないっすよ」

呆れる大ちゃん。

「でも、このままほっとく訳にはいかねえだろ」

乱蔵も困った様子だ。

おいら達は今、テーブルを囲んである事について話し合っている。それは、最近向かいに引っ越してきた千亜希ちゃんの事だ。

数週間前

「はい」

呼び鈴が鳴り、おいらは玄関のドアを開けた。

「都・留・男」 これからは、いつでも一緒よ」

甘ったるい声と共に、いきなり千亜希ちゃんが抱きついてきた。

「な、な、何の話ですか?」

女の人に急に抱きつかれて、顔が真っ赤になっちまう。

「うふふ　じ・つ・は、ついにあなたの向かいの家に引っ越して来たのよ!」

「ええ〜っ?!」

「あの夏の日、海で運命の出会いを果たしてからずっと決めてたの。いつかあなたの住んでる町に引っ越そうって。あなたが住んでる町がどこかを調べ上げて、下見にも来て、この町の物件を探したら、偶然あなたの向かいの家が売りに出されてたのよ。それを即買い取ったって訳」

「ま、前のお家は、ど、どうしたんですか?」

「それはもちろん、売ったわよ。ああつ、ここで都留男と千亜希の愛の夫婦生活が始まるのね」

「ふ、夫婦って、結婚してませんか！」

「なああああんなんだああああとおおおお！」

声が聞こえ、兵ちゃんが目を三角にしながリビングから現れた。

「千亜希！ そんな事までして、俺の命より大事なかわいい都留男を奪おうって言うのか?!」

「ええ、そうよ。必ずや都留男を大人の女の魅力に目覚めさせてあげるんだから」

「そんな事は絶対絶対許さあああああん！ たとえ神や仏が許しても、この俺が絶対に許さあああああん！」

「何とでも言いなさい。あんたが何と言おうと、二人が結ばれる運命は変えられないわよ」

それからおいらの地獄の日々が始まった。

「さあ都留男、たと召し上げれ」

引越してきてからというもの、千亜希ちゃんはちよくちよく手料理を持ってくるようになったのだ。

おいらの好きなとんかつやラザニアはもちろん、カレーやハンバーグやスパゲッティ、焼き魚や麻婆豆腐やゴーヤチャンプルーに至るまで、様々なメニューがあり、どれも美味しい。

さらにプリンやケーキ、クッキーといったデザートまでついてくる。

でも、正直言ってかなり迷惑だ。

一度兵ちゃんがいる時に来て大騒ぎになってからは、兵ちゃんがない時を見計らって来てるけど、それでも自分の飯ぐらい自分で作りたい。

「きよ、今日は、里芋の煮付けと栗ご飯と蓮根・南瓜のかき揚げなんですな」

「そうよ 秋を感じるメニューよ」

はあ、断りたい。

でも、作って来てくれるものは美味しいし、断りにくいんだよなあ。

家に来るだけならまだしも、店にまで顔を出すからやっかいだ。

「こ・ん・に・ち・は」

「い、いらっしやい」

これほど接客しにくいお客さんは他にはいない。

「ここが都留男の職場なのね」

「そ、そうです」

「あたしにも親戚の子とかいるから、ぬいるぐみでも買っついていこうかしらん？」

「あ、ありがとうございます」

「おや、今日は珍しく綺麗なお姉さんが来られてるんだな」

奥から宙太郎さんが、いつも通りニヤニヤしながら現れた。

「ひい！ 今だけは来ないでくださいいいいいい！」

「あなたは？」

「ここの店長の黒巻です」

「まあ、店長さん。初めまして、井ノ内千亜希と申します」

「出淵とはどういったご関係で？」

「今はただ向かいに住んでいるだけですけど、ゆくゆくはワタクシが妻になりますわ」

よ、余計な事を言うなああああああ！

宙太郎さんも困ってるじゃねえか！

長い付き合いだけど、あんな曇った表情初めて見たぜ。

「そ、そうですか」

この後、裏でちゃんと宙太郎さんに事情を説明したのは言う間でもない。

まあ、宙太郎さんもおいらが浮気なんかするわけないって分かってくれてたみたいだけど。

千亜希ちゃんはやつぱど空気が読めないらしく、その後もちよくちよく店に来ては場を気まづくさせてる。

さらに、こんな事もあった。

はあとんと二人で大ちゃんの家に行った時の事だ。

「あのね、今日はこの間大先輩から「今一番面白い芸人」に選ばれた事を話すんだ」

「おう、それは良かったな」

わいわい話しながらマンションの廊下を歩いてると、やがて大ちゃんの部屋が見えてきた。

「帰れよ！」

激しい音を立ててドアが開き、大ちゃんの荒々しい声が聞こえて来た。

そして、中から突き飛ばされてきたのは、なんと千亜希ちゃん！

「いいえ、帰らないわ！ あなたがあたしの知らない都留男の情報を白状するまで絶対帰らない！」

「いい加減にしろ！」

「ど、どうしたんだ？」

部屋まで近づいて、恐る恐る大己に訊いてみた。

「このクソアマガ、探偵やってたんだったら、都留男の情報を吐きなさい」とか言いやがって聞かないんだよ！」

ど、どこまで迷惑かけるつもりなんだ？

何だか気が遠くなってきた……。

「都留たん、大ちゃん。今日はボクんちでゲームでもしよ！」

「そつだな」

部屋から大己が出てきて、三人で葉亜人の家に向かった。

「ちよつと、待ちなさいよ！」

「人の嫌がる事はしちゃダメなんだよ！」

珍しく葉亜人が、本気で人を睨みつけていた。

大人だけならまだしも、被害は子供にまで及んだ。
公園で、超自と乱蔵と隣町に住む健吾くんと一緒にドッジボール
をしていた時の事だ。

「うわっ、また当てられちゃった」

「ちんたら走ってるからだろ」

乱蔵は呆れた様子でボールを拾った。

「大人になるとどうしても遅くなるんだよ」

「太ってるからじゃなくて？」

健吾くんが鋭い指摘をしてくる。

「うつつ、それもあるな」

「楽しそうね」

この声は！

恐る恐る振り向くと、そこにはにっこりした千亜希ちゃんがいた。

「あたしも混ぜてくれない？」

「な、何言い出すんだ？！」

「うん、い……」

即座に超自の口を塞ぐ乱蔵。

「やめとけ。相当変な女だぜ」

「そうなのか」

驚いた様子の健吾くん。

「お前のワルとはレベルが違うんだよ」

「ワルとかいう問題じゃねえけどな。」

「何をこそこそ話してるのかしら？」

「別に」

「何でもねえよ」

「そう。坊や達も、お姉さんと遊びたいでしょう？」

「おいらと接したいだけだろ。」

「ち、千亜希ちゃん。実は、これから用事があるんだ。おいら、急

に宙太郎さんから店に来てくれって言われたんだ」

「俺もその関係で行かなきゃなんねえんだよ」

「俺は隣町だからそろそろ帰んなきゃ」

「じゃあ、そう言う事で」

その日は何とか誤魔化す事が出来た。

「何とかおいらの事を諦めてもらわなきゃなあ」

「こんなおっさんのどこがいいんだよ？」

乱蔵が不思議そうな目でしげしげとおいらを見てきた。

「こうしちゃいられん！ 今すぐ警察に連絡だ！」

兵ちゃんが立ち上がって電話に向かおうとした。

それをおいらが腕をがっしり掴んで止めた。

「離せよ！」

「おいらがはつきり断るから、そこまではしないでくれ！」

「これは立派なストーカー行為で犯罪だ！ あの女には制裁が必要だ！」

「そうだとしても、あんまり大事にはしないでくれ！」

「断るつつつてもどう断るんだよ？」

大ちゃんがいつものダルそうな目でこちらを見てきた。

「それはもうビシッと断るんだ。井ノ内さん、もうこんな事はやめてください！ はつきり言っつて迷惑です！」

「で、実際に女の前で言えんのかよ？」

「うーん、緊張しそうだなあ」

「じゃあ、俺が代わりに言っつてやるよ」

「いや、ありがたいけど、兵ちゃんだとまた変な騒ぎになりそうだ」

「誰なら言えるんだよ？」

「そつだなあ」

「何で俺になるんだよ？」

乱蔵が不満そうに目を細めた。

いざ、向かいの千亜希ちゃんに言っつべく外に出て来たのだ。

「ここはもうかわいい子供の力を借りるしかないんだよ。一回だけ、

セリフの練習しようか」

「井ノ内さん、もうこんな事はやめてください。はっきり言って迷惑です。僕には恋人もいるんです。いい加減諦めてください」

「乱蔵」

声がする方を見ると、健吾くんが眉間にしわを寄せて、拳を震わせていた。

「俺がちよくちよくお前がいる色好学園の寮まで来るのが、そんなにウザかったのか！」

「ちげえよ。これには色々と訳が」

「男一匹学園の奴のくせに、のこのくんなよって事だったのか！」

「だからちげえって！」

「やっぱり若星町と夜月町の間には壁があつたんだな！」

「何訳分かんねえ事言つてんだよ？」

「ふんつ、どうせ俺はこの辺一帯のガキから恐れおののかれてる程のワルだし、子分だっているし、髪だつて星形に剃ってるから相当ガラ悪く見えるんだろうな！ おめえの事なんか何とも思つてねえよ！ じゃあな！」

「ちよつと待てよ！ 本当に誤解だつて！」

健吾くんと乱蔵はそのままどこかに走っていった。

何かよく分かんねえけど、一人で言うしかねえみてえだな。

「あらつ、都留男」

おおつ、丁度いい所に帰つて来た！

「井ノ内さん。ちよつと話があるんです」

「何かしら？」

「もう、ちよくちよく手料理持ってきたり、店に来たり、町の人に迷惑かけたりするのやめてください！ 皆困つてます！ 僕には男性の恋人もいるんです！ いい加減諦めてください！」

よし、これで諦めてくれるはずだ。

やっと落ち着いて生活出来るぜ。

「都留男」

「はい」

「嫌よ嫌よも、好きのうちね」

え？ ど、どういう事だ？

「そう、愛は障害があればある程育まれるもの！」

わ、訳分かんねえ！

「さあつ、今日も愛のレシピをこしらえて、あなたにお届けする・
わ」

千亜希ちゃんはスキップしながら家の中に入っていった。

諦めてもらうはずだったのに、何でまたさらに燃え上がってるんだ？

もう意味分かんねえよ。

第24話：おいらに隠し子？！

「うわあ〜！ 遅刻だ〜！」

おいらとした事が、寝坊しちまったぜ！

昨日はあとんが出てる深夜の生放送番組を見て、その後に電話で話してる場合じゃなかったあ！

全速力で自転車を漕いで漕いで漕ぎまくって、何とかBIG B ANGに着いた。

店員用の裏口のドアをそおつと開けて、こっそり中に入る。

「ま、まさか」

「そんな……」

うつつ、この仕事を中学のバイト時代から数えて二十年以上やってるおいらが、今さら遅刻なんて凡ミスするなんて！ っていう話題で盛り上がってるんだな。

皆、すまねえ。

「お、おはようございます」

事務室を覗くと、皆一斉にこつちを向いた。

今日は日曜なので、学校が休みの乱蔵と久つちもいる。

「都留男！」

「都留男様！」

「ごめんなさい！ 遅刻するなんて、店員としても社会人としても失格ですよね！ 本当に、すみませんでした！」

その場で全力で土下座した。

おでこが床について、ひんやりと冷たさを感じる。

「何言ってるんだ？ いつも通り、五分前に来れてるぞえ？

顔を挙げて時計を見ると、確かに開始時間の五分前だった。

って事は、ただの早とちり？！

「いやはや、すみません。ただの早とちりでした」

立ち上がって、軽く体を払った。
けど、何だか今日は様子がおかしい。
皆険しい目でおいらの方を見てくる。

「ど、どうしたんですか？」

「どうしたもこうしたもねえだろ」

真奈太朗が珍しく、鋭い眼差しを向けてくる。

「都留男」

乱蔵がこつちに歩いてきた。

「お前、隠し子がいるのか？」

え？ いきなり何言い出すんだ？

「何言つてんだよ。んなもんいるわけねえだろ」

「じゃあ、これは何だ?!」

携帯の画面が勢い良く顔に迫ってきた。

そこには、おいらにそっくりな男の子が映っていた。

「ええっ?!」

「この間うちのクラスに出洩専心でふちせんしんって奴が転校してきて、お前の息子だって言っただよ」

「し、知らねえよ！ 第一ずっと兵ちゃんと付き合ってるんだから、隠し子なんか出来る訳ねえだろ?!」

「都留男様、そうですね。嘘ですよ」

かけるがすぎるような目でおいらの方を見てきた。

「嘘に決まってるだろ」

「ああっ、良かった。僕が知っている都留男様は純粹無垢で一途で、隠し子等とは無縁のほです」

「じゃあ、この写真と俺の今のエピソードはどう説明するんだ？」

一瞬にして石化するかける。

「やっぱり都留男様は隠し子を……そんな、都留男様が隠し子をお作りになられているなんて……うっん」

そのままかけるは倒れた。

「宙太郎さん、こいつ病院まで運んできますね」

「俺も手伝おう」

「そうしてくれ」

真奈太郎と岳一さんはかけるを担いで病院に向かった。

「さあ、仕事始めるぞ。都留男、着替えて来いよ」

「は、はい」

その後普通に仕事が始まったけど、今日は何となく雰囲気違った。

第一、おいらの気持ち治まらない。

あの子は一体誰なんだ？

おいらの子供って、どういう事だ？

ただの他人の空似で、たまたまどこかでおいらの名前を聞いたっただけならいいんだけど。

「都留たん！」

ひいつ、びつくりした！

声が出た方を恐る恐る見ると、葉亜人が驚くほど険しい表情で仁王立ちしていた。

後ろには大己もいる。

「どうしてこんな大事な事をもっと早く言ってくれないのー?!」

「な、何の事だ？」

「とぼけても無駄だよ！ これはどういう事なの?!」

持っていたスーパーパブリックわかぼしを、素早く見せつけてきた。

『出淵都留男、隠し子発覚！ 大特集』

奴はゲイではなかった?! 隠し子騒動の真相を徹底追究!』

「な、何じゃこりゃあああああああああああああ！」

「わざわざ店に行く程の騒ぎじゃねえって説得したんだけど、どうしても本当の事を話してもらって聞かねえんだよ」

「本当の事も何も、こんなもん真っ赤な嘘に決まってるだろ?!」

「健ちゃんが嘘書いてるって言うの?!」

騒動大質問会を開催する事になつてゐるんだ」

な、何だとお？！

騒動自体が意味不明なのに、そんな話が進んでるとは！

勝手にそんなもん開くな！」

立ち上がつて、健介の奴に詰め寄つた。

「お前が隠し子なんか作るからだろ？」

「都留たん！ 今度こそははっきりさせてもらつたらね！」

「必ずや貴様の化けの皮を剥いでやるからな！ 覚悟しやがれ！」

うつつ、葉亜人も漢太も恐すぎるよ。

こうして、大質問会とやらが公民館で開かれる事になった。

「え〜っ、それではただいまより、出淵都留男隠し子騒動大質問会を……」

「何が大質問会だ！ 俺の大事なかわいい都留男に隠し子がいたなんて、許される訳ねえだろ！」

兵ちゃんグステージに上がつて健介に突つかかった。

「この件については俺が都留男とみっちり話し合つ！ 今日のこの集会は中止だ！」

「俺と都留男？ 何言つてるのかしら？」

今度は千亜希ちゃんが立ち上がった。

「皆さん、問題になつてゐる子はワタクシと都留男の子供なのですわよ」

「ええ〜っ?!」

「んな訳ねえからあああああああああ！ 思わず立ち上がつて叫んじまった。」

「じゃあどういふ訳なんだ？ 都留男！」

兵ちゃんの鋭い眼差しが突き刺さる。

「そ、それは……」

「都留男、恥ずかしながらにあたしと都留男の愛の結晶だと話せばいいのよ」

「だから違つてしょう!」

「もうこうなつたら、都留男をステージに上げて追い詰めながら真相を吐かせるしかねえな」

へ、兵ちゃん何言ってるんだ?

「そうね。どうせなら、都留男が嘘やはつきりしない答えを言う度に一枚ずつ着ている物を剥いでいく事にしましょう!」

千亜希ちゃんまで何言ってるんだよ?!

「よおっし! ならば誰か都留男をステージに連れて来い!」

「俺が連れて行こう」

そ、宙太郎さん!

ステージに無理矢理上げられたおいらはなぜか手をバンザイの格好で縛りあげられ、股を開かれて台に固定されちゃった。

「では、質問がある奴は手を挙げてくれ」

いつの間にか兵ちゃんが司会になってる。

なぜか千亜希ちゃんまでステージに上がってる。

「はい。相手の女性は本当に井ノ内さんなのか?」

健介! 余計な事を訊くな!

「んな訳ねえだろ!」

「いいえ、本当よ。罰として、上半身を裸にしましょう」

千亜希ちゃんは制服のボタンに手を掛け、次々と外していった。

「や、やめろよ!」

「あああ、都留男が本当の事を言わないからよ」

「どう考えても嘘だろうが!」

「本当なのか?! 都留男!」

「兵ちゃんまで何言ってるんだよ!」

「袖の部分は切っちゃいましょうか」

千亜希ちゃんがハサミを出してにつこりした。

「や、やめろおおおおおおお!」

袖の部分を切られて強引に制服を脱がされ、ネクタイも取られて

完全に上半身裸にされちゃった。

「都留男、本当の事を言わねえとズボンまで脱がせるぞ」

「だから隠し子なんかいねえってば！」

くうつ！ 何でこんな恥ずかしい思いをしなきゃなんねんだよ？！

「では、次に質問がある人」

「はい。ゲイのふりをしてあたし達に近づいたってどういう事なのかしら？！」

漢太、まだそれにこだわってるんだな。

「ゲイのふりなんかしてねえよ！」

「本当に、ゲイのふりなんかしてないのか？！」

兵ちゃんが鋭い目で睨みつけてくる。

「し、してねえよ！」

「まさか都留男、両方好きとか言い出すんじゃないかねえだろうな？！」

「ん、んな訳ねえだろ？！」

「じゃあ、この騒動は何だ？！」

「デタラメに決まってるんだろ？！」

「ほう。まだそんな事を言うつもりか。やっぱりズボンも脱がせるしかねえみてえだな！」

兵ちゃんはポケットからハサミを取り出し、ズボンを切り取り始めた。

「や、やめるおおおおおおお！」

ズボンまで強引に脱がされ、ついにパンツ一丁にされちゃった。

「さあ、今度こそ本当の事を言うんだ。そうでないとパンツまで脱がせてすっぱんぼんにするぞ！」

「もうやめろよ！」

うつつ、こんな事されるなんて……。

恥ずかしい！ 恥ずかしすぎるよ！

「連れて来たぞ」

乱蔵が入口から入って来た。

その後から例の写真の男の子も現れた。

生で見ると、ますますおいらに似てるような気がする。

違うのは太ってるか太ってないかくらいだ。

「お父さん」

専心くんはおいらを見るなり言い放った。

「ち、違うよ。君のお父さんは僕じゃないはずだ」

「子供が出てきたのにまだ言うつもりか！」

兵ちゃんの鋭い目が恐い。

「お父さん。もうこんな事はやめましょう。隠し子として暮らすのはうんざりです」

「だから、違うでしょう！ 君だって分かっているはずだろう？」

「そうね、お母さんも前から反対してたの」

なぜか千亜希ちゃんが涙を拭いだした。

「お姉さんもこんな馬鹿な事はやめなさいって何度も言い聞かせたのよ」

漢太まで涙をぬぐってる。

何だよこれ。

「だああれええがああ、お母さんじゃあああああ！」

兵ちゃんも怒ってる暇あるんだったら、解放してくれよ。

「さあ、お父さん。今こそ皆さんの前で、真実を話してください！」

「真実なんかないでしょう！」

「もうこうなったら、悶絶くすぐり地獄で何が何でも徹底的に吐かせるしかねえみてえだな」

兵ちゃんはおいらの後ろに回り、猫じゃらしでおいらのわきの下を撫で回し始めた。

「ぎゃーっはっはっははははは！ や、やめろ！ やめてくれええ

えええへへへへへへ！」

「都留男が本当の事を話すまで、ぜってえやめねえからな！」

「あーっひゃっひゃっひゃひゃひゃひゃひゃ！ ほ、本、本当の事

なんかああああはははは、ねえからああああはははははは！」

「おう、やってるな」

夢彦が入口から現れ、ステージの前まで歩いてきた。

「ゆ、ゆめひ、夢彦おおおお！ な、何で、お前がここにいいいいひひひひ！」

「それはもちろん、さっきから喋ってる奴が俺のガキだからだ」

「ええ〜っ?!」

会場が騒然とした。

「どういう事だ？」

兵ちゃんがかくすぐりをやめて、後ろから現れた。

「今まで黙ってたんですけど、実は昔から子供がいるんですよ」

「何でそれ黙ってるんだよ?!」

「おめえがチビデブゲイだからに決まってるんだろ？」

「それだけかよ!?!」

「専心が産まれてから十年間、お前の事はずっと黙ってるつもりだったんだが、やっぱりいつつかり口を滑らせて「チビデブゲイ」

とか言っちゃう事があったんだよ。で、そんな馬鹿な単語を言おうものなら、「チビデブゲイって何?!」ってすんごく食いついてきやがって、ついには「本物のチビデブゲイを見る!」ってすんごい張り切るようになったんだよ」

「で、この町に来たんだな」

「いや、俺は止めたんだよ。ただ、奴が「どうしても生で見たい!」って言って聞かなかったんだよ。そうこうしてるうちに嫁が他に男を作って逃げちまって、会社もクビにされて、どうしようか困る事態になっちまったんだ」

「それも俺に相談しろよ!」

「いや、おめえにこんな事相談する訳にはいかねえだろ？ だからかけるに相談したら、色好学園の寮の管理の求人を紹介されて、面接に行ったら受かったんだよ。で、こいつも本物のチビデブゲイを生で見ただってる事だし、引越すかって事になった訳。でも、十年間も隠してて、今さら普通に紹介するのも面白くねえからためえの隠し子って事にして、驚かせてやるかって二人で話しあったんだ

よ

「お前何で実の兄の俺に言わずに、同級生のかけるには相談してるんだよ?! しかも、面白くないって何だよ?! おかげでこっちは酷い目にあっただぞ!」

「まあ、いいじゃねえか。こいつも生でチビデブゲイが見れて嬉しそうだし」

「うわあ〜! これが本物のチビデブゲイの裸かあ〜!」

専心くんがステージの前まで来て、目をキラキラさせながらおいらの体をまじまじと見た。

「そうだ。せつかくだから、この場をこいつの鑑賞会にしませんか?」

な、何い?!

「夢彦くん。残念だけど、僕の都留男は見せ物じゃ……」

「いい提案だな」

兵ちゃんの断りのセリフを、宙太郎さんが見事に遮った。

「さあ専心くん、好きなだけ生のチビデブゲイの裸を堪能してくれたまえ」

「はい。ところで、ひげのおじさんもゲイなんですか?」

「そうだよ。この町には太ったゲイがたくさんいるんだよ」

「わあ〜、すごいですねえ」

それからおいらは専心くんに思う存分写真を撮られたり、色々な所をベタベタ触られたり、パンツの中を覗かれたりした。

なぜか超自も加わって、二人に好きなようにされちゃった。

「専心くん前から男の人の体に興味あったみたいだけど、知る機会が無かったらしいから僕が色々教えてあげたんだ」

数日後、BIG BANGに来た超自が嬉しそうに話した。

「そうか」

「今度太ったゲイの素晴らしさについて語り合おうんだ」

「もっと子供らしい事について語り合いなさい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9076n/>

都留たんっ！

2011年10月4日03時24分発行